

# 勇者の花と桔梗の花 勇者の章

水甲

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

平穏な日々を過ごす桔梗たち勇者部だったが、何故か違和感を覚えた。

今の自分たちは平穏な日々を過ごしているのか？そして桔梗は思い出した瞬間、新たな戦いが始まるのであった。

勇者の花と桔梗の花の勇者の章です。この素晴らしい勇者に祝福をの主人公の海も登場

目 次

第1話	上里海	1
第2話	忘れていた日常	6
第3話	失った大切なもの	13
第4話	誰のために	20
第5話	戦い再び	25
第6話	記された烙印	31
第7話	戻ってきた日常	35
第8話	悩みとこれからと	40
第9話	不幸を防ぐために	45
第10話	天罰	50
第11話	世界の違い	59
第12話	もう一人の巫女	64
第13話	伝えられない思い	69
第14話	勇者御記	75
第15話	与えられた選択肢	83
第16話	届かない言葉	90
第17話	古のシステム	99
第18話	前日談	107
第19話	友奈の思い	111
第20話	集いし者たち	116
第21話	神々に愛された勇者三人	123
第22話	世界その後	127
第23話	夫婦と子供と	132
第24話	姫野と神宮と	138

第25話 風の悩み

第26話 新部長について

第27話 友奈とのデート?

最終回 勇者よ永久に

# 第1話 上里海

バー・テックスたち天の神との争いが終わり、大赦と天の神を裏切り、勇者候補であつた鈴藤灯華たちを利用した魔王を退治した讃州中学勇者部の勇者たちは平穏な日々を送つていた。

大赦のとある一室では一人の少女は今までの出来事が書かれている報告書を読み返していた。

「……境界の勇者、神宮桔梗。魔王討伐の後、造反神と戦つた」  
長い黒髪で巫女服姿の少女はそう呟くが、回りにいる仮面を着けた人たちは彼女のつぶやきが聞こえないような素振りだつた。

「そして更に別次元の私がいる世界で、新たな可能性を秘めたバーテックスと戦つた」

少女は報告書を机に置き、立ち上がつた。

「平行世界というのは聞いたことがあつたけど、本当に存在するなんてね……あなた達はどう思う？」

少女は仮面の人たちに声をかけるが、誰も返事を返してくれなかつた。

「…………あの返事くらいしてくれないかな？」

今にも泣きそうな声でそう告げた瞬間、仮面の人たちは動搖していいた。何でこう話しかけても誰も返事をしてくれないのだろうか？何、私が大赦のトップの家系で、神樹様の声が聞ける巫女だから？

「乃木ちゃんは楽しそうでいいな……私も讚州中学に行つてみたいな……」

私の一言で余計周りの人達が動搖した。何でこんな風になつたのだろう？はあ、乃木ちゃんあたり遊びにこないものか……もしくは彼女あたりが……

「上里海さんですか？」

どこからともなく声が聞こえた。周囲にいた人たちもその声の主を探していると、私の目の前に白い光の玉が現れた。

「あなたは……天の神様の関係者ですか？」

乃木ちゃんの他に遊び相手の一人、天の神様。彼女と神樹様が和解

した後度々私のところへ来ては話し相手になつてくれている。最初は周りの人達はハラハラしながら見ていたけど、今はそんな事はなかつた。

『いいえ、違います。私は……正直に言つて分かるかどうか微妙な感じですが……言うなれば幸福の女神です』

幸福の女神……聞いたことが無い。もしかして神樹様と融合した土着神の一人だつたり？

「あの女神様、こうして私の所に来てくれてうれしいですが、神樹様から離れて良いのですか？」

下手すれば四国の結界が一部壊れてしまふんじやないか心配でしようがない。

『あの、私は……』

『ちよつと私達があんな集合体の一部になるわけないじゃない!!』

今度は水色の光の玉が現れた。一体何が起きてるのだろうか？

『あの、先輩……お願ひですから』

『この子、本当にあの子と同一人物なの？性別だけじゃなくつて察するのもちがうんじゃないの？』

さつきからこの光の玉は何の話をしているのだろうか？すごく気になるし、回りにいる人たちもどうすれば良いのかオロオロし始めるし……

『えっと、貴方は？』

『私は水の女神よ。本来別世界への干渉は禁じられてるけど、あの天の神もやつてることだし、別にいいわよね』

女神様が禁止されたことをやるのはどうかと思う。というかさつきから気になつていてる女神っていうのは一体何なんだろうか？

『えっと、女神様達は土着神様とは違うのですか？』

『はい、違います。私たちは神格的には土着神の上です。言うなれば天の神と同じ神格を持つています』

『なにせ、崇拜している人間の多さが違うからね』

『はあ……』

何となくわかつたけど、なんでもまたこの女神二人は私の所に現れた

のだろうか？それに同一人物つて何のことだろう？

『すみません、カズマさん。申し訳ありませんがアクア先輩をちょっと…』

『しようがねえな。アクア、少し黙つてよくな』

『ちよつと私だつて女神なのよ。何で黙らなきやいけないのよ』

『いいから、話が進まないだろ』

幸福の女神様の方から男の人の声が聞こえると、水の女神様が一瞬で姿を消した。さつきから何なんだろうか？

『えつと、話を戻しますね』

「はい」

『私と先程の水の女神は言うなれば、そちらとは全く違う世界……平行世界にいる女神なんです』

「平行世界……以前神宮桔梗が訪れたという世界ですね。確かに天ちゃんは自由に行き来しているという話を聞きました」

『はい、そう……天ちゃん!?』

つい、天の神様のことをあだ名で呼んでしまった。だつて友達だから仕方ないもん

『えつと、まあ貴方がおつしやつているとおりです。こちらにはこちら側の貴方もいることは？』

『はい、報告は聞いてます。死んでいるけど女神様の力で勇者にならされているんですね。一度だけ会つてみたいですが……』

『それはいずれ……私がこうして現れたのはこれから先起こる……というよりも天の神が言うには起きていると言うべき異変について話をしにきました』

「異変？そちらの世界とは違い、天の神とは和解し、失った土地の再建をしているので、異変なんて……」

『いえ、もうすでに起きていると天の神は言っています。彼女は異変解決のためというべきか……キメラを倒した時に勇者を連れてきたのだから、そつちもどうにかするべきと……』

何だか幸福の女神様は苦労してるな……というか天ちゃんも無茶なことを……

『とにかく異変は起きているんです。あなた方は忘れているかも知れませんが、何かを忘れているはずです』

忘れているはず？私は回りにいる人たちを見るが、誰も見に覚えがないみたいだ。一体私たちは何を忘れているというのだ？

『天の神はそちら側の勇者なら思い出すはずだと言っています。そして思い出した時、新たな戦いが始まると……』

戦いがまた始まる……また彼女たちに辛い役割を背負わせることになるの

「境界の勇者だけでは駄目でしようか？彼ならば……」

『彼の持つ力では今回の異変を乗り越えるのは無理でしょう。だからこそ天の神は彼に……神樹と私の祝福を受けた彼の力を貸してほしいと言ったのでしょうか』

「…………」

あらたな異変……一体何が起きているの？だけどころして女神様が来たのだから……

「分かりました。私、上里海は願います。現状起きている異変を解決するためには女神様の力を貸してください」

『分かりました。海さん、貴方の願い確かに聞きました。今から祝福を受けた世界より勇者を送ります』

女神様が消えた瞬間、今度は天井を突き破つて何かが落ちてきた。そこには私に似た顔をした男の子がいた。

『あの天の神は……有無を言わさず送りやがって……』

彼は文句を言つてはいるけど、でも私には分かる。彼はきっとそれでも助けてくれるだろうつて……

彼は私に気が付き、驚いた顔をしていた。

「はじめまして、私は巫女、上里海です。貴方は？」

「僕は上里海。勇者です」

私と彼は握手を交わした。そして今起きている異変が何なのか知るべきだ。

讃州中学

僕は屋上で一人絵を描いていた。何でだろう？いつも隣に誰かが一緒にいたはずなのに……

「なんか大切な何かがあつたはずなのに……」

こんな事を感じるのは僕だけなのだろうか？もしかしてここ最近巻き込まれた造反神事件やキメラ事件のせいで、戦いたいという気持ちがこみ上げているのか？

「まさかな…………」

「桔梗くくん」

友奈が屋上の扉の方から僕の名前を呼んでいた。何かあつたのか？

「風先輩が呼んでるよ~」

「そりいえば集中しすぎたな。すぐ行く」

僕は呼びに来た友奈と一緒に部室へ戻るのであつた。

## 第2話　忘れていた日常

「どこ行つてたのよ!!」

友奈と一緒に部室に行くと早速先輩に怒られる僕。ここは素直に言つたほうがいいな

「絵を描いてました」

「あんた……たまに思うけど本当に自由よね」

先輩は呆れながらそう言う中、僕は部室にいる人数を見ると一人足りない気がした。

「園子はまだなのか？」

「そのちゃんは掃除当番だよ。多分そろそろ……」

「遅れました／＼掃除の途中で寝ちゃつて／＼」

掃除中に眠れるなんて、何というか園子らしいな……

「乃木らしいわね……というか桔梗。あんたが絵を書いてる理由って色々とあつたからでしょ」

流石は先輩、鋭いな。魔王討伐の後、造反神との戦い、別世界に現れたキメラ・バー・テックスとの戦いに巻き込まれ、僕はようやく取り戻した日常を満喫するためにこうやって絵を描くようになった。

「どうか桔梗、あんたと園子が自由すぎて、部活動に支障をきたしてるので。そちら辺わかってるのかしら？」

「わかってるよ。灯華と桜が大赦の巫女様の世話係に任命されて、勇者部の人数が減つてるのは……」

キメラ・バー・テックスとの戦いの後、灯華と桜の二人は大赦の巫女様の命令で、お世話係を任命された。そのため学校には来ず、ここ最近は大赦にいる。

たまに行くと二人から愚痴を聞かされたりもしている

「桔梗さんも大赦のお仕事とか大丈夫なんですか？ 確かかなり上の方の役職ですか……」

「僕の場合は夏凜と園子と同じ、卒業までは自由にしてろつて、またまに呼び出されたりとかするけどね」

呼び出されるって言つても、書類整理の手伝いとか巫女様の話し相

手になるくらいだけ……

そういえば巫女で思い出したけど……

「あいつどうしてののかな？」

「あいつって？」

「前に桔梗くんが別世界で会った男の子の勇者だよね。すぐ仲良かつたんだっけ？」

「まあ気があつたからな。あいつとまた会うのは難しいし、連絡も取れないからな……」

今頃あつちでも頑張ってるんだろうなと思いながら、僕は空を見上げるのであつた。

大赦にある私の自室に招いた別世界の私……上里海さん。彼が現状起きているであろう異変を解決するために手伝いに来たみたいだけど……

「顔が同じなのに性別が違うだけで、ちょっと複雑ですね」

「複雑とか言うな。僕なんかちょっとした事情で女の子になつたからな。見た目とかお前にそつくりだつたし……」

「何だか色々と苦労してるんですね……」

「お前も巫女としての役割とか大変だらう」

互いに溜息をつくとそこにお世話係の鈴藤さんと立花さんがお茶を持つてやってきた。

「お待たせしました。海様」

「お客様の……つて海くん!？」

鈴藤さんは彼を見て驚いた顔をしていた。そういえば彼女も神宮

くんと一緒に別世界に行つたんだつけ？

「灯華さん、お久しぶりです。というか何でここに？」

「あ、いえ、今私は海様のお世話係で……」

「彼女たちのことは聞いてるわね」

「ああ、こっちの世界で起きたことは大体……それで今何が起きてるか分かるか？」

彼の間に私は答えられずにいた。今起きていることって……何のことだろうか？現状特に問題は起きている様子はない。

「申し訳ありませんが、心あたりがないのです。鈴藤さん、立花さん、あなた方は？」

「いえ、私達も……」

「灯華ちゃんが別世界に行つたくらいでしようか……勇者部の皆も元気ですかね」

特に情報は得られなかつた。彼もどうしたものか悩んでいた。  
「まあ何かしら起きてることは確実だらうしな……これからどうしたものか……」

「とりあえずお茶を飲みながら、こちらの勇者部の方々のお話でもしましようか？確か……」

私は部屋にある資料を取り出し、読み上げていた。

「結城友奈さん、犬吠埼風さん、犬吠埼樹さん、三好夏凜さん、乃木園子さん、神宮桔梗さん。彼女たちは特に争いに巻き込まれずに平穏な日々を歩んでいますよ」

「…………ちょっと待つた。一人足りなくないか？」

突然彼がそんな事を言い出した。何かしら資料に不備でもあったかしら？

「えつ、あの勇者部は今その六人だけですよ。一人もかけては……」

「いや、待つてくれ。こっちにいない…………わけないよな。桔梗さんが言つてたし……」

彼は何かに気が付き、立ち上がり、部屋から出ていこうとした。私はそんな彼を呼び止めた。

「待つてください。今、自由に動かれると大騒ぎになります。何処に

行こうとしているんですか？」

「確かに大赦には歴代の勇者たちの資料的なものがあつたはずだよな。多分だけどそれにあいつの名前がある……」

「あいつって……一体誰のことですか？」

立花さんの問いかけに彼は私達のことを見つめながら、答えた。

「決まってるだろ。…………」

休日、僕は一人で浜辺で絵を描いていた。だけど何でかわからないけど、何か足りない気がしている。

「特におかしなところないのに……」

『そつか、それだつたら私がなつてもいいよ』

突然頭のなかにイメージが流れ込んできた。何だ？これ……

『素敵な絵を書いてくれてありがとう……』

誰なんだ？この子は……でも僕は彼女のことを探っているはず……とても大切な……

「…………疲れてるのかな。流石にこの季節にこんな場所で絵を描いてたから……」

さつき頭のなかに突然現れたイメージのことは忘れよう。多分今まで大変だったから、今になつて疲れが出たんだろう。

「あの子は一体……」

「あれ？やつほく桔梗くくん」

誰かに声をかけられ、振り向くと友奈がいた。何故かジャージ姿だけ、何かあつたつけ？

「友奈、今日はどうしたんだ？」

「えつ、部活の助つ人に行つてきただよ。さつきまで夏凜ちゃんも一緒だつたんだよね」

そういえば部活の助つ人、頼まれてたんだつけ？僕はてつきり知らないうちにサボちやつたのかと思つたよ

「桔梗くんは絵を描いてたの？」

「うん、ただなんかどの絵も足りない気がしてて……」「足りない？」

友奈に僕は描いた絵を見せた。すると友奈も……

「ちゃんとかけてる……よ。ただ何だか足りないような……」

友奈も僕と同じ感じだつた。この浜辺、海、空の景色なのに何が足りないつていうんだ……

「まあそのうち分かるだらうし、友奈、送つてくれ」

「え、でも、桔梗くんの家、反対方向だよ。悪いよ」

「いいから、じやないと怒られるのは僕なんだけど」「怒られるつて…………誰に？」

そういうえば僕は誰に怒られるのだらうか？ただこいつ時女の子、特に友奈を送つていかないと怒られるような……

友奈も何だかいつもとは違う表情をしていた。

「先輩にか？」

「そう……かもしれないね」

僕は友奈と一緒に帰ることにしたのだつた。だけどさつきの友奈の様子がおかしいことが気になつていた。それに今になつてあの世界に行つた時に言われた言葉が頭をよぎつた。

『すべてを教えるわけ無いであろう。だがもしそれが嫌ならば、忘れないようにするのだな』

忘れないようについて何のことだよ……

僕は友奈を家まで送り届けると、友奈はなぜか隣の家を見つめていた。

「ここ誰も居ないんだよな」

「うん…………でも、何でだろう？誰かが住んでたような……」

「誰かつて誰だよ。それだつたら僕に言つたりするだろう。新しいお隣さんが来たつて……」

「うん……」

友奈は寂しそうな顔をしながら、家に入つていった。何でだろうか？心に空いたこの穴は……僕は……

『忘れないようにするのだな』

あの仮面の男の声がまだ頭のなかに響いていた。

大赦に置かれた資料室で彼は必死に何かを調べていた。彼は何を調べているのであろうか……

「やつぱり…………どれにも書かれてない。なんで……」

「あの何をさつきから探してるんですか？」

「…………ある少女の記録だよ。僕がいた世界でも記録は残してあるはずだ。なのに……彼女だけ何で……」

彼は険しい表情をしていた。一体彼は誰のことを言つてるの？  
「…………」

そして彼はおもむろに端末を取り出すと、白い光の玉が飛び出してきた。

「エリスさん。異変について分かりました」

『そうですか。一体何が……』

「その前に今、そつちに はいますか？」

『え、ええ、いますけど……』

「そつちでは起きてないのか……とりあえず説明しますとかくかくしかじかで……」

彼は女神様に何かしらの事情を説明していた。何の話をしているんだろう？世界からとか、忘れられたとか……

『……まさかそんなことが……ですが……』

「何が起きてるかわからないけど、例のものを送つてくれませんか？」  
『あれですね。カズマさん達に頼んでもう準備は終わっています。直ぐにでも……』

「お願いします。僕もそろそろ合流します」

白い光の玉が消えると同時に彼は私の方を向いた。

「頼みがある。勇者部のみんなのところに行きたいんだ。お前と一緒に」

「えっ、ですが私が外出するとなるとそれなりに時間が……」

「それでもいい。直ぐにでもあいつらの所に行かないと……伝えないと……」

### 第3話 失つた大切なものの

いつもの日常で、僕は何故か違和感を覚えていた。何だろうかこの違和感は……

「あの、桔梗さん？」

「ん？ どうしたんだ？ 樹」

「いえ、ケーキ、切り分けましたよ」

「考えことをしていたから、全然皆の話を聞いてなかつた。ケーキつて、これ樹が作つたのか？」

「どうしたのよ。桔梗がボーとしてるなんて珍しいわね」「色々と考へることがあつて……ケーキありがとうな。樹」

「いえ、味はどうでしようか？」

「うん、悪くないよ」

見た目はちょっと悪いけど、味には問題ないな。樹も頑張つてるんだな……

もらつたケーキを食べ終えると僕以外の皆が最後の一切れに手をやつた。何で6人いるのに7等分したんだ?

「あれ？ 6等分したはずなのに癖かしら？」

「癖つて……風先輩、それつてどうしてですか？」

「えつ、いや……なんでかしら？」

友奈は何が気になつてるんだ？ 7等分したのは先輩のうつかりとかじや……

『……ねえ、今の私たちは……勇者はどんな存在なの？』

『きっと園子と同じ祀られていくと思う』

『祀られる……そんな生き地獄じゃない』

『いや、地獄なんかじゃない。考え方によつては……』

『地獄でしかないわ』

『安心しろ。僕が地獄なんかにさせない。させるものか』

『き、桔梗くん、苦しい』

『つと、ごめん』

『桔梗くん。落ち込んでる女の子に優しくしたいのはわかるけど、不

用意に抱きしめたりするのはいけないとと思うよ』

『ゞ、ゞめん』

『でも、ありがとう』

突然、頭のなかに覚えのない記憶が過ぎつた。何なんだよ。これは……

「きょうくん？ どうかしたの？」

「いや……ちょっとな……」

記憶の中の彼女は一体誰なんだ？ それにこの感覚は前にもあった気がする……これは……

「桔梗、調子悪いんだつたら帰つたら？」

「そうね。土曜の演劇も無理に参加しなくていいわ。あんたの場合、色々とありすぎたしね」

「…………すみません」

夏凜と風先輩の二人に気を使われながら、僕は部室を後にするのであつた。そして部室を出る時、友奈の表情は僕を気にかけるというより、何かしらを感じ取っている感じだった。

大赦の一室で私と彼はお茶を飲んでいた。それにしてもどうして勇者部の一人のことを私は忘れているのであろうか？

「これはバー・テックスの仕業でしょうか？」

「バー・テックスかもしれないし、他にも原因があるんじゃないのか？」  
彼はお茶をすすりながら、そう告げると一枚の資料を取り出した。勝手に資料室から取つてきたのですか？ あなたは……

「300年前、大赦はバー・テックス……天の神に許しを乞うために、巫女を生贊にした。これを奉火の儀つていうらしいのだけど……」

「それは知っています。だけど大赦は……生き残った勇者は神樹の寿

命が永遠じゃないということに気が付き、秘密裏に勇者システムの研究を続け、力を蓄えた。それは私と貴方の先祖である上里ひなた様も関わっていますよね」

「ああ、おね……ひなたさんも乃木若葉さんも……」

でも、何故彼は奉火の儀の話を持ち出したのだろうか？ 今回の件に何か関係でも……。

「今回の異変には大赦側が奉火の儀の執り行つたことが関係してゐるぢやないのか？」

「待つてください！」

大赦が奉火の儀を執り行つた！？ そんな話、聞いていない。それに儀式の目的は天の神に赦しを乞うためのもの……私たちはもう手を取り合つて、失つた大地の再生に取り組んでいるはずじゃ……。

「…………これはあくまで推測だけど、大赦の中には天の神側のことをまだ疑つている人間がいるんぢやないのか？」

「疑う……」

「300年続いた争いがたつた7人の勇者の力で終わらした。だけど一部の人間はまだ天の神側を信じられなかつた。手を取り合つたと見せかけていつか裏切るのではないかと考えた」

その結果、見出した答えは奉火の儀。生贊を捧げることで改めて赦しを乞い、不安をなくそうとしたつてことなの？ だけど……。

「天の神側はどうして……生贊を捧げられたことを言わないんですか？」

？」

「あつちもあつちで不安なんだろう。本当に人間を信じていいのかつて……確かにこっちのバー・テックスは天に召された魂が天の神の住む世界に行き、天の民として住んだりしてゐんだろう。それだつたらいるんぢやないのか？」

「信じられない人たちがつてことがですか？」

「それに天の神を守る十二人のバー・テックスだけじゃなく、集まることで十二星座型のバー・テックスを作り出すことだつて可能みたいだし……」

「だとしても……どうして私の記憶を……それに天の神がこっちでは

なくそちらに来れないのは……」

「それは反対されるのを恐れたからこそ、そうするしかなかつたんだと思う」

「そんな……」

きつと私は奉火の儀が行われていた事を知つたら、反対しただろう。でもだからこそ私達の記憶を……。

「天の神だつて、あつちに行つた隙を突かれて儀式が完全に終わるまで帰れないようにしたんだと思うぞ。だけどちよつと甘かつたのは、あつちには造反神や女神二人がいるつてこと……それに」

彼は腕輪を見た。その腕輪に一体どんな力があるつていうの？「天の神の力のお陰で僕はこつちに制限なくいられるようになれるつていうこと……」

土曜日、僕は一人部屋に閉じこもり、今まで描いた絵を見つめていた。他の絵には特に気になるようなことはなかつたのに、この間描いたこの絵だけ何か足りなかつた。

「何が足りないんだ？」

そう呟いた瞬間、また頭のなかに映像が流れ込んできた。

『忘れない』

『嘘…』

『嘘じゃない！』

『うそ…』

『嘘じゃない!!』

『ほんと？』

『うん。私はずっと一緒にいる。そうすれば忘れない』

『僕もだ。そばに居てやる』

『友奈ちゃん、桔梗くん！忘れたくないよ！思い出したいよ！私を一人にしないで！』

『一人になんかしないさ。なんたつて僕は東郷、お前のことが好きなんだから……』

『泣かないで……もう忘れないから』

『ああ、僕も皆のことを、君のことを忘れさせたりしない』

「ねえ、桔梗くん」

僕はキメラバー・テックスとの戦いを終わらせた後、三森と一緒に浜辺を歩いていた。

「何だ？」

「前に絵を描いてくれたよね」

前つて言うと、夏凜が来る前に描いたような……  
「また描いてほしいなって……」

三森は恥ずかしそうにしながらそんなことを告げた。そんな風に言われると僕も恥ずかしくなるんだけど……

「いいよ。描いてあげるよ」

「それじゃ前と同じ場所で描いてほしいな……」

「ああ、分かった」

「忘れないでね」

「忘れないよ」

僕はすべてを思い出し、机を思いつきり殴つた。何が忘れないだ。  
思いつきり忘れてたじやないか。

「…………くそつたれ!!」

僕は感情のまま叫ぶが、誰にも届かなかつた。そして僕はある場所へと向かつた。僕が思い出したんだ。きっと友奈も……

勇者部が演劇をしている場所にたどり着くとそこには泣いている友奈をそつと抱きしめている園子と何が起きたのか分からぬいた先輩たちがいた。

先輩は僕のこと気につくと……

「桔梗? どうしたの? あんたまでそんな急いで……」

「先輩……友奈、園子、思い出したのか?」

「うん……思い出したよ」

「桔梗くん……私……わたし……」

僕と園子は泣きじやくる友奈を慰めながら、先輩に部室で何が起きてるか話すことを伝えた。

部室に戻つた頃にはすでに夕方になつていたが、友奈は落ち着きを取り戻していた。

「ねえ、あんたらどうしたつていうの?」

「…………みんな、よく聞いて……今あるこの記憶は嘘つてことなの」

「嘘つて……何を……」

先輩、樹、夏凜の三人が驚く中、僕は園子の代わりに続けた。

「僕がキメラバー・テックスとの戦いが終わつた後、何かとんでもないことが起きて……僕らの記憶にそれがなかつたことにされたんだ」「ちよつと待つて、あんたら何を……樹、風、あんたら、桔梗が言つてること分かる?」

夏凜の問いかけに二人は首を横に振つた。やっぱりまだ思い出せないのか……

「みんな、覚えてないの？勇者部にはもうひとりいた事を……東郷さん……東郷三森つて子のことを!!」

「東郷さん……」

友奈が三森の名前を告げたことで思い出したみたいだな。

「そういうえば東郷つてどこに……」

「どうして……私、部長なのに……」

「いつから……桔梗さん、いつから私達……」

「これどういうことよ……」

「私……守るつて、忘れないつて誓つたのに……」

「ゆーゆー……」

皆が悲しむ中、僕は壁を思いつきり殴つた。みんながびっくりする中、園子は後ろからそつと抱きしめてきた。

「忘れないようにならうか。あいつはこの事を……」

「きょうくん……」

「どうやら皆さん、思い出したみたいですね」

「やつとですけどね」

突然扉の方から声が聞こえると、そこには巫女服の少女ともう一人見覚えのある奴がいた。どうしてお前が……

「誰？」

「カイちゃん？」

「園子さん、知り合いなんですか？」

「うん、彼女は上里海。大赦の巫女だよ」

「上里つて……乃木に並ぶ大赦のトップじゃない!!何でそんな人が……それにそつちの奴は……」

「同じ顔……」

皆が上里が来たことに驚く中、僕はもうひとりの方を見つめた。

「海、お前…………どうして……」

「手助けと皆に何が起きてるか伝えにね」

## 第4話 誰のために

僕らが美森のことを思い出したと同時に部室に現れた巫女上里海と同じ顔をした少年……僕はこのことをよく知っている。

「手助けって……ちょっと待ちなさい。まあんたは誰なの？そつちの巫女と同じ顔をしてるし……」

「そうですね。こつちでは初めましてになるかな。僕は上里海。言うなれば別世界の勇者つて感じかな」

「別世界の……」

「ねえ、それって桔梗が前に言つてた……」

夏凜の言うとおり、こいつは別世界の勇者であり、共に造反神やキメラ・バー・テックスと戦つたこともある。

「海……お前、どうしてここに……」

「そうだね。まずは現状何が起きてるかの説明をするべきだね」

海は語り始めた。自分の世界に天の神が訪ねてきたことを……

「天の神は僕がいる世界にちょっととした用事で来たみたいなんだけど、まあ用事というべきかなんというか……」

何となく察しがつく。あの女神を誂いに来たのだろうな。というか別世界の天の神は何も言わないのかよ

「天の神が帰る時に、異変が起きたんだ。何故か天の神が元の世界に帰れないっていうね」

「それじゃ天の神様はカイくんのいる世界にいるんだね」

「ああ、何が起きているのかわからぬみたいでね。そこで天の神はある方法で僕をこの世界に送り込んだ。異変を解決のためにみんなの手助けを……」

「ちよつと待つて、海くんは東郷さんがないくなつた理由を知つてるの？私……忘れないって約束したのに……」

「友奈、僕にも原因がわからない。ただ何かしら大赦が関係してるみたいだからな」

「だから私がここにきました。勇者部の皆さん、今回の件についてはまだ調査中ですが……悪意を持った誰かのせいというわけではない

どうことは断言できます」

上里がそう言う中、僕は部室を出ようとした。

「ちょっと桔梗。あんたどこに……」

「何が起きてるのかわからない以上、出来ることをやるだけだ。探してくる」

僕はそう言つて美森を探しに行くのであつた。きつとこの世界の何処かにまだいるかもしねれない。

「桔梗……あいつ、私達も探しに行つてくるわ」

先輩たちがそう言つて部室から出ていった。確かに桔梗さんの言うとおりまだこの世界の何処かにいるかもしねりなけれど……

「どうしましようか？改めて大赦の幹部に聞いてみますか？」

「それだつたら私も行くよ／＼もしかしたら誰かが隠し事をしてるかもしないしね」

上里家と乃木家の二人か……何だか話しかけられた人は可哀想だな……子供とは言えトップ二人だし、下手なことをすれば首が切られるかもしねないしな。

「あんまり脅すなよ」

「脅しじゃないよ／＼お話を聞くだけだよ／＼」

「そうですよ。それにあなたが言つていた推測が正しければその痕跡もあるだろ／＼しね」

二人はそう言つて部室から出ていった。何というかこの二人だけは怒らせないほうがいいな。さて僕は……

「…………奉火の儀が関係してるとしても皆の記憶からいなくなるつてことはあり得るのか？」

僕は端末を取り出し、ある人に連絡を取つた。あの入ならそこら辺詳しいだろうけど……

勇者部の皆で探し回つたけど、結局美森の姿形どこにもなかつた。それに写真や樹が持つていてる応援の紙にも美森がいたという痕跡がなかつた。

「何ていう質の悪いいじめなのよ」

「東郷さん……」

全く見つからず、僕らはただ暗くなるだけだつた。だけどその時部室に園子と海の二人が入ってきた。

「改めて大赦本部で話を聞いてきたけど、みんな震えながら知らな  
いって……こうなつた以上コレに頼るしかないみたいだね」

園子は持つていたケースを机の上に乗せ、開けるとそこには勇者端末があつた。

「園子……まさか」

「ケースの中には端末が6つあつたはずなんだけど、ほらわっしーの  
分がない。だけど私の端末には反応がないっていうことは……」

園子は頷きながら端末を見せた。確かに反応はない。だとしたら

……

「壁の外!」

「東郷はぶつ飛んでるからありえるわね」

「そう、だから皆で勇者になつて探しにいこう」

美森が壁の外にいる。それだつたら僕は迷わない。僕と友奈は同時に端末を取ろうとしたが、先輩と夏凛の二人が止めに入つた。

「待ちなさい」

「そうよ。あんたら少しは待つたほうがいいわ」

「でも」

「先輩、夏凜。止めるな」

「部長として私はみんなをおいそれと変身させる訳にはいかないの」「僕は何度か変身しました。だから……」

「それは特例みたいなもんでしょ。あっちでは満開も散華もなかつたみたいだけど、今回、何が起きるか……」

「乃木、あんたもね」

僕と友奈は二人の言葉を聞き、改めて考えることにしたのだつた。これから先何が起きるかわからぬ以上、そして先輩も前みたいに皆に辛い思いをさせたくないから……

「そうだよね。二人の言うとおりだよ。でも今回はちゃんと私が聞いて、全部話してくれた。大赦も今後何も隠し事をしないって……だからこそ昨日カイちゃんがここに来たんだと思うよ。皆に信じてもらうために……」

大赦のトップでもあり巫女である人間がここに来たことにそんな意味が……それだったら僕は……

「信じる。僕は大赦を信じる」

「私も……信じる」

皆が端末を取り、大赦の言葉を信じ、美森を助けに行くつて……  
「あれ？ 海さんは……」

樹が海の事を心配そうにしていた。海の分の端末がないことが気になつてゐるだろうけど、こいつの場合は僕らよりかなり特殊だ。

「僕は大丈夫。皆とは違つて専用の端末があるからな」

海は端末を取り出し、白い衣装に身を包んだ勇者に変身し、みんなも勇者に変身した。

園子は改めて今回バージョンアップした勇者システムを説明した。

ゲージが最初から溜まつてゐる状態だが精靈がバリアで守る度にゲージはなくなる。ゲージも回復することもない。満開はゲージが溜まつてゐる状態なら使えるけど、一気にゲージを消費してしまい、更にゲージがない状態だと攻撃を受けた瞬間、死に至ることもある。

「きょうくん。天神刀は逆にゲージがなくなつた状態でしか使えないから気をつけて……」

「分かった」

「それとカイくんの場合はどうなの？私達とはぜんぜん違う感じだけど」

「僕の場合は精霊のバリアは完全に守ってくれることはない。バリアを破られることがあるけど……おまけに満開も使って、散華も一日経てば戻る。だけど使用は一日一回だけ」

「ちょっと待つて、それってあんた、一番危ないんじゃ……」

「その分、僕の場合、西暦時代の勇者が使っていた力もある。それに命がけっていうのはなれてるからね」

「なれてるつて……」

「先輩、夏凜。こいつが言っているのは本当のことだ。こいつがいる世界はかなり特殊だからな」

魔物とか戦ってる分、こいつの実力は多分園子と同じくらいだ。それに手助けに来た人間を待機させるっていう訳にはいかないからな

「それじゃ皆、行こう!! 東郷さんの所に」

## 第5話 戦い再び

僕らは四国の壁の近くに来ていた。ここからしか壁の外に出られるけど……

「にぼつしー、あんまり前に出過ぎないでね」

「わかつてるわよ。無茶はしないわ」

園子と夏凜の話が聞こえてきた。夏凜が使つてゐる勇者システムつて確か銀が使つていたものなんだつけ？

すると海があることを聞いてきた。

「こつちでは銀は？」

「死んで、今は天の神の補佐として頑張つてるよ」

「そつか……」

海がいた世界でも銀は死んでるけど、一緒に頑張つてるだよな。後で色々と話したいけど、今は美森を探さないとな。僕らは壁の外へと行くと、抜けた先は炎の海に包まれていた。

「これが壁の外……話に聞いてたけど本当に酷いな」

「何よ。あんたは見たことなかつたの？」

「色々とあつてね。樹海にも行つたことはなかつたし……」

「あんた、どういつた経緯で勇者になつたのよ」

「そこら辺は後で話すよ。夏凜。今は……」

「見つけた!!」

園子が端末で美森の居場所を探しているとどうやらすぐに見つかつたみたいだ。やつぱり壁の外にいたんだ。だけど、美森がいる位置を見るとそこはただの炎の海だけだった。

「何処にいるんだろう？」

友奈があたりを見渡していると空の上にあるものに気がついた。空の上には黒い球体が浮かんでいた。まさかあれって、ブラックホール？

「東郷さんが……ブラックホールになつてる」

「久しぶりにあつた友人がブラックホールになつてたなんて初めてだわ……」

「すごいな。こつちの東郷はブラックホールにもなれるなんてな」

「お姉ちゃん、海さん……」

「ちょっとまずいわよ。敵が現れたわ!!」

「敵って、話せば……」

確かに話せば僕らを連れて行ってくれそうだけど……何だか沢山の星屑が僕らの方に迫ってきてないか？

「東郷がいる場所を守つてることだな。それにあの進化体も、見る限り集まつて出来たやつみたいだし」

海がそう言いながら、白い刀、白月を取り出して迫つてくる星屑を切り裂いていく。

こうなつた以上、戦いは避けられないか。

「ちょっと海、あんたバリア脆いんだから無茶しないで」

「先輩、分かつてますよ!!」

海は迫つてくる星屑を切り裂いていくが、敵の猛攻が止まらない。すると海は立ち止まり……

「借りるぞ！樹！」

「えっ!?」

海は樹の武器を取り出し、星屑を一体縛り上げ、他の星屑にぶつけた。更に武器を友奈の武器へと変え、殴り倒していく。

「ちょっと待つた。何で樹の武器と友奈の武器を使えるのよ」

「先輩、コレが僕の力ですよ。他の勇者の武器が使えるつていうね。おまけに満開時もみんなの力使えるし」

「海さん、すごいです」

「でもそれって、武器に振り回されそうね。ちゃんと使いこなしてるの？」

「一応はね。それであそこまでどうやつて行くんだ？」

海の言うとおり、美森がいる場所は空の上、僕らじや行くすべが……

「それだつたら私におまかせ。満開!!」

園子から眩い光が照られたと同時に、巨大な船が現れた。アレが園子の満開……

「ちよつと乃木、いきなり満開なんて……精霊の加護を受けられなくなるのよ」

「昔はバリアなしで戦つたから大丈夫だよ、ほら、みんな乗つて、わっしー行の船に」

園子、しようがない。僕らは船に乗り込み、美森のいる黒い球体へと目指すのであつた。

「かつこいい船です」

「でしょ？」

「なんか東郷とあんた二人の満開するくない？」

「ちよつと一番かつこいいのは私のよ」

そんなことを話しながら黒い球体近くまで行くと暴風に巻き込まれ、振り落とされそうになつた。

「くそ」

「あの中で何が起きてるの!?」

すると球体周辺から何体もの集合体バー・テックスが現れ、僕らに向けて攻撃してきた。

「この状況で……」

「仕方ない。僕も手伝うか」

海は船から飛び降り、眩い光とともに神秘的な白い衣装に姿を変え、更には園子と同じ船を出現させた。

「僕が突破口を開く!! そのつちはみんなをあそこまで……」

「カイくん……大丈夫?」

「大丈夫だ」

そう言つて、船を敵の中心へと突撃していき、僕らの道を切り開いてくれた。

「あいつ……」

「夏凜、信じてやれ。世界は違うけど、あいつも勇者部の一人だ」「…………そうね」

僕らは海が作つてくれた道を通り、黒い球体の真上までたどり着いた。

「桔梗くん、行こう」

「ああ、みんな後は……」

「仕方ないわね。行つてきなさい。桔梗、友奈」

先輩の許可ももらい、僕ら二人は黒い球体の中に入るのであった。黒い球体の中に入つた瞬間、僕らの精霊が飛び出してバリアを張つてくれていた。ブラックホールみたいなものだからこの中は重量の中だ。バリアなかつたら押しつぶされていただろうな。

そして黒い球体の中を通り抜けるとそこは今まで見たことのない景色が広がつていた。それに僕らの体も何だか半透明になつてゐる

「ここは……ぐう!!」

「桔梗くん、うつ」

どこからともなく降り注いできた敵の攻撃を受けると受けた場所が紅く染まつた。これは……

「見て、あそこに私達の体が……」

「今の僕らの姿は精神体みたいなものだな。しかもこの傷が全身に行き渡つたら……」

「私達……」

死ぬかもしれないけど、僕らはここで諦める訳にはいかない。そう思つた瞬間、どこからともなくシャボン玉みたいなものが降つてきた。

「これ……」

「美森の……」

僕と友奈の二人はシャボン玉に触れると東郷の記憶が流れ込んできた。

それは僕がキメラとの戦いを終わらせた後、美森の元に大赦の使いが現れた。美森が壁を破壊した影響で、崩壊した世界の炎の勢いが強くなつた。いずれ炎は四国を飲み込むであろうということも……

「これつて……」

「東郷さんの記憶……これも……」

大赦と天の世界の民は炎の勢いを止めるため、奉火祭を執り行うしかないという話になつた。今回の件については天の神も十二人の護衛には話さず、天の民の一部が望んだことらしい。

いつか責任を取らないといけないと思った美森は、奉火祭の生贊を自ら望むのであつた。普通なら生贊には巫女が必要だが、美森には勇者の素質と巫女の素質を兼ね備えているため、美森でも生贊になれる。

そして美森はある事を神樹様に願つた。

「きっと私がいなくなつたら、勇者部の皆が私を探すだろう。だから願わくば私がいなかつたことにしてほしい」

僕と友奈は記憶を見終えると、僕らは顔を見合せた。

「美森の奴……」

「東郷さん、どこまでも突つ走るね……それに桔梗くんと同じことを……」「人つて本当に似た者同士だね。お似合いだね」

「お前と……いや、何でもない」

危うく友奈と海の事を言いかけた。下手なこと言つたら面倒なことになりかねないからな。

「しようがない。助けに行くか」

「うん、私たちは決めたもんね。何度だつて助けるつて!!」

僕らは更に奥まで進むとそこは灰色の世界、その中心に炎に包まれた何かと黒く染まつた東郷の姿があつた。

「東郷さん!!」

友奈が東郷に触れようとした瞬間、咄嗟に手を離した。もしかしてコレに触れるだけでも僕らの体は……だけど

「友奈、一緒に」

「うん」

僕と友奈の二人で東郷を引き抜こうとするが、何故か胸に痛みが走つてきた。だけどこんな痛み……

「東郷さん!!」

「美森！」

「必ず助ける!!」

## 第6話 記された烙印

無事美森を救つた僕らは、病院で美森が目覚めるのを待つていた。皆は特に怪我もなかつた。ただ海だけは散華の影響で左腕の機能を失つたが……

「明日くらいには治るから、あんまり心配するなよ」

「でもさ、あんた、治るからつて無茶しそうよ。乃木もね」

「ごめんね！」

「とりあえずこれで終わつたんだ。天の神も戻つてくるだろうしな」

僕は皆に少し席を外すといい、トイレへ行くと胸に記された痣を見た。これつて確かあの時美森の胸に刻まれていた……

「終わつてないのか……」

僕はそう呟きながら、トイレから出していくと友奈が僕のことを待つていた。

「どうしたんだ？」

「……桔梗くんも何だね」

「ああ」

あの時美森を救つた時に僕と友奈の二人にあの痣が移つたつて言うことなのかな？おまけにこの痣は……

「きょうくん／＼ゆ／＼わ／＼しーが起きたよ／＼」

園子が僕らを呼ぶ声が聞こえ、僕らは急いで病室へと向かうのであつた

「……友奈ちゃん……桔梗くん……」

「東郷さん、良かつた……」

「私……」

「全く似たようなどやつて……」

僕はそつと美森の頭を撫でると美森は泣きそうな顔をしていた。

「ごめんね……こうするしか方法がないつて思つて……」

「東郷さん、謝るのは私の方だよ。忘れないつて言つたのに……」

「僕もだ」

「ううん、二人共気にしないで……それにごめんなさい」

美森は泣きながら謝り続けるのであつた。今は癌のことを気にせず、こうして勇者部が全員揃つたことを喜ばないとな。

「そうだ。美森、紹介したいやつが……って海は？」

「ありや？さつきまでいたのに……」

「カイくんなら出ていったよ何だか誰からか連絡が来たみたい」

「カイくん？」

「お前を助けるために手助けに来た別世界の勇者だよ」

## 海SIDE

「こつちで起きていたことは全部終わつたよ」

東郷も無事救出できた。それと同時にエリスさんから連絡が来たため、僕は病院屋上で話していた。

『そうですか、でも……』

『でも？』

『すべてが終わつたのなら、天の神は直ぐ様そちらに戻るはずなのに……』

『ちょっとウミ、早くどうにかしてよ私の酒がく』

どうやらまだあつちに天の神がいるみたいだけど、あれ？これで終わつたんじや……

『やあ、女神の勇者。話は聞いたよ』

「あんまり天の世界の住人を怒つてやるなよ。あいつらだつて世界を滅ぼさないように……」

『わかってるよ。それにしても奉火祭……人間が我らの赦しを得ようと行つた儀式がまだ続いてるなんてね……』

「そういうえべちよつと気になつたんだけど、今回の壁の外の炎の勢いが強くなつたつてことなんだけど……僕らの世界でそんなこと起きて無くないか？」

『ああ、それなら簡単だよ。こちら側の天の神に話を聞いたたら、壁の外の炎はとある人間の遺体を利用して、奉火祭を行つたみたいだよ』

話を聞いた瞬間、僕はその遺体が誰なのかすぐに理解した。ああ、

そうか……その遺体つて……

「…………上里の家だしな。男でもそれなりの力を宿してればな」

『だからこそ、こっちでは炎の勢いは弱くなつたままだ。似たようなことは起きない』

それならいいのだけど、もし起きたら起きたで勇者部と何だかんだけで皆も手伝ってくれそうだし……

『そういうえば何で戻れないんですか？ 僕も早く戻つて……』

『さあね。まだ終わつてないからじやない？ それが終わるまではね

……』

終わつてないか……

『それと女神一人に頼んだ例のものはまだかかるみたいだよ。まあ使う必要がなければいいけどね』

天の神はそう言い残して、通信を切るのであつた。終わつてないつて、これから何が起きるんだ。だけど何が起きようとも僕は……。『……もしかしたらアレを使う必要があるかもしれないしな』

しばらく時間がかかるとのことだつた。天の神が戻らないことには自分も元の世界に戻れないという話をしていた。

「そうか、だけどその間どうするんだ？」

「適当に過ごすよ。大赦からも許可貰つたし……」

「いやそういうじゃなくって、住む場所だよ」

僕がそう聞いた瞬間、海はしまつたという顔をしていた。まあ前みたいに僕の部屋に泊まればいいのだけど……

「大赦から用意とかされてないわけ？」

「すぐに戻れるかと思つてたんだけど……今から頼んでもすぐには準備できなそうだしな……」

「それだつたら私の所にお泊りする？」

友奈がそんなことを言い出した瞬間、美森から殺気が漏れ始めた。いや、友奈、僕の所に泊まれば……

「いや……友奈。それは……僕、男だぞ」

「でも、泊まる場所ないんだよね。そんな困つた人放つて置けないから……それに、海くん、桔梗くんと同じ信じてるから」

友奈が笑顔でそう言うのであつた。僕は海の肩に手を置き、

「頑張れ」

「…………はい」

こうして美森救出は終わりを告げるのであつた。そして海は帰るまでの間、勇者部臨時部員としてこちらの世界にいることとなつたのだつた。

## 第7話 戻ってきた日常

僕らは今勇者部の部室でクリスマスツリーの飾り付けをやつていた。美森が無事に戻ってきて、ようやく平穏な日常が始まつたのだけど……

（酷い痛みがあるわけじゃないけど……どうにも気になるな……この癌は一体……）

あの時美森を助けた後に僕と友奈の二人にこの癌が刻まれた。まさかと思うけど、僕と友奈は美森の役目を代わりに背負うことになったのか？

（みんなに話すべきだよな……）

僕はみんなと一緒にクリスマスツリーの飾り付けをやつている友奈を見るが、いつもと変わりない笑顔の中に何か思い詰めた表情が見えていた。皆に話すべきか悩んでるみたいだけど……今はこの日常を楽しむべきじゃないかと言うべきか……

「所でさ。風のあの眼鏡……何？」

夏凜が先輩の方を見ながら言うのであつた。先輩は眼鏡を掛けて問題集とにらめっこをしていた。

「最近視力落ちたみたいで……」

「頑張ってるんだね」

「ほら、先週色々とあつたから取り返さないとね」

「陳謝!!」

突然土下座をする美森。自分のせいだと思つてゐるんだろうけど、気にしそぎだろ

「まあ、ブラックホールとか色々とあつたからね」

「陳謝!!」

今度は腹切しようとしているし、というか精霊も介錯しようとするなよ。

「美森、気にしすぎ。先輩の場合は合間にやつていれば問題なかつたんだから……」

僕はそつと美森の頬に触れながら、そう言うと何だか恥ずかしそう

にしていた。

「桔梗くん……」

「あれ？ストーブ効きすぎじゃない？物凄く熱いんだけど……」

「わっしーときょううくんラヴラヴだね、一時間位外に出てようか？」

「一時間で何を……」

園子、頼むから変なこと言うなよ。あと樹は察しなくていいから

すると電話をしていた海が戻ってきた。勇者部臨時部員になつたのだけど、まだ住む場所が決まってないみたいで、今は友奈の家に厄介になつてる

「海、大赦と連絡取れたの？」

「一応は……色々と住む場所が決まらないみたいですね」

大赦にしては対応がおそすぎるような……このままだと海が帰る頃まで決まらなかつたりして……

「海くん、わかってると思うけど……」

「わかってる」

美森が何か言う前に答える海。多分だけど『友奈に手を出したら』

的なことなんだろうけど、美森、こいつの場合色んな意味で手遅れかもしねれないな

「そういうえば気になつてたんだけど、あんた、別世界の勇者にしては精霊の姿ないし、樹海とか壁の外のこと知らないっていうのはどういう事なの？」

「あー、それは……」

正直に言うべきことなのだろうけど、海は何か悩んでいた。確かにこいつの場合、本当のことを言つたら今の空気をぶち壊しかねないからな……

「カイくんの事情はふーみん先輩の女子力と一緒に置いといて……」

「ちょっと一緒に置かないでくれない!?」

「これだけ出来れば、大丈夫だよ、もし何かあつたらきょううくんも手伝つてくれるしね！」

「僕も手伝う前提なのか……」

「カイくんの事情は聞かないほうがいいと思うしね~」

皆に聞こえないよう僕だけにそう言う園子。気がついているつて言うことなのか?いや、海が自分から言うわけないし……感の鋭い園子のことだから何となく察したのだろうな。

「そうね。乃木のおかげよ。来週は来週で樹のショーもあるし」

「お姉ちゃん、私のショージやなくつて、街のクリスマスイベント、学生コーラス」

「樹ちゃん、学校の代表に選ばれたんだもんね」

「風邪を引かないようにベストコンディションでいかないと」

「健康、健康、健康、健康」

美森と園子の二人が樹にアルファ波を送り始めたけど、それ本当に効くのか?だけどこうしているとようやく日常に戻ってきたんだな……

この癌のことももしかしたらそのうち何とか成るかも知れないし、気にしないでいよう

「あ、あのね。みんな……」

そう思っていた時、友奈が皆に何かを言おうとしていた。もしかして癌のことを話すつもりか?

「えつと……キリギリスの借金を内緒でアリが肩代わりしていました。そしたらどうなつたでしょう?」「なにそれ?」

「答えは?」

「私にもわかりません」

ちよつとした例えで皆に癌のことを言おうとしていたのだろうけど、それだと逆に分かりにくい気がするぞ。友奈

「何かの問題?」

「う、うん、クイズのコラムを作ろうと思つたんだけど……」

友奈自身、一人で抱え込みたくないのだろうな。仕方ない。僕の方で言うべきだな。

「あの、みんな……実はあのと……」

僕と友奈の身に起きたことを話そうとした時、皆の胸にあの癌がで

き始めているのに気がついた。僕と友奈は顔を見合させ、もう一度見ようとしたが癌は消えていた。これって……

「桔梗くん……」

「ああ……」

「……………」

まさか……いやそんなことがあるわけ……

「上里海です。やつぱりというか当然というべきなのでしょうか……友奈と桔梗さんの二人は何か隠しているみたいですね」

『そう……悪いわね。別世界のあなたにこんな事を頼んで……』

「こいつは前からやっていますから……嫌ですけどね」

『こちらも彼らに伝えるべきかどうか話し合っています。しばらく監視を続けてください』

僕は電話を切り、ある人物に相談しようとしていた。本当のことを話してくれるかどうか……悩ましいけど……

「それでいつまで様子見してつもりなんだ？」

いい加減僕のことを監視している人が誰なのか突き止めるのが先だな

「バレちゃったか……」

物陰から出てきたのはフードをかぶった少女だった。だけどその声には聞き覚えがある。そういえば言っていたな……

「こつちでは初めてだな」

「うん、初めましてだ。そつちの私は元氣?」

「元氣だよ。それで何の用だ?」

僕の問い合わせに答えるかのように少女はフードを取った。予想通り彼女は三ノ輪銀だった

「十二人と話し合って、決めたんだけど、このままだと……」

僕は銀から告げられた言葉を聞き、驚きを隠せないでいた。やっぱ

りあの時感じたものは……

「本当に厄介だな」

## 第8話 悪みとこれからと

友奈S I D E

桔梗くんと一緒に私達に起こっている事を話そうとした時、みんなの胸にあの痣が出てくるのが見えた。

二人で東郷さんを助けた時に、お役目は私と桔梗くんの二人に引き継がれた。この事を知つたらきっと東郷さんが悲しむ。折角今、皆が揃つて楽しいのに……

「どうすれば……」

一人で思い悩んでいる時、扉をノックする音が聞こえた。もしかして……

「……友奈。今大丈夫だつたか？」

「海くん……うん大丈夫だよ。どうしたの？」

何故か心配そうに私のことを見つめる海くん。 そういうえばあの時、皆に痣ができそうになつた時、一人だけ違つた。

「いや、何だか元気ないから……」

海くんだけがあの痣ができなかつた。 どうしてなのかわからない。もしかしたら海くんは別の世界の人間だから? それだつたら海くんに話しても……

「あ、あのね……実は……」

海くんに話そうとしたけど、私はすぐにやめた。 もしかしたら海くんだけ見えなかつただけで、実はあの痣が出てきていたのかも知れない。

もしそうだつたとしたら……

「友奈?」

「えつと……海くんがいた世界の私達つてどんな感じなのかなつい。  
?」

「僕の世界の皆? 変わらないよ。ここにいる友奈や勇者部の皆、変わらない」

海くんは嬉しそうに話していた。 変わらないか……でももしかしたら海くんの世界の私はこんな風に悩んだりしないんだろうな……。

「そつか……私たちは私達なんだね」

「……それで他に何かあるのか？元気がない理由にはならないだろ」

「え、えつと……」

「無理には聞かないよ。でも辛くなつたら皆を頼れ。それくらい出来るだろ」

「海くん……」

海くんはそう言い残して部屋から出ていった。皆を頼りたいけど……そんなこと出来るのかな？

### 海 SIDE

やつぱり友奈の様子がおかしい。一人で何かを抱え込んでいる。昼間に銀に聞かされたことが関係してるのか？どうしても友奈の性格上、誰かに相談くらいはするだろうし……

「どうしたものか……こういう時は……」

僕は端末でエリスさんを呼び出し、あることを聞くのであつた。

『どうかしたんですか？』

「エリスさん。詳しいかどうかわからないんですけど、神様の天罰つてその人自身に悪い影響を及ぼすんですか？」

『え、ええ、以前助手く……カズマさんがセクハラしようとした時に不幸な目に遭う天罰を下すつて話したの覚えてますか』

「うん」

『そういうった悪い影響を及ぼすのが女神の天罰……それがどうかしたんですか？』

あの時友奈の様子を見る限り、僕らには話せないということなのか？でもそれと銀が言っていた神樹の異変と何か関係があるんだ……。

「…………いえちよつと不意に思い出して聞いてみただけです。気にしないでください」

『そう…………ですか……あの頼まれたものはもうしばらくかかります。本当は駄目なんですよ。今回は天の神が協力しているとは言え……』  
「あはは、まあ必要になることはないでしようけどね……」

僕は通信を切ると、ベッドに横になるのであった。僕に何か出来ることあるのか……それにこれ以上僕はこの世界に干渉していいのか……

### 桔梗 SIDE

僕は現状起きていることをまとめなおしていた。例の癌は天の世界に関係するものだ。だとしても天の神が関係しているのなら、海がそれを伝えるはずだ。なのに何も言つてこないとしたら……神自身が与えたものじゃなく、神の意志関係なく与えられたものだとしたら……

「どうしようもないか……」

それにこの事を話そうとしたら皆……海を除いた全員にあの癌が現れた。その影響が出てきたりしているのか？

だとしたら今頃美森に何か危機が……

そう思つた瞬間、突然家のチャイムが鳴つた。こんな時間に誰が訪ねてきたのだろうかと思い、玄関を開けるとそこには美森がいた。

「…………夜這い？」

「桔梗くん、私がそんなことする人に見える？」

「いや、こんな遅い時間に尋ねてくるから……というか来るなら前もつて連絡してくれれば迎えに行つたのに」

「ごめんね。ちょっと聞きたいことがある……」

「聞きたいこと?」

「あの人……上里海くん。別世界の勇者だつて聞いたけどちよつと気になることがあることがあつて……」

「気になることつて、あいつ何か氣にするような……もしかして友奈の家に泊まつてることか? あいつの場合は色々な意味で大丈夫だろうけど……」

「夏凜ちゃんから聞いたんだけど、彼、壁の外に行つた時始めて見たつて言つてたらしいけど……桔梗くんは彼がいつ勇者になつたのか聞いてない?」

「海が勇者になつた時期か……知つていてるけど僕が話していくものか……それに事情を聞いたら美森も、他の皆も落ち込むだろうしないで……」

「アソーツのことはあいつ自身が言うべきことだと思う……流石に僕からは言えないしな」

「…………そう」

「美森も納得したのか、これ以上何も聞かなかつた。だけど何故か家に上がつてきた。

「送つてくぞ」

「ううん、ちよつと困つたことがあつてね。家に居辛いから桔梗くんに会いに行こうと思つたから……」

「困つたこと? 何かあつたのか? もしかして喧嘩したとか……」

「実は家の電灯が急に切れちやつて……真つ暗の中作業しづらいから……」

「だからつて僕の所に来るのはどうかと思うぞ。おまけによく見たら荷物持つてきてるし……」

「桔梗くん、襲つたりしないでね」

「わかつてる。約束したしな。だけど……」

「僕はそつと美森にキスをした。美森は顔を赤らめながら僕の頭を

叩いた

「言つた側から……」

「キスくらいはいいだろ」

「……そうね」

美森は目を閉じた。僕はもう一度キスしようとした瞬間、

「桔梗、邪魔するわよ。あんた電気ストーブもつてなか……」

タイミング悪く夏凜が訪ねてきた。夏凜は僕らの姿を見て固まっていた。

「な、なななな、な」

おまけに驚きすぎて壊れてきてる。こういう場合どうしたらいいものか……

## 第9話 不幸を防ぐために

### 桔梗SIDE

「昨日、樹が鍵を落として寒空の下2人して大変だつたんだから、ちよつとコンビニ行つただけだつたのに……」

「お姉ちゃん、本当にごめんなさい」

「いひつて……」

部室でそんな話をする中、先輩も樹も夏凜のことをチラチラ見ていた。先輩もいい加減ツツコミを入れるのであつた。

「所でさ、何で夏凜は桔梗と東郷に土下座してゐるの？」

「部室に来てからですよね……」

「…………昨日ちよつと」

「何というか間が悪かつたと言うべきか……夏凜、いい加減頭上げろつて……」

「いや、本当にごめん……邪魔する気はなかつたのよ」

未だに頭をあげない夏凜。僕も美森もあるタイミングで夏凜が訪ねてくるとは思つてもいなかつたし……

「夏凜ちゃん、二人共怒つてないから大丈夫だよ」

友奈がしばらく説得し、ようやく夏凜が頭を上げてくれたと同時に、園子が部室へ入つてきた。

「園子参上なんだぜえー」

そう言いながら入つてきた園子。だけど僕らは園子の包帯が巻かれた右手を見つめていた。何かあつたのか？

「園子さんその手…!？」

「おお、大丈夫大丈夫。こうしてサンチョを被せれば、あつてないようなもののシュレーリングガー」

「いつたいどうしたのよ?」

「今朝ポットで火傷したんだー」

これつてどういう事だ？僕、友奈以外の皆、何かしら不幸な目にあつてないか？まさか偶然なのか？

「勇者部全員厄払いにでも行つた方が良いんじやない？」

「ちよつと縁起でもない事言わないでよ」

友奈もそのことに気がついているのか、ずっと暗い顔をしている。まさか……昨日皆に話そうとしていたことが関係してるのでか？だとしても……

「友奈ちゃんは何もなかつた？」

「あ……うん、平気」

「桔梗くんは？」

「得には……」

「良かつた。友奈ちゃんと桔梗くんにまで何かあつたら、いよいよ怪しいものね」

「また大赦かーって」

園子の一言にその場にいた全員が黙り込んだ。今までのことを考えると本当に笑えないな。

「空氣重いけど何かあつたのか？」

何処に行つっていたのか海が部室に戻つてきては、部室内に流れる空氣を直ぐ様感じ取つていた。

「あー、海は何かしらあつた？」

「どういう事ですか？先輩」

「皆、不幸な目に遭つたつて話ををしていて……」

「僕は特には……」

癌のことが関係してると思つていたけど、海だけ何もないつていうのはちよつと気になる。住んでいる世界が違うからか？いや、だとしてもそれなりの影響があつてもおかしくないはずなのに……。

「と言うか過去一番の不幸に比べるとちよつとの不幸が不幸と感じないですけどね」

海は遠い目をしながら、そう言うのであつた。勇者になつた経緯以外何かあつたのか？

「オーク、メス……襲われる……殲滅……」

何か咳いてるし、聞かないほうがいいのか？

## 海SIDE

皆揃い、僕らは活動をしている中、僕はさつき聞いた皆が不幸な目に遭っているという話が気になっていた。

東郷は電灯が切れてしまい、風先輩と樹は家の鍵を落とし、夏凜はエアコンが壊れ、更には桔梗さんと東郷の二人のイチャラブを邪魔してしまい……

皆が不幸な目に遭っているのに友奈と桔梗さん、そして僕には何もおきないんだ?そんなことを考え込んでいると、あちら側からの連絡が入つた。

「すみません。先輩、少し電話してきます」

「ありや、もしかして大赦からとか?」

「いえ、あっちの世界からです」

僕は人目のつかないところへ行き、通信に出ると相手は……

『ウミさん、どうですか?皆さん様子は?』

『エリスさん、ちょっと気になることがあって……』

僕は部室で聞いた話をエリスさんに話すと、暫くの間エリスさんは黙り込んでいた。

『……ウミさんは本当に何もなかつたんですか?』

「皆の前ではそう言うしかなかつたんですけど、何も起きてません」

『それにそちらのユウナさん、キキヨウさんの二人には何も起きていない……やはりと言ふべきでしよう』

「どういう事ですか?」

『ウミさんが不幸な目に遭つていなければ私の加護が関係していません』

エリスさんの加護つて、幸福がつて事か?でも未だに僕の運は低いままなんだけど……

『加護つて言つても、運が上がるということではないです。ウミさんは精霊である私の影響で、悪魔探知が出来るようになつたじゃないですか』

そういえばそうだつた。でもアクアさんやクリスさんがいるおかげ

げで特に必要なくなつたしな……

『そしてその影響は強くなつたおかげでしょうか。ある程度の呪いは受けなくなつています』

呪い無効化って言うと、死の宣告とか無効にできるつていうのか？いや、ちょっと待て、

「呪いつてどういう事ですか？」

『…………まだ断言はできませんが、もしかしたらです。なるべく皆さんに気を配つてください』

「気を配る……か。エリスさん、僕はこれ以上関わつていいいんですか？僕自身出来ることは……」

『…………ウミさん、それは貴方が決めることです。もし悩むようでしたら、皆さんに相談してください』

エリスさんはそのまま通信を切るのであつた。僕が決めることか

……

部室に戻ろうとした時、不意に友奈と先輩の二人が何か話しているのを見かけ、僕は少し気になり物陰に隠れながら聞き耳を立てた。

『実は……この間、東郷さんを……あつ

『……ん？ 何？』

友奈が何か言いかけた瞬間、妙な力を感じた。これつて昨日も……

『あ、いえ……』

友奈も何かを感じ取ったのか、直ぐ様話題を別なものにしていた。友奈は何を隠してゐるんだ？

## 桔梗 SIDE

友奈と先輩が何かを話しているのを僕は校舎から見ていた。気にならないようにと思っていたけど、皆が不幸な目に遭っているのは僕と友奈が癌のことを話そうとしていたからか？

「先輩に出来た癌……昨日皆に出来たものより大きい……」

話そうとしたら不幸な目に遭う……これが本当だとしたら……先輩が危ない。だけど直接気をつけろと言つたら、何が起きるかわからぬ。ここは……

僕は端末で樹にメッセージを送った。

『樹、先輩と帰る時気をつけろ』

『あの？ どういう……』

『詳しくは言えない。ただ嫌な予感がして……』

『分かりました。気をつけます』

これで大丈夫だろうか……僕自身がいざつていう時守れればいいのだけど……癌の影響が出てくるかもしれない。今は祈るしかないのか……

## 第10話 天罰

樹に注意するように伝えたけど、本当に大丈夫なのかわからなかつた。そんなことを家に帰つてからもずっと考えていた。

そんな時だつた。樹からメッセージが届き見てみると……

『今、病院です。お姉ちゃんがはねられてしまつて……』

そのメッセージを見て、僕は急いで病院へと向かうのであつた。何だか嫌な予感がする

病院に行くと美森達も来ていた。皆心配できたのだろうけど、僕は樹の腕に巻かれた包帯が目に入った。

「樹、その包帯……」

「桔梗さん、お姉ちゃんが轢かれそうになつて助けようと思つて……」  
助けようとしたのがいいが、一緒に巻き込まれてしまつたのか……  
でも樹は軽い怪我で済んでるみたいだけど……

「先輩は？」

「まだ……」

美森が俯く中、僕は皆以上に暗い顔をしている友奈を見つめた。もしかして先輩に相談したからって思つてゐるのか？それに樹も巻き込まれてしまつたつて……だけど樹は多分僕のせいだ……  
すると病室から先輩がストレッチャーに乗つた状態で出てきた。  
見る限り怪我が酷い。

「いやー、参つた参つた

「お姉ちゃん!?」

「樹、怪我大丈夫？」

「お姉ちゃんこそ……」

泣ききそうになる樹に優しい笑顔を向ける先輩、自分よりも妹のこと  
が心配つて……

「皆ごめんねー、わざわざ来てもらつちやつて……」

「あの命に別状は……」

「それは大丈夫だから。 大袈裟ねえ」

「でも受験生に何て酷な事を…」

「それは言わないで！ 試験は受けるから！ 絶対受けるから！」

命に別状もないみたいで、一安心だけど……やっぱりこれってこの癌が関係してるんだよな……

「ごめんね。 皆、桔梗、悪いんだけど私がいない間、樹のこと頼める？」

「え、ええ」

「お姉ちゃん、 私なら大丈夫だよ」

「でも……」

「もし何かあつたら、ちゃんと相談するから……」

「そうね、樹も自立の練習みたいなものでちょうどいいかもしれないわね」

「ちよつと夏凜、あんたね……」

いつもみたいな空気に変わったけど、友奈だけはまだ浮かない顔をしていた。そして僕も……

「……」

病院からの帰り道、僕は夏凜と園子の二人を送つていくことにした。友奈と美森は海に任せたけど、海も何だか考え方をしていたのが気になつた。何かわかつたのか？

「それにしても風も樹もついてないわね。東郷助けたばかりなのに事故なんて……」  
「大赦もはねた車をおまわりさんと一緒に探してみるといだよ」「何というかはねた人が色んな意味で可哀想だな……」  
「まあ無事だつたから良かつたわね。下手すれば警察と大赦に国防仮面が混じつたわよ」

「美森ならやりそุดだな……」

「……きょうくん、元気ないけど大丈夫？」

園子が心配そうに僕の顔を覗き込んできた。気取られないようにしていたのに、園子はそこら辺鋭いな。だけど話すことは出来ないしがついていなかつた。

「いや、大丈夫だよ。ほら、寒いし早く帰ろう」

「そうね……これで風邪引いたらシヤレにならないしね」

帰るよう促す中、園子はじつと僕のことを見つめていたことに気がついていなかつた。

「……何かあつたのかな？」

## 海 SIDE

今回の先輩と樹の怪我の理由つて、やっぱり友奈が話したことが原因なのか？だけどあの時友奈は先輩にしか話していなかつた。樹は巻き込まれただけなのか？

「海くん、何か考え方？」

「ん？ああ、ちよつとあつちの世界のことが気になつて……何かトラブルに巻き込まれてないかつて……」

「海くん、いつになつたら帰れるんだろうね」

友奈は笑顔でそう言うけど、何だか元気がない感じがする。もしかして先輩のこと気にしてるのか？

「それじや友奈ちゃん、海くん、また明日」

東郷はそう言つて、家に入るのであつた。僕ら家に入ろうとした時、また端末に連絡が入つた。

「ごめん、友奈。先に入つてくれ」

「う、うん」

僕は友奈と別れ、人気のないところで端末を取り出した。連絡してきたのつてもしかして、エリスさんかな？何かわかつたのかと思ひながら、電話に出ると……

『ふはははは、異世界でも女の尻を追っかけている小僧よ』

僕は直ぐ様電話を切つた。何で相手がバニルさんなんだよ。だけどすぐに端末に電話がかかってきた。

『どうした。吾輩と話したくないのか』

「こつちはエリスさんが何か掴んだのかと思つて期待していたんだよ」

『世界が違うせいで貴様の悪感情が食えないのが残念だな。だが、貴様が知りたいことを掴んでいると言つたら……』

「…………何が目的だ？」

バニルさんの場合は何かしらの見返りを求めるはずだ。まさかタダで教えるというわけ無いだろうな

『目的？強いて言うならあの別世界の天の神を早いところ返したいというくらいだな。奴が逃つた駄女神が八つ当たりに店の商品を駄目にしていくからな』

本当にそれだけなのか疑わしいけど、折角だから聞いておくべきだな。

「それで僕が知りたいことって？」

『そちら側の勇者二人についてだ。奴らは罰を受けている。それは気がついていたか？』

「薄々は……」

『ならばその罰はどのようなものかは知らないみたいだな。罰を受けた者はその罰のことを告げようとなれば、それを聞いた人間に災いをもたらすであろう』

やつぱり予想していたとおりだ。皆に降り掛かっていた災いはそれが原因なんだな

『そしていざれ罰を受けたものの心は、いざれ壊れていくであろう。貴様らが言うところの決まりすら出来ずにな』

僕らの決まり……五ヶ条のことか。バニルさんが言つているとおりならどうにかしないと……

「救う方法はあるのか？」

『……悪いが教えることはできん』

そう言い残してバニルさんは電話を切るのであつた。本当にこの人は……

さて、本当にどうしたものか。天罰から二人を救う方法はあるのか……それに僕は……

「関わつていいかどうかなんて悩んでいる暇はないよな」

### 桔梗 SIDE

授業中、ずっと考えていたが本当にどうすることもできないのか。誰かに話そうとすることも駄目、話さず対策を練ろうとしても駄目。更に癌の影響なのか、勇者を守るはずの精霊の力が使えなくなつている感じだ。普通だつたら車にはねられても先輩や樹のことは精霊が守つてくれるはずなのに……厄介なシステムだよ。本当に……もしも誰かが僕たちのことに気がついた時は、どうなるんだ。やっぱり癌の力が発動してしまうのか……だとしたら危ないのは園子になる。

海も本当に何も聞いてないのか？この癌について詳しいのは天の神だけ。だけど奴は別世界にいる。そして連絡を取れるのは海だけ……海は僕らに何も言つてこないとなると本当にどうにもならない

「海くん？」

気がつくと美森が僕のことをじつと見つめていた。また顔に出て

いたか？

「何だ？ 美森……」

「何かあつたの？ ここ最近ずっと悩んだ顔してるから……」

「ごめん。話したいけど…………結構な機密だから言えないんだ」

これ以上美森には心配はかけさせたくない。それに僕らのことには気がついたらきつと美森はまた自分を責めてしまう。それだつたらこのまま黙っているしかない。

「桔梗くん、もしも辛くなつたら話してね」

辛くなつたら話せか……話せないことがこんなにつらいなんてな

……僕は美森の腕を掴みあることを告げた。

「美森、僕がどうなつても……忘れないでくれるか？」

「どうしたの？ 突然…………そんな悲しいこと言わないで……」

「ごめん。ただ…………」

僕がいいかけた瞬間、美森はそつと僕にキスをしてきた。そして恥

ずかしそうにしながら、

「忘れないよ」

「…………ありがとう」

「…………ねえあんたら、教室でイチャつくのやめてくれない」

気がつくとクラス中の皆が僕らのことを見ていた。人目気にしなすぎたか……

「今日は暖房いらすだね～」

## 友奈SIDE

昼間の桔梗くんと東郷さんの話を聞いて、桔梗くんは耐えることを選んだ。私達が黙つていれば皆、不幸にならずに済むなら……私もそうするべきだ。

私はそう自分に言い聞かせながら、入院中の風先輩の御見舞とクリスマスパーティーのお祝いをするため、病室の扉を開けようとした瞬間、

『樹、今日大事なイベントでしょう?』

『いいの』

風先輩と樹ちゃんの声が聞こえてきた。樹ちゃんはイベントに参加するから来ないはずなのに……

『お姉ちゃんが怪我してるので、私だけ楽しい事は出来ないよ』

『お姉ちゃんの事なんて気にしなくて良いのに……それに樹だつて怪我してるじゃない』

『私はもう治ったよ!それにはね。お姉ちゃんが楽しくないと私も樂しくないんだ。だから今日は良いの。ちゃんと代わつてもらつたから』

『ちゃんとご飯食べてる?出前取つて良いからね』

『作つてるよー。ほとんどスーパーのお惣菜だけど…』

二人の話を聞いて、私は胸が苦しくなった。こうなつたのは私のせいだ……私が先輩に話さなければこんなことには……

私は逃げるよう走つていった。

辛い気持ちをただひたすら耐えなきやいけない……誰かに相談することも出来ない。桔梗くんは耐えることを選んだ。それは強いからだ……でも私は……

ひたすら逃げるよう走つていた私は、雪で足を滑らした。こんな辛い思いはもうしたくない。私はただただ泣き叫ぶのであつた。

誰か……助けて……

「何、泣いてるんだ？」

突然声が聞こえ、顔をあげるとそこには海くんがいた。海くんはそつと私に手を差し伸べた。

「海……くん」

「怪我してないみたいだな。どうかしたのか？」

「う、ううん、なんでもないよ……」

海くんには癌の影響はできなかつたけど、それはただの偶然かもしれない。もし話したら……

「嘘つけ」

「えっ！」

「耐えきれなくなつたんだろ。だつたら僕に話せ……」

「駄目、駄目だよ……海くんに話したら……」

「死んじやうかもしれないだろ。それは大丈夫だ。僕には女神の加護

を受けてる」

女神様の加護？よく分からぬけど、加護を受けていても癌の力が  
加護を上回つたら……

「それに……死んじやうかもしれないつて言つたよな。安心しろ。僕  
は死ぬのになれている。なにせ……お前たちを救うために僕はこの  
生命を絶つたんだから……」

「えつ……」

命を絶つたつて……どういう事？海くんは真剣な表情で言つてい  
たから嘘じやない。

「それにな。僕は決めたんだ。どんな世界でもお前を救うつて……」  
海くんは優しい笑顔でそう告げた。私は海くんに抱きつき、思いつ  
きり泣いた。海くんはそんな私の頭をなでながら、あることを言うの  
であった。

「話してくれ。お前と桔梗さんに何が起きてるのか……」

# 第11話 世界の違い

桔梗SIDE

風先輩の所に行こうとしていたが、突然友奈から呼び出され僕は友奈の家に来ていた。友奈の部屋に入るとそこには友奈、海、そして大赦の人が集まっていた。

「神宮様、来ましたね」

「……なるほどな。大赦も僕と友奈の事を調べてくれたのか。それに海、お前は……」

「一人の身に何が起きているか分かつたから……」

「……そうか」

海は気がついていたのか。この癌について……だけど本当に話していいのか？  
「詳しい話は私がいては話せないです。なので話を勧めます。まずこちらを……」

大赦の人は僕と友奈の二人に一冊の本を渡してきた。本のタイトルは勇者御記と書かれていた。日記をつけろっていうのか？

「御記は必ずつけてください。そして結城友奈様、こちらで調べたことを話しておきます。今現在、神樹様が作った体、御姿。それが貴方です」

「御姿……」

聞いたことのない言葉。それに神樹様が作った体って……どういう事だ？

「春頃より起きた戦いにて、勇者たちは満開し、散華をした。散華して失つたものは返されたものではなく、神樹様が作った新しいものです」

皆の体が神樹様に作られたもの……それだつたら僕の右腕は失つていたからこそ戻らない。まあ戻つたら戻つたで怖いけど……

「結城様は強引な満開を行つたせいで、体の大部分を失い、殆どが作られたもの……神様に愛された者です」

「神様に愛されたもの……」

「だからこそ貴方は天の神が作った呪いを引き受けようとしたのでしよう……それでは」

大赦の人はそう言い残して出ていった。呪いを引き受けるつてどういう事だ？ 美森を助けようとした時に僕と友奈の二人に写つたんじゃないのか？

「あのね。桔梗くん、桔梗くんが来る前にさつきの人と言われたの。私は神様が作つた体。だからかな、東郷さんを助ける時に呪いを引き受けたいって願つたから……」

「だけど、僕は……散華で失つたものは右腕と皆から僕という存在の記憶だけ……友奈みたいな……」

「桔梗くん、癌、広がつてる？」

「い、いや……まさか……」

友奈は黙つたまま頷いていた。そんな、僕の場合は友奈と一緒に助けたから少しだけど呪いの影響を受けた……誰かに話したりしたら災いが降りかかるだけ……だけど友奈は呪いの大半を受けたせいで……

「ごめん、友奈。僕が受けるべきものなのに……」

「そんな事ないよ。私の方こそごめんなさい。巻き込んで……」

お互い謝る中、海は何かを考え込んでいることに気がついた。

「海に呪いの影響がないのは……」

「僕は精霊の加護が強く受けすぎてるからか。呪いとかは効かないみたい。ただ気になることがあるんだよ。友奈、あの時の戦いでお前は無茶な満開をしたつて言つたよな。その後しばらくの間動けなく、心もなかつたつて聞いてるけど……そちら辺の記憶はあるか？」

「うん、えつと……」

友奈はあの戦いで敵の御靈に触れたせいで、魂だけは美森がいたあの空間にいた。どこまでも進んでもたどり着くことのなかつた。どうしようもなくふさぎ込んでいた時に、美森の声と共に青いカラスが友奈を導いた。

「それで戻つてこれたんだけど……海くん？」

「……ちょっと気になることがあるんだ。ちょっとごめん」

海は端末を取り出すと、端末から光の玉が現れた。これが海の精霊なのかな？

『どうかしましたか？ウミさん』

「エリスさん、頼みたいことがあるんだ」

『頼み事？例のものでしたらまだですよ』

「いやそれじゃない。そつちにいる友奈に聞いてくれないか？」

海はエリスつて呼んでいる人にこつちの友奈と同じことが起きてないか聞くことになった。確かに同じことが起きてるはずだけど……

「海くん、あつちの私は違う感じなの？」

「いや、まだわからないけど、その何もない空間には言つてない可能性があるんだよ」

「どういうことだ？」

「そこら辺は分かつてから話すよ。とりあえず友奈、桔梗さん、辛くなつたらいつでも話してくれ。僕なら大丈夫だ」

「……ヤバそうだつたら話すの止めるからな」

「わかってる」

「あの、海くん、聞きたい事があるの。海くんが死んでるってどういう事？」

「…………そうだな。話すべきだな」

海は友奈に語つた。自分自身が行つたことを……

海は元々勇者たちの監視役の役目をやつていたが、勇者たちの傷つく姿を間近で見ていたこともあり、自分も勇者になつて皆を守りたいと願い続けていた。

だけどそんな願いはいつまで経つても叶うことはなかつた。

そして勇者部みんなが散華によつて体の機能を失つてしまつた。海はなんとかして救う方法がないか考え、その結果、自分の命と引き換えに神樹様に皆から奪つたものを返してほしいと願つたのだつた。「その後僕の魂は女神様がいる所に行き、新しい肉体と勇者の力を得たんだ」

「海くんが……私達のために……」

「色々とあつて皆と再会できた時に怒られたけどね」

海は苦笑いをしているけど、自分の命を引き換えるか……だけど  
ちよつと気になることがある。海がいた世界に行つたことがあるけど、友奈も東郷も普通に元気だった。

「海、お前の世界では奉火の儀は行つてないのか？もしかして別の誰かが犠牲になつたのか？」

「それは天の神に聞いたら、ある人間の遺体を使って行つたらしい。  
その遺体は……僕だ」

海曰く巫女の家系のおかげで生贊としての価値は大きく、十分役割  
を担えるらしい。だからこそ今回の騒動は起きていないのか

「海くん……」

「海、これからどうするんだ？僕は大丈夫だろうけど……友奈は呪い  
が大きすぎていつか……」

「なんとかするしかない。なるべく諦めない。そうだろ友奈  
「……うん」

少しだけど友奈は明るさを取り戻した。だけど本当にどうにか出  
来るのか？いやこれが天の神の力だとしたら……

「海、天の神に……」

「無理だよ。僕もどうにか出来ないかつて聞いたけど、呪いは天の意  
志関係ないらしい。ただ……」

海が何かを言いかけた瞬間、突然海の端末から白い光の玉が現れ  
た。

『ウミさん、お待たせしました』

「どうだつた？」

『お聞きしましたけど、ウミさんが言つていたようなことはなかつた  
です。本当に気がついたらこちらの世界に来たみたいで……』

『そこから変わつてゐるのか……ありがとうエリスさん』

『ご無理はしないでください。ウミさん』

光の玉はすぐに消えると、海はまた考え込んだけど、すぐにため息  
を付いた。

「友奈、何か変わつたことがあつたらすぐに知らせてくれ」

「うん

「僕はどうする？」

「桔梗さんも呪いを解く方法を一緒に探してほしいんだ。なにかあるはずだ……何か……」

「海くん、桔梗くんありがとう……」

僕と海は必ず友奈を救うと誓いあつた。それに今回の件は勇者部の皆を巻き込めない。僕らだけでどうにか……

## 第12話 もう一人の巫女

友奈S I D E

「は～やつと退院できたわー！シャバの空気が美味しいー！」

今日は勇者部みんなで初詣に来ていた。海くんに全て話したのはいいけど、私の体は一向に良くはならなかつた。だけど皆に気づかれないように……

「年越して新年を迎えてしまつたわ……」

「なによ、めでたいことでしょ」

「良い女が1つ年を取るのよ？3月で卒業だし……」

「もう1年居てくださつてもいいですよ」

「いや、それはちょっと……」

「それにしても残念だよね～きょううくんとカイくんの二人来れなくつて」

「そうよ。折角私が退院したっていうのに……」

「仕方ないじやない。あの二人大赦に呼び出されてたんだから」

桔梗くんと海くんの二人は新年早々大赦の人に呼び出され、今この場にいなかつた。もしかして私のことかな？

「わっしー、残念だね～きょううくんに晴れ着姿見せられなくつて

「あら、そのつち。大丈夫よ。ちゃんと見せたから……」

「東郷、あんたいつの間に……」

「正直、もう桔梗の部屋尋ねるのに勇気がいるわね……」

みんなの他愛のない話を聞いていたけど、私はこんな楽しい日々をあと何回出来るのかな……

## 桔梗 SIDE

巫女の海と海と三人でゴールドタワー……いや大赦では千景殿と呼ばれる場所に来ていた。千景殿…………これって……

「千景さんのことだよね」

「ええ、300年前の勇者……郡千景。彼女の名前から取っています。彼女は歴史からいなかつたことにされていましたが、ご先祖様が何かしらの名前を残したいという理由でこうして……」

「…………郡千景としての名前か……」

海と共にあの世界で聞かされた神宮家と千景さんの関係を思い出した。彼女は勇者としていなかつたことにされたけど、だけど最後まで幸せな……

「…………行きましょうか。彼女が待っています」

僕らは巫女の後をついていき、千景殿に入つていった。タワーの途中にある一室に入るとそこには巫女装束に身を包んだ少女が待っていた。彼女のことは僕も見覚えがある。

「お久しぶりです。上里様、神宮様」

「国土亜耶……」

「僕はこつちでは初めましてになるのかな？」

国土亜耶。大赦にいる巫女の一人であり、この千景殿に集まつている防人達と一緒に行動をともにしている巫女。

「彼女は本来、奉火の儀の生贊になる運命でした。だけど東郷様が代わりに……」

「本日ここに勇者お二人を招いたのは、例の件についてですね」

「ええ」

例の件、友奈の事を言つているのだろうな。天の神の呪いのこともあつて詳しくは聞いてないだろうな……ん?でも……

「なあ、海……」

「何?」

「…………巫女の方。お前はその件はどこまで聞いてるんだ?というか呪いの影響とか……」

「そんな事考えている暇はないですよ。今苦しんでいる彼女のことを

考えると……

「私もお力になればいいと思い……」

巫女二人は呪いは怖くないのか……いや怖いと分かつていてもどうにかしたいんだろうな。

「それに私の友達は誰一人も犠牲を出したくないと言つてました。だから勇者様達にも彼女と同じようにこの先誰も犠牲を出してほしくないです」

誰も犠牲を……本当にどうにか出来るのか。いやどうにかするためにこうしてここに来たんだ

「国土、ありがとう。とりあえず呪いのことについて調べてみるよ」

僕と海は用意された資料を読みながら、何とか友奈を救う方法を探すのであつた。

一時間位調べ続けたけど、全く言つていいくほど手がかりがない。

「300年間、友奈みたいに呪いを受けた人間はいないのか……」

「まだ全部終わってないですよ。最後までは……」

海はどうしてここまで出来るのであろう？別世界の友奈とはいえ好きだからか？

「海、お前はどうしてそこまで？」

「僕は決めたんだ。どんな世界でも友奈を救うつて……だから……」  
海は諦めていない。それだったら僕も諦めるわけにはいかないよな。

「天の世界の炎……奉火の儀……御姿……呪い……」

何か思いつかないか考えるが、答えが全く出てこない。あの炎の世界がある限り友奈を助けられない。世界を作り直せばいいけど、その前に友奈が死ぬ……

「炎を消せないものか……」

そんな時、僕はある事を思い出した。僕が持っている天神刀……あ

れは……

「海……」

「何?」

「お前は誰かを助けるために誰かを犠牲にできるか?」

「……それが自分自身だととしてもですか?」

僕の問いかけの意味をすぐに理解した海。僕自身が犠牲になれば

……

「そんな事したら東郷が悲しみますよ」

「……もしもの場合だ。本当に助ける方法がなかつたら……」

僕は天神刀の力を使えば……あれの力の源は壁の外の炎だ。僕が

炎がなくなり続けるまで

天神刀を使えば……

「悪いけどその時は全力で止めます。さつき亜耶さんが言っていたことを覚えてますか?」

誰も犠牲を出さずに……本当にそれが可能なのか?僕には信じられないなかつた。そんなのが可能だつたら、銀は……

「僕も出来るなら誰の犠牲も出したくない」

僕らはそのまま資料の中から手がかりを探すのであつた。

正月も終わり、新学期が始まった。あれから何日かかかつて用意された資料を読み終えたけど、手がかりはなかつた。

やつぱり友奈を助けるには僕が犠牲に……

「風先輩、自然体で大丈夫ですよ」

部室で考え事をしていると、美森が何故かカメラを回しているのに気がついた。そういえばここ最近カメラを持ち出してどうしたんだ

?

「最近熱心にカメラ回してるわねえ」

「もうすぐ先輩が卒業してしまうので、揃つての活動記録は貴重だと  
思います」

「私卒業した後もここに入り浸ると思うわよー?」

「そうなる予想はついてたけどね……」

「とか言つて、嬉しそうね夏凜」

先輩の言葉を聞いて、顔を真赤にさせる夏凜、思っていた反応と  
違つて戸惑う先輩、友奈にいつまで見せられるんだ。この光景を……  
いや、諦めるわけには……

「ふーみん先輩とにぼつしーで想像摃っちゃつたから、帰つて2人の  
本を描こー」

園子はそう言いのこして帰つていつた。何だかここ最近帰る時間が  
が早いけど何かあつたのか?

「あつ……そいいえば、卒業旅行とかどこ行こうかしら」

「年末はどこへも行けませんんでしたからね」

「そうなのよ。大赦のお金でみんなで温泉旅行とか行く?」

「あ……温泉は前に行つたから違う所とかどうでしよう」

友奈は痣を見せたくないからか別の場所を希望していた。まさか  
痣が広がつているのか……

# 第13話 伝えられない思い

海SIDE

今日は皆と一緒に迷子の猫探しをしていた。正直こんなことをしている場合じゃないけど、昨夜友奈が……

「なるべく皆と一緒にいるようにしたいの……」

「だけどこのままだと……」

「それにはね。海くんにはできなかつたことをしてあげたいの」

友奈は辛そうにしながら笑顔でそう言つた。出来る限りのことはしてあげないとな。

友奈は草むらの中を見ながら、猫を探し続けていた。

「迷子の迷子の子猫くーん、どつこかなー？」

「見つからないわねえ…ちよつと樹、猫語で呼び出してみて」

「え…!? にや…にやー、にやー！」

「もつと!! もつと獸になつて…!!」

「いいよー！ いつつんないよー！」

東郷は写真撮りまくつてるし、そのつちはそのつちだし……それで簡単に見つかるわけ……

「あ、いたー！」

見つかつたよ。友奈は猫を怖がらせないよう優しく声をかけるけど、何故か猫は友奈を避けて先輩の方へと行くのであつた。

「まさかと思うけど……あれも……」

桔梗さんはそんな事を言うけど、そんな事あるわけ……

「偶然だよ」

「…………海、お前は反対だろうけど……」

「やめてください。東郷を悲しませる気ですか」

「…………」

友奈を救う方法のひとつ、桔梗さんが天神刀の力を使い、壁の外の炎を全部消し去る。だけどそんなことすれば桔梗さんの体に負担が……下手すれば死ぬかもしれない。

友奈を助けられても……

## 桔梗SIDE

みんなでカラオケに行くことになつたけど、僕は海と一人つきりで話していた。

「何か話でも？」

「……海、これ以上関わるな」

「どういう事ですか？」

僕は決して海が嫌いだからこんな事を言うのではない。ただこのままだと海は大好きな人の死を見るかもしれない。それだつたら……

「このまま何も見つけることも出来なかつたら……お前は友奈の死を看取ることになるんだぞ」「それは……」

「引き返すなら今の内だ。誰もお前のことを責めたりはしない……」

「迷つてる時に出した決断は、どの道どつちを選んだとしても、きっと後悔するもの。なら、今が楽ちんな方を選びなさい」

突然変なことを言い出す海。何だか色々と駄目じやないかそれ？

「僕の大切な仲間の言葉。楽な方へ行くのはいいかもしれない。このまま元の世界に帰つたほうが僕のためににもなるかもしれない。だけど……僕はどんなに辛くても、辛い道を選ぶ」

真剣な眼差しでそう告げる海。そうだよな……今更こんな忠告することないよな……

「今、解決できる方法は僕の犠牲だけだ。他にあるのか？」  
「可能だつたら一個だけあるんだ。神樹様の力じやなくつて、女神様の力を借りる」

「女神つて、海の精霊の力をか?」

「いえ、もう一人いるじゃないです。その人は呪いとかの解呪のエキスパートなんんですけど……色々と事情があつてこっちには来れないとです。いや来れたとしても光の玉で話をするくらいしか……」

海の案は無理そうだな。やっぱり……

「後で美森としつかり話すか」

「…………きつと怒りますよ」

「頑張るぞ」

海はそのまま帰り、僕も帰ろうとした。だけどそんな時ふつとある事をしようと思つた。

「最近、絵を描いてないな」

僕は鞄からスケッチブックと鉛筆を取り出し、空の絵を書き始めた。僕が犠牲になる場合、あとどれくらい絵をかけるかな……

「桔梗くん?」

「美森、どうしたんだ?」

声をかけられた方を見るとそこには美森がいた。どうやらみんなとのカラオケは終わつたみたいだな。

「今、帰るところだつたんだけど、海くんとの話は終わつたの?」

「ああ」

「……桔梗くん、海くん、ここ最近様子がおかしいけど何かあつた?」

美森は何かしらに気がついてるのか。正直に話したいけど……

僕はそつと美森を抱きしめた。

「え、えつと桔梗くん? どうしたの?」

「ごめん。美森を感じたくって……」

「それ何だからいやらしい意味に聞こえるよ」

別にいやらしい意味で言つてないんだけど……でもなるべくこうしてふれあいたい。

「……美森。前に言つた言葉覚えてるか?」

「何?」

「僕がどうなつても……忘れないでくれるか? つて」

「覚えてるよ。友奈ちゃんと桔梗くんの言葉は忘れないようにしててる

から……」

それはそれで何だか怖いな……でもちよつとうれしいな。  
「美森、もしかしたら僕はお前のことを悲しませるかもしれない。そ  
の時は僕のこととを許さなくていい」

僕はそう言い、そつと美森にキスをするのであつた。

友奈SIDE

みんなでカラオケに行つた数日後、私は夏凜ちゃんに呼び出され  
て、近くの港に来ていた。

「友奈、あのね……」

何か話そうとしているけどその前に…

「夏凜ちゃんは寒くないのー？」

「あ…悪い。場所を変えようか」

「ううん、大丈夫！こうすれば…」

私は夏凜ちゃんに寄り添つた。身体は辛くつて今にも挫けそうだ  
けど、夏凜ちゃんのおかげで何とか大丈夫みたいだつた。

「友奈、年末辺りからおかしいわよ。絶対何かあつたでしょ？私が力  
になる。話を聞かせてくれない？」

夏凜ちゃん、話したいよ。今の私に起きていることを……伝えたい  
よ。苦しいって……でも私は誤魔化すように笑顔で答えた。  
「なんともないよ」

「…どんな悩みだろうと、私は受け止めるから！友奈のことなんだか  
ら！」

「夏凜ちゃん……」

「力になるわ。私は友奈のために何だつてしてあげたい！そう思える友達を持てたことが私は嬉しいの。何があつたの？」友奈

伝えたい……伝えて桔梗くんや海くんみたいにきつと夏凜ちゃんも力になつてくれるはずだ。だけど伝えたたら夏凜ちゃんが不幸な目に……

「本当に……なんでもないんだ」

「……そう」

夏凜ちゃん私の肩を掴みながら、泣きそうになつていた。

「悩んだら……悩んだら相談じやなかつたの？ 私、友達の力になりたかつた……」

そのまま夏凜ちゃんは走り去つていた。私は追いかけようとしたけど、転んでしまつた。やつぱりもう身体が……

「……友奈」

気がつくと私の側に海くんが立つっていた。海くんは何も聞かず、私をおんぶしてくれた。

「海くん……苦しいよ……友達を傷つけて……何も言えなかつた……」

「……大丈夫だ。僕達がなんとかする……」

「でも……私のために海くんたちが……」

「……大丈夫。大丈夫だから……」

「辛そうにしているのを見ていることが……」

「大丈夫だ!! 僕がお前を救う。好きな人のことを……救いたいから……」

好きつて……私のことを……でもそれは海くんの世界の私のことだよね。体中に癌が広がつた私のことなんて……

「それつて……」

「僕はどんな世界のお前でも好きだから……」

「海くん……」

海くんは辛そうな声でそう告げてくれた。私は聞こえないように

ただ「ありがとう」と伝えるのであつた。

??? S I D E

「言われたとおり来れたけど……どうしよう？」

「ここはあの人気がいる場所だよね」

「うん、…………がここで待っているから、…………を救うために私達の力が必要だから…………」

「助けないとね。おじさまが言っていたんだから…………どんな世界でも救いたいって…………」

「助けよう。牡丹」

「うん、友海」

## 第14話 勇者御記

桔梗SIDE

家で調べごとをしているときのことだつた。チャイムの音が聞こえ、玄関の扉を開けるとそこには園子がいた  
「きょうくくん、夜這いしに来たよ～」

「……園子、美森に殺されるぞ」

「冗談だよ～わっしーに怒られたくないもん」

「こんな時間に何しに来たんだよ。何かしらの理由じやないと……」

「きょうくくん、ゆーゆ、カイくん。何か隠してるよね」

「……」

園子は気がついたのか。僕と友奈の身に起きていることを……  
感が鋭すぎだろ。

僕は園子を家に上がらせ、園子の話を聞くことにした。

「クリスマスの日、私はゆーゆに何かが起きていることに気がついたの。それで大赦で調べたら、ゆーゆときょうくくんが天の神の呪いでひどい目にあつていてるって分かつた」

「……僕は大丈夫だ。一番危ないのは友奈の方だ」

今のところ園子にはあの痣が浮かばない。僕らが話したら駄目だつたが、誰かが自力で気がついたのは大丈夫つてことか。

「大赦から何か受け取つたよね。それ見せてもらつていい？」

「ああ」

僕は大赦からもらつた勇者御記を園子に渡した。これに書いてある内容はどうすれば友奈をたすけられるか。そして僕が導き出した答えが書かれている。

だけど園子は読もうとせず、端末を取り出した。

「何をするつもりだ?」

「みんな、多分気がついてるよ。特にゆーゆの様子にね。だからこの事はみんなも知るべきだよね」

「……危険だぞ」

「多分みんなはそれを分かつっていても読むと思うよ」

## 東郷 S I D E

自分の部屋で一人プロジェクターを使って、これまで撮った映像や写真を見返していた。そしてあることに気がついた。

(やはり、どう考えても最近の友奈ちゃんの様子はおかしい……)

私は初詣の時の映像を写した。これは友奈ちゃんがおみくじで大吉を引いた時の……

『あ、大吉だあ！ あはは、やつたあ』

「違う……！ 大吉を引いたなら、友奈ちゃんはもつと弾けるように喜ぶはず……！」なのに、なぜそんなに切ない顔をしているの……？

まさか海くんに変なことをされている。いや、桔梗くんはそういうことをする人間じゃないって言ってくれているから……

『僕を許さなくていい……』

あの時の言葉がまだ聞こえている。桔梗くんも何かが起きている。だからあんなことを……

「私達に言えない何かが起きているに違いない！」

私は勇者に変身し、外へと飛び出した。

『だつたら、私が真相を確かめる！』

精霊の青坊主が飛び出し、部屋の様子を見てもらつた。まだ電気がついているから起きている。もし寝ていたら、侵入を……

『対象は睡眠中。侵入可能であります』

青坊主のハンドサインを確認し、私もサインを送り返した。

『了解、その場で待機せよ』

サインを送り、ベランダに降り立つた私は更にサインを送つた

『中に侵入し、鍵を開けなさい』

鍵を開けてもらい、私は友奈ちゃんの部屋に入った。友奈ちゃんは電気をつけたまま眠っている。こんなことなかつたのに……。

部屋の様子を見渡すとあることに気がついた。

「あ……あれは……！」友奈ちゃんが中学入学の時4月3日にご両親に買ってもらつたけれど、手に取ることはなかつたという百科事典の位置がズレている……！」

百科事典を取り出すと中に一冊の本が入つた。それは勇者御記と書かれている。

「ど、どうしてこんなものが……」

「……何してるんだ？ 東郷」

突然声をかけられ、振り向くとそこには勇者に変身した海くんがいた。気配を消していたのに……。

「こんばんわ。まだ起きていたの」

「何か気配を感じて、来てみれば……東郷……不法侵入するのはどうかと思うぞ」

「不法侵入？ 何のことかしら？」

「誤魔化すな。あと別に怒るつもりはない。ただ……」

海くんは私が手にした勇者御記に目をやり、ため息を付いた。何か知つて いるの？

「話すしかないか」

「話す？」

「今、起きていること……」

海くんがいいかけた瞬間、端末にメッセージが入つた。相手はそのつちから……

『今起きていることについて、皆に話すから、今すぐきょうくんの家に来て』

「これって……」

## 海SIDE

僕は東郷と一緒に桔梗さんの家に来ていた。そこには先輩、樹、夏凜も集まっている。

そして机の上には友奈の勇者御記と桔梗さんお勇者御記が置かれていた。

「これを友奈が書いたってことか……」

「最近友奈ちゃんの様子がおかしかった、その原因が書かれていると思うんです。海くんもそれを認めています」

「私もゆうゆが心配になつて調べてみたんよ。最近、実は大赦に行つてたんだ。論を先に言うと、ゆうゆの様子がおかしいのはね……ゆーゆが天の神の祟りに苦しめられているからなんだ……大赦の調べで、この祟りはゆーゆ自身が話したり書いたりすると伝染する……それがわかつたの。だから、この日記は非常に危険な物なんだ……それでも見る？」

そのつちが皆に確認取ると、皆、覚悟ができているみたいだ。だけどその前に……

「それを読み前に僕からいいか？」

「何よ。海？」

「多分それに書かれているかもしないから、先に言つておこうと思つて……僕は一度死んでるんだ」

「「「えっ!」」」

「……そうだつたんだね。カイくん」

そのつちは薄々気がついていたみたいだな。

「カイくんはきょうくんみたいに天の神と神樹様の力で勇者になつたんじやないつて思つてた。もしかして死んで生き返つたから?」

「いえ、僕は女神様のおかげでだけど……精霊もその女神様だから呪いや祟りとかは無効化出来ている」

「海さん……どうして……」

「その理由はこれに書かれている。僕が読み上げるよ」

僕は友奈の御記を読み上げた。そこには僕が友奈に明かした日から書かれていた。僕が皆を助けるために自分の身を犠牲にしたこと、自分自身に起きていること、散華で失った身体が神樹様が与えたものということ……

『1／7…皆といふと元気が出でくるけど、うつさないよう気を付けなきや。食欲はなかつたけど、甘酒が美味しくて喉が喜んでた。でも、家で吐いちゃつた』

『1／9…吐き気はひどかつたけど、部室にいると心がほわほわする。風先輩は温泉旅行を提案してくれたけど、今の私の裸を見たらみんながびっくりしちやう…とても行けない。ごめんなさい…』

『1／11…今日は調子がいい。しつかり休んでいるのが効いたのかも』

『1／13…胸がとても痛くて、なんだか頭がくらくらする。多分みんなと会話が成立してなかつたかも…』

『1／14…いっぱい寝て、体力を回復させなくちや、でも、電気を消して寝るのが怖い、暗いのが怖い。そのまま暗いものに包まれてしまいそうで』

『1／16…今日は夏凜ちゃんを傷つけてしまった。でも絶対言うわけにはいかない。ごめんなさい…とても苦しい、体も痛い、心も痛い、ぐちやぐちやになりそう…私はただ、みんなと毎日過ごしたいだけなのに…』

『…弱音を吐いたらダメだ、私は勇者だから頑張れ自分、結城友奈！勇者はくじけない!!』

『とにかく、夏凜ちゃんと仲直りしたい。でも本当のことを話せない。どうすればいいんだろう。もうここでいっぱい書く。夏凜ちゃん、私、夏凜ちゃんのこと大好きだよ。夏凜ちゃん、本当にごめんね！』

『そして海くん、好きって言つてくれてありがとう……でも、これ以上

は海くんや桔梗くんの辛い姿は見ていられない』

読み終えた瞬間、東郷は怒りを堪えていた。

「すべて私のせいじゃない！天の神の怒りは収まつていなかつた！私が受けるべき祟りなのよ!!」

東郷は直ぐにでもと外に行こうとするが、そのつちがそれを止めた。

「日記に書いてあつたでしょ！わっしーにうつつても、本人は祟られたままなんだよ」

「大赦はまた、私たちに重要なことを黙つて…」

「うかつに説明するとみんなに祟りがいくかもしれないから話せなかつたんだよ」

「桔梗さんも同じ祟りに……」

「僕は一部のみだ。友奈みたいに癌が広がつたりはしない。だけど……どうして僕じやなくつて友奈なんだ……」

「友奈が……こんなに苦しんでるのに……私……酷いこと言つちゃつた……ひどいこと言つちゃつたよ…」

夏凜は自分が言つてしまつたことに対し、ひどく落ち込んでいた。でも仕方なかつたんだ。友奈は夏凜を思つて……

「聞かせて、カイくん、きょうくん。現状、どうにかゆ一ゆを救える方法がないか？」

「あんたらもしかして……」

「はい、調べていたんです。桔梗さんと一緒に……でも」

「一つだけ見つけた。友奈の呪いは天の世界の炎が消えれば治るはず。それだつたら、僕は天神刀を使つて、炎をすべて消し去ります」「それなら友奈さんを……助けられるんですか？」

「ああ、天神刀の力の源はあの炎だ。使い切れば……」

「ちよつと待つて……桔梗くん、それつて……」

「きょうくん。天神刀を限界まで使い続ければ……死んじやうよ」

「ああ、友奈を助けられるならな」

「……桔梗くん」

東郷は桔梗さんの頬を思いつきりひっぱたいた。そして泣きなが

ら桔梗さんに告げた。

「どうして……自分を犠牲にしようとしているの……私はこれからも皆と一緒にいたいよ……」

「美森……」

「部長命令。桔梗、あなたの案は却下よ。勝手にやつたら許さないから」

「許されなくともいいですよ」

皆が桔梗さんを止めようとしている。桔梗さんは自分を犠牲にしてまで友奈を救いたいと思っている。だけど僕は……友奈のために自分を犠牲にできる方法がない。どうすれば……

「お邪魔しまーす」

「ちょっと友海!?」

突然窓を開けて誰かが入ってきた。僕と桔梗さんはその二人を見て驚きを隠せないでいた。なんで二人がここに……

「ちょっと誰よ。こつちは大切な話を……というか窓から入るつて不法侵入よ」

「す、すみません」

「でも私達、みんなの助けになれるかと思つてきたの」

「あんたら……今起きていること知つているの? というかその服……友奈と東郷に似ている?」

先輩は一人が着ている服装に気がついた。そして樹も……

「どことなくお二人に似ている……」

「こつちでは初めてになるんだね。私は上里友海」

「私は東郷牡丹つてぃます」

「私たちはママを……結城友奈さんを助けるために來たんだよ」

友海は僕に近寄り、真剣な表情で言うのであつた。

「パパ、パパから先の未来になるかもしれないけど、私に言つてくれたんだ。どんな世界でもママを救うつて……だから私も……ママを救いたい」

「友海、牡丹……」

「パパつて、海のこと言つてるの?」

「まさか……この二人……」

先輩と夏凜の二人はこの二人が誰なのか理解した。この二人は僕がいた世界の未来から来た未来の勇者であり、僕の娘の友海。桔梗さんの娘の牡丹。

「パパ、苦しい思いをするかもしれないけど、助けられるかもしれないよ」

## 第15話　与えられた選択肢

桔梗SIDE

突然やつてきた友海と牡丹の二人……僕が会ったときよりちょっと幼いけどこの二人も友奈を助けるために来てくれたのか？

「桔梗くん……この子……」

「ああ、海の世界の僕らの娘だ」

「お父様。それにこっちでは初めましてですね。お母様」

「う、うん、はじめまして……」

「ちよつと!? 東郷と桔梗の娘って言うのはわかつたけど、そっちの友海つて、海と友奈の……」

「うん、娘だよ。夏凜さん」

「何というか今夜だけで色々とありすぎだわ。友奈の事も、海の事も……おまけに未来の子供まで……」

色々とありすぎて先輩は頭を抱えこんでいた。コレは仕方ないだろ

「それでくゆうちやん、カイくんが苦しい思いをするかもしれないけど、ゆ一ゆを助けられる方法つて何?」

「あっ、これです。園子さん」

友海は二つの腕輪と水色と白の短刀を机の上に置いた。腕輪は海が持っているものに似ていて、短刀は天神刀に似ている

「この腕輪は呪いに苦しんでいる人が装備して、もう片方装備した人に呪いを移す事ができるの」

「友海ちゃん、それって……」

「うん、ママは呪いから解放される」

「そしてこの短刀……これはお父様が持っている天神刀と似て非なるもの……天の炎ですべてを焼き付くのではなく、水と祝福ですべてを浄化する刀……祝水神刀。これは海おじ様にしか使えません」

呪いを移す腕輪とすべてを浄化する刀……それって……

「呪いを海に移して、その短刀で呪いを浄化する……」

「はい、これなら……」

「でもね。呪いを移されたらパパは苦しい思いを……」

「いや、十分だ」

海は腕輪と短刀を手にした。海はもう覚悟出来ているんだな。それだったら僕も止める気はない

「友海、牡丹。ありがとう」

「ううん、パパ。私達もママを助けたいから……」

「コレぐらいしか出来ませんけど……お役に立てて良かつたです」

「とりあえず試しに……」

海は僕に腕輪を渡してきた。何のつもりかわからなかつたけど、すぐ理解した。

「桔梗さん、まずは貴方の呪いを解きます」

「…………試しに…………というよりお前はそのつもりだつたんだろ」

「どんな世界でも友奈を救いたいけど、それ以上に一緒に戦つたあんたを助ける」

僕は呪いを受けたままで良かつたけど、でも海が僕を救いたいって思つてているなら断る理由はないな

僕は腕輪をはめると同時に何かが抜けていく気がした。そしてそれが海に流れしていく気がした。

「すべてを浄化せよ!!」

海が祝水神刀を掲げた瞬間、水色と白の光が部屋を包み込んだ。そして光がやみ、僕は胸元を確認すると癒が消えていた。

「呪いが……」

「これなら友奈ちゃんを……」

「わっしー、でもリスクが高いみたいだよ」

園子がそう言いながら、海の方を見ていた。海は膝をつきながら息を切らしていた。まさか呪いを移した影響で……

「これは…………ちょっとときついな」

「パパ、言つたよね。苦しいって……」

「呪いはただ移すんじゃないんです。呪いの大きさ分負荷が大きく、淨化に使う体力も……」

「海、友奈のために無茶をする気なら……」

「いや、これなら……桔梗さんの案もできる」

海はある方法を思いつき、僕らに話した。それは僕が天神刀を限界寸前まで使用し、呪いの影響が少なくなった瞬間に、浄化するということ……そうすれば二人の負担が少なくなるはずだということだった。

確かにこれなら……

「とりあえず今後の方向性は決まったわね。友奈にはちゃんと話さないとね」

先輩は友奈には落ち着いてすべてを話すようにと決めるたのであつた。友海と牡丹の二人は美森の家で面倒を見るということになつた。

これで全部終わる……はずなのに嫌な予感がする……

## 海SIDE

友奈を救う方法が見つかり、僕は東郷と一緒に家まで帰る途中のことだつた。

「牡丹ちゃんと友海ちゃん……海くんの世界での未来の子供で勇者なんだね」

「ああ、僕らが使っている勇者システムとはちょっと違うけど、勇者は変わりないよ」

「一人のお陰で友奈ちゃんを救えるんだね」

やつと見えてきた道。きっと上手いくはずだ。ただ、みんなと話し合い、僕の体調が万全のときじゃないと無理そうだから、しばらく時間を置かないとな……

そんなことを思つていた時、突然端末から白い光の玉が現れた。これってエリスさん？

「これって……」

「僕の精靈で、女神様。エリスさん、どうしたんですか？」

『ウミさん、そちらの状況は？』

「ああ、実は……」

僕はエリスさんに友奈を救える方法が見つかったこと、その方法を教えてくれたのが友海と牡丹の二人だということを話した。

『そうでしたか。あの二人が……ですがどうやって……』

「二人の話では、僕が頼んで量産してもらつた腕輪の力だつて言つてました。天の神の力が未来でも残つていたからだと思うんですけど……」

『何というか未来でも残つているんです。今回は脅されたということで天界規定に引っかかるないですけど……でも良かつたです。ユウナさんを救える方法が見つかつて……』

「ええ、本当に……ただ」

「海くん？」

『ウミさん？』

「妙な胸騒ぎがしているんだ。物凄くやばいことが起きるんじやないかつて……」

「これが気のせいだつたらいいのだけど、もしもの時のために頼んでおいたほうがいいな。」

「エリスさん、腕輪の量産は？」

『あっ、はい。出来ています。本来は戦闘が厳しくなつたらということで頼んだものですけど、今は必要は……』

「出来ればそれを皆に渡しておいてくれないかな？もしものために……」

『……もしもですか。わかりました。天の神も同じことを言つて、無理やりそちらの世界に戻るみたいです』

天の神が戻つてくるのか。それなら僕の帰還も近づいてきているな。

エリスさんとの通信を切ると、東郷が心配そうな顔をしていた。

「本当に大丈夫なんだよね」

「ああ、あくまでもしものためだから……」「それに海くんが言っている皆つて……」

「頼れる仲間たちだよ」

### 友奈S I D E

夏凜ちゃんは喧嘩してから数日後の夕方。私の家に大赦の人が訪ねてきていた。

「あ、あの……頭を上げて下さい。今日はなんの御用でしようか」

大赦の人は頭を下げたまま、話を始めた。本当は海くんも一緒に聞いてもらいたかったけど、海くんはそのちゃんとのところに行つていって、今はいない。

「友奈様に急ぎお知らせしなければならない事があります。私達を約300年の間守つてきて下さった、神樹様の寿命が近付いております」

神樹様の寿命が……それつて死んじゃうつてことだよね。それが本当だつたら世界は……

「神樹様が枯れてしまわれれば、外の炎から守る結界が無くなり、我々の暮らすこの世界は炎に飲まれ消えてしまいます」

「消える……」

「人間を全滅させる訳には参りません。全滅を免れ皆が生き伸びる解決法を、我々は見つけております」

そんな方法があるなら安心なのかな?でも、こういう話はやつぱり皆に聞いてもらつたほうがいいよね。

「あの。これつて勇者部全員で聞いた方が……」

「まずは、友奈様にだけお話を……皆が助かる方法は一つ。選ばれた

人間が神樹様と結婚するのです」

「えつ…結婚?! 結婚つて…あの結婚ですか?」

「神との結婚を神婚と言います。神と聖なる乙女の結合によつて、世界の安寧を確かなものとする儀式。それが神婚」

神樹様と結婚すれば世界は消えることはない。それしか方法がないのかな?」

「あの海くんがいた世界は神樹様の寿命を迎えていないって言つてしまつた。そんなんことしなくても……」

「彼の世界は我々がいる世界と女神たちがいる世界……二つの世界が繋がつたことで神樹様の寿命は半永久的に尽きることはないとのことです。ですがこちらでそれを行えることは出来ません。我々には女神と話し合いすることが出来ませんから……」

「そんな……」

「神婚する事で新たな力を得て、人は神の一族となり皆永久に神樹様と共に生きられるのです。ご理解頂けましたでしょうか? 神婚した少女は、死ぬという事です」

「な…なんで私を…」

「心も体も神に近い存在。御姿だからです。私達大赦は人類が生き延びる為に、様々な方法を模索し続けてきました。そして、神婚という選択肢のみが残されたのです」

「世界を救うために私が神婚すれば……でも私は……この人は悪意を持つて言っているんじゃないって言うことはわかっている。きっと仮面の中では必死に辛そうな顔をしているんだろうな……」

「私、友達を傷付けちゃつて……」

「皆を慈しむ心。友奈様は素晴らしい勇者であると私は思います。その友達を、人間を救う事が出来るのは友奈様だけです」

「神婚したとして…その…人が神の一族になつてずっと生きるつて言うのは…」

「言葉通りの意味です。我々を神樹様に管理して頂く優しい世界……人は死んでしまえば終わりですが、神の眷属となり神樹様と共に生きていけば希望が持てます」

「それって皆、ちゃんと人間なんですか……？」

「神の膝下で確かに存在出来ます。信仰心の高い者から神樹様の下へ……どうか……この世の全ての人々をお救い下さい。慈悲深い選択を……このまま祟りで死ぬか……神婚して世界を救うか……私に与えられた選択肢は……」

## 第16話 届かない言葉

友奈S I D E

大赦の人気が来たその日の夜、私は呪いの影響なのか体中にものすごい痛みが走っていた。

「うつ……祟りの次は結婚だつて……びっくりだね、牛鬼……お父さんとお母さんは泣いてたけど……私の意思に任せたつて言つてくれたけど……私の体は……命は……もう……」

もう体中に癌が広がっている。もう私の命は……桔梗くんや海くんは必死に私を助ける方法を探しているけど、私が助かつても世界が……

私は明け方、家を抜け出し外へと出ていた。私がするべきことは……

「神婚して死ぬとどうなるんだろう……祟りで死ぬより苦しくないのかな……私は勇者なんだから……勇者らしい事をしなくちゃ……！」

宛もなくさまよっていた私は皆で行つた神社の階段を登つていた。勇者部五力条。成せば大抵何とかなる。迷つたり怖がつたりしている場合じやない。

やらなきや……！だつて私は勇者だから……祟りで消えてしまう命なら……この命を皆の為に使おう……

怖くない……怖くない！！

私は立ち上がり、街を眺めていた。こんなにきれいな世界を私は消させたりしない。だから……

「決めたよ……」

私は神婚することを決意した。

「……何をしてるんだ？友奈」

後ろから声をかけられ、振り向くとそこには海くんがいた。お母さんやお父さん、海くんに気づかれないようになってきたのに……

「え、えっと……散歩を……」

「……もう動くのもきついのか」

海くんは今の私の状況をわかってる。きっと心配してきてくれた

んだよね。

「うん……このままだと春は……」

「友奈……お前の呪いを解く方法が見つかった」

「えっ!」

呪いが解ける方法……それは海くんに呪いを移し、その呪いを海くん自身が浄化する。そうすれば私は助かる。

「で、でもどうして呪いを海くんに……」

「呪いを解く短刀……祝水神刀はまだ未完成のところがあつてな。自身にかかつた呪いしか解呪できないんだ。でも大丈夫だから……」

呪いが解ける……もうこんな苦しい思いはしなくていい……だけど呪いが解けても……

「海くん……呪い……解かなくていいよ」

「どうして?!リスクはあるけど桔梗さんと協力することで……」

「あのね……私結婚するの……神樹様と……」

「結婚……?」

私は海くんに語った。今、神樹様が枯れ始めていること、枯れた時世界が滅びること……でも私が神樹様と結婚すれば世界は……人類は助けられることを……

「何だよ……それ……人間が神の眷属になる……神樹に管理された世界……そんなの……」

「海くん……呪いが解けて、今度は神樹様を救う方法を探すの?」

「当たり前だ!!こんな結末……」

「もう駄目だよ。時間もないって大赦の人が言つてた……」

「それでも何とか……僕の世界ではこんなこと……」

「海くんの世界では女神様が神樹様の結界の維持を手伝っているんだつて……でもこつちで同じようなことは出来ないんだよ。だつて……繋がりがないんだから……」

「それだつたら他の方法を……」

海くんは必死に私を助けようとしてくれている。何だかあつちの私が羨ましいな……こんなに愛されてるなんて……だからこそ私は……

「海くん……もうここにいる私のことで苦しんだりしないで……海くんはあつちの私を幸せにしてあげて……」

私はそう言つて、海くんと別れるのであつた。

ごめんね。あんなこと言つて……でももう海くんが辛い思いをする所見たくないから……

海SIDE

「ここにいる友奈のことで苦しむな……僕の世界の友奈を幸せに……か……」

僕は思いつきり近くの木を殴つた。どうすれば……いいんだよ。

呪いを解く方法が見つかった次は……世界を救う方法……

大赦がやろうとしていることは正しいけど、間違つてている。でもそれしか方法がないのか……

「どうすれば……」

何か方法がないか考え込んでいると、端末から白い光の玉が現れた。エリスさん？

『ウミさん、呪いの方は……』

『エリスさん……僕はどうすれば……』

『何かあつたんですか？』

僕はエリスさんにさつきの事を話した。こんなに考えても答えがない……僕はどうすれば……

『ウミさん……』

「僕は友奈を救いたい……だけど今度は世界を救う方法……友奈は僕にもう苦しんでほしくないって……僕が必死に止めて、友奈には届

かなかいんだ」

最後まで足搔くしかないけど……僕には……

『何を悩んでるんだよ。ウミ』

突然白い光の玉から聞き覚えのある声が聞こえてきた。この声  
……

「カズマさん?」

『エリス様に頼んでお前と話そうと思つてな。それにしても厄介なこと  
が起きてるんだな』

「…………カズマさん、僕はどうすれば……」

『全くウミは一人で悩みすぎよね。前も悩みすぎてとんでもないことをやろうとしてたし』

『今度はアクアさんの声が聞こえてきた。更には……』

『考えすぎて周りが見えなくなつてているみたいですね。そういう所なおした方がいいですよ。ウミ』

『ウミ、一人で悩むな。苦しくなつたらいつでも私達を頼れ』

『そうそう、仲間なんだからさ』

『めぐみん、ダクネスさん、銀の声が聞こえてきた。そうだよな。忘れていたよ……こういう時するべきことを……』

『海くん……』

そして今度は友奈の声が聞こえてきた。

『そつちの私を助けようとしてるんだよね』

『ああ、助けたいから……でも助けようとしても世界が滅びる……他の方法がないからって、友奈は……』

『…………海くんの言葉じや届かななかつたんだね。何だかごめんね』

『いや、お前が謝ることじゃない。それに……みんなの声を聞いてちよつと思いついたことがあるんだ』

『何?』

「みんな、世界を……神樹を救う方法を一緒に考えてくれないか?」

僕の問いかけに皆はすぐに考えててくれるよう返事をしてくれた。

『そうだよな。こういう時は頼らないと……』

『にしても神が消えるのか……』

『まあ、土着神の集合体だからね……それにしてもいつの間にこつちの神樹は私達の力を受け取つてゐるのよ』

『先輩、それはですね。世界が繋がつてゐるからです。道を固定させるのにも神の力が……信仰心が必要ですから……』

『神々が支え合つてゐることだな。だがそつちの世界でも同じことをすれば……』

「いや、無理なんだ。繋がりがないんだつて……つなぎうとしても時間が足らない……」

『何という面倒くさい状況ですね。というよりそちら側のエリスは何をやつてゐるんですか!!どうにかして話して……』

「こつちにそんな術は……」

いや、何だかちよつと氣になることがある。こつちの世界にエリスさんやアクアさんつているのか?

「アクアさん、こつちの世界にアクアさんつているのか?」

『ん? いるわよ。天の神が言うにはそつちの私を誂つては、こつちにきて私の酒を……』

「……いるんだな……それじゃ……」

神樹のことは何とかできるかもしねれない。でもこれには天の神と二人の女神の力が必要だ。あとは……友奈を止めないと……だけどそれも出来るかもしねれない。

「みんな、僕が思いついた方法を聞いてくれないか? 世界も友奈も救う方法を……」

僕の考えを皆に伝えると、みんな協力してくれることになつた。これなら……

## 桔梗SIDE

部室で友奈からある話を聞かされた。それは神樹様と結婚し、世界を救う方法……

「いや怪しいでしょ！何引き受けようとしてんの！」

「違うと思います！」

「今の皆の反応で分かるでしょ？友奈ちゃんの考え方が間違ってる事が」

「東郷さん……」

「友奈、僕もそれは間違っている。そんなことで僕らが……皆が喜ぶと思つていてるのか……」

「それにしても大赦め…!! 友奈！私達もついていつてあげるから、ばしつと断りなさい！」

「場所は私が教えるよ」

「もう我慢ならない！」

「行くわよ！一度潰した方が良い組織になるかもね…」

今回ばかりは止める気にはなれなかつた。こんな事で世界を救つてほしくない。海が言つていた誰も犠牲を出したくないつて思いが今になつて分かつてきた。

「待つて!! 私は…神婚を引き受けるつて……」

「その必要はないんだつて！」

「だつて、死ぬんでしょ…？」

「訳分からない！生贊と変わらないじゃない！」

「こういう時……何で海がいないんだ？何だかあいつはやることが出来たつて言つてたな……」

「神樹様と共に生きるつて何なのかな…」

「とても幸せな事だとは思えないわ」

「でも！私が神婚しないと、神樹様の寿命が来て世界が終わっちゃう

んだよ!?」

「神樹様の寿命は分かるけど、でも、だからって友奈が行く必要はないでしょ！」

友奈は必死に胸を抑えていた。今の友奈は少しおかしい。焦つて  
いる……それだつたら呪いの方を急がないとな。

「勇者部は人の為になる事を勇んで行う部活、でしたよね？これも勇  
者部だとと思うんです：誰も悪くない。世界を守る為に他に選択肢が  
ないなら…それしかないなら…私は勇者だから…」

「ゆーゆ、それしかないとて考えはやめよう？神樹様の寿命がなくな  
るまでの間に、もつと考えれば良いんだよ…」

「だめなんだよ…考えるつて言つても…私にも、もう時間がなくて…  
はっ！」

友奈は何かに驚いていた。もしかして呪いの影響が僕らの胸に出  
てきているのか？

「私達知つてるわ。友奈ちゃんが天の神からの祟りで、体が弱つてい  
る事を」

「その件はもう大丈夫だよ。カイくんの知り合いのおかげで…」

「…それは聞いてます。だけど呪いが解けても世界が…それだつ  
たら私は…」

「大体おかしいです！なんで友奈さん一人がこんな目に遭わなきやい  
けないんですか！」

「でもね樹ちゃん。私は嫌なんだ…誰かが傷付く事、辛い思いをする  
事が…それが今回は、私一人が頑張れば…」

「ダメよ！友奈ちゃんが死んだら、ここにいる皆がどれだけ傷付いて  
辛い思いをすると思つてているの!!私…想像してみたけど…後を追つ  
て、腹を切つているかもしれない!!」

「で、でも…東郷さんだつて…皆を守る為に火の海に行つたでしょ…  
「そうよ！でも壁を壊した私の自業自得でもあるのよ！友奈ちゃんは  
悪くないじやない！反対よ！腹を切るわよ！」

「桔梗くんだつて…」

「僕は皆を救いたいって思つたから、あの時皆の記憶から僕を消して

もらつた。後々皆に怒られたけど……お前はそれが出来なくなるんだぞ……」

「こんな誰かが犠牲になることを望むなんて……だけど今の友奈には言葉が届いていない。

「友奈さんが言うように、勇者は皆を幸せにする為に頑張らないといけないと思うんです」

「そうだよ。だから私頑張つてるよ…」

「皆つて言うのは、自分自身もそこに含まれているのよ！友奈！」

「ゆ、勇者部五力条なるべく諦めない！私は皆が助かる可能性に懸けているんだよ！」

「あんたが生きる事を諦めているじゃない！」

「勇者部五力条なせば大抵何とかなる!!成さないと何にもならない！」

「！」

「友奈！五力条をそういう風に使わない！」

「私は、私の時間がある内に：私の出来る事をしたいんです！だからこうして皆にきちんと相談しました！」

「これじゃ報告だよゆーゆー相談しなきや…」

「相談してるよ!!」

「友奈…その…とにかく、無理すんな…」

「無理してないよ!!勇者らしく、私らしくしてるよ！」

「友奈！皆がここまで言つてまだ分からぬの!!」

「だから！他の方法がないからこうなつているんです!!」

友奈の言葉を聞いた瞬間、僕の中で何かが切れた。いい加減にしろ……他に方法がない？探してすらないだろ

「友奈!!いい加減に……」

「やめてください!!」

僕は友奈の胸ぐらをつかみ、殴ろうとした瞬間、樹が止めた。

「なんで…なんでこんな…喧嘩なんて…」

「樹…すまない」

「ゆーゆ、呪いを解こう。そしたら今度は世界を救う方法を考えよう

「それに一度頭を冷やしなさい。ここに海がないって言うことは、

海と揉めたんだから……ちゃんと謝りなさい」

「友奈ちゃん……」

「私は…………ただ……」

突然友奈は何かに気が付き、部室を出ていった。まさか癌が今までよりも濃くなっているのか？

僕と園子、美森の三人で友奈を追いかけていくのであつた。

## 第17話 古のシステム

僕ら三人は友奈がいると思われる自宅に向かつた。美森は精霊を使つて友奈の自室に入るけど……

「手慣れてないか？」

「気のせいよ」

「ゆーゆ、いないね。端末の反応は……」

友奈は部屋にはいなかつた。端末の反応はここにいるはずなのに……すると美森が机の上に置かれた友奈の端末と勇者御記を見つけてた。

端末の反応はこれだつたのか……

「これつて今日の日付……」

勇者御記には『皆、色々ごめんなさい。私行きます』と書かれてい

た。行くつてまさか……

「大赦だね。行こう」

「ええ、止めないと……」

僕ら三人は皆に連絡して、大赦に行こうとした時、園子の端末に誰かから連絡が来ていた。

「大赦から……もしもし……わかりました。勇者部みんなで英霊碑に来てつて……」

「そこには友奈ちゃんが……」

「そういうえば海の姿がないけど……」

「カイくんもそこにいるつて……行こう」

「ここがそうだね」

「ほら、目的のもの盗つたんだから、行きましょう。お頭」

「はいはい、助手くん。そつちは頼んだよ。私はわたしでやることがあるから」

「ウミに頼まれたからな」

「場所は分かつてゐるの？」

「ウミから聞いてる。あいつらも向かつてゐるはずだから、俺も合流する」

「頼んだ。助手くん」

英靈碑、僕もここには一度来たことがある。何せ銀の魂が眠つてゐるからだ。とはいへ、銀は天の世界の住人になつてゐるから眠つてゐると言うべきか……

そして石碑の前には一人の大赦神官が待つてゐた。そしてそこには海、友海、牡丹も來ていた。

「勇者様に最大限の敬意を」

「やめて下さい」

「ここは歴代の勇者と巫女が祀られている場所」

「私達は友奈ちゃんに会いに來たんです！」

「友奈さんはどこにいるんですか!?」

「今は大赦におられます」

この神官、何だか聞き覚えのある声だつた。どこかで会つたことがあるはずだ……いつだ?

「じゃあ大赦に乗り込むわよ!!」

「友奈様から話を聞かれたかと世界を救う方法は神婚しか残されていません。寿命も残り僅か」

「いや、呪いは解呪できる。ここにいる未来の勇者たちのお陰で見つけたんだ」

「そうだよ。これでママが死ぬことはないんだよ」

海と友海がそう言うと牡丹が辛そうな表情で神官を見つめていた。「私達の世界の大赦はこんな風に誰かを犠牲にしたりしません。どう

して世界が違うだけで……こんなに違うんですか」

牡丹は世界の違いに戸惑っていた。そうだよな。牡丹からしてみれば優しい組織だったのに……

「世界が違うから、そ、同じようには行きません。上里様、貴方もどう思いますか？」

神官はそう言つた瞬間、石碑の裏から巫女の海が出てきた。こんな所に大赦のトップの巫女がいていいのかよ

「世界が違う……それだったら別の方法を考えればいい。こちらでは見つかなくとも、あちら側の海様の世界で……」

「……貴方は最後まで神婚の儀を反対していましたね」

「こんな間違っています」

「もう時間がないのです。友奈様はこれより神婚の儀に入られます」「ふざけるな!!止めてやる!!」

「歴代の勇者様の多くは、お役目の中で命を落とされました。2年前には人類を守る為に、三ノ輪銀様が落命。銀様は人類を守ろうと懸命に戦い、見事にお役目を果たされ英靈になられました」

「私は別に英靈になんかなつてないよ」

なにもない所から声が聞こえた瞬間、眩い光とともにコートを羽織った銀が現れた。

「私はただの勇者だよ。それに人類のためとか言って戦つていたけどさ。あの時は須美と園子を守るために戦つただけだよ」

「銀……」

「ミノさん……」

「……300年前の勇者達もこんな事になるとは思つてないだろくな」

海はゆっくりと神官を見つめ、石碑の周りにあつたモニュメントを見つめた。

「乃木若葉……高嶋友奈……郡千景、伊予島杏、土居珠子……白鳥歌野……の人達は未来で誰かが犠牲になることを望んで戦つていない。お役目とかそんなの関係なしに戦つてきた」

「……貴方に彼女たちの何がわかるんですか?」

「分かるさ……僕らとそう変わらない歳だつた……」

海だからこそ言えることだな。あいつはあの世界で若葉たちと一緒に戦つてきたんだから

「ちょっと待ちなさい。それってここにある墓全部……私達と変わらない子たちが……いつだつて子供達を犠牲にして生き延びてきたつて事じやない……そんな歪な世界つてあるの!?」

「全てを生かす為にはやむを得ないので。それが、この時代における人の在り方」

「…………変わったね。安芸先生」

銀の言葉を聞いた瞬間、僕と美森は驚きを隠せないでいた。安芸先生つて確かに美森達が小学校の頃、勇者のサポートをしていた……僕も一度だけ会つたことがある。

「ピーマンが嫌い……だつたよね。すつごく厳しいけど、ふとした時に見せるチャーミングな所が私は好きだつたよ……でも今は、昔の安芸先生じやないんだね……」

「銀の時、一緒に悲しんでくれたのに……その辛さを知つているなら……もう一人も犠牲なんて!!」

「そうだよ。というより何でこんな事になつていてるのに天の世界に頼まないんだよ。こつちだつて手助けはできるようになつて……」

「三ノ輪銀……大赦の中には未だに天の神を信じられていない人間がいます」

今まで敵対してきて、協力するようになつても信じられないような人がいるのはわかっている。だから大赦は天の世界に神樹様のことを頼まなかつたのか。

「あなた達のクラスメイトは、その友達は、家族は、もうすぐ来る春を待ち遠しく思いながら、家でうどんを食べて、温かい布団で寝て、今日も平和な日常生活を送つてている。少々の犠牲……このやり方で大部分の人達が幸せに暮らしているのです」

「それなら……それなら、あなた達が人柱になれば良いのに!!」「出来るものなら、そうしています……だが、私達では神樹様が受け入れない」

「…………先生。あんたはどうしたいんだ？」

僕は先生の前に出て、胸ぐらをつかんだ。海と巫女海は咄嗟に止めようとしたがすぐにやめた。

「あんたの言葉はただ大赦から言わされている言葉……アンタ自身の心の声をきかせろ!!」

「…………私は……」

先生が何かを言おうとした瞬間、突然僕らの端末からアラームが鳴り響いた。そしてアラームは歪な音とともに地震が起きた。

「どうやら間に合わなかつたみたいだね」

更には空から穴が開き、一人の少女が姿を現した。彼女は天の神……戻ってきたのか？

「天ちゃん…………これって……」

「大赦は大きな過ちを……いや過ちだと気づいて神婚をやろうとしているのか」

「天の神…………どういう事だ？ 一体何が起きているんだ？」

「結城友奈の呪いは私が古に作ったシステム。そしてこれもまた人が神の眷属になろうとした時に目覚めるように設定したシステム……世界は滅びる」

天の神がそう告げた瞬間、空が暗くなり、無数の穴が開いた。そして穴から巨大な何かが姿を現した。

「人の身でありながら、神に近づこうとしたからこそ世界は滅びる。もう私には止められない」

「いいえ、神婚が成立すれば人はもう神の一族。人でなければ襲われない。これで皆は神樹様と共に平穏を得ます。これが最後のお役目。敵の攻撃を神婚成立まで防ぎきりなさい」

最後の最後にこんなことになるなんて……やるしかないのか……

「…………悪いけど神婚成立は叶わないよ」

突然海がそう言い、勇者に変身した。そして天の神にあることを聞いた。

「あのシステム。アレに友奈に呪いをかけたシステムが組み込まれたりとかは？」

「ええ、しているわ。まさかと思うけど、アレを倒す気？あなた達だけで……」

「ああ、僕はそうするつもりだ」

「海……」

「待つて、海くん。神婚成立は叶わないってどういう事？友奈ちゃんを助けて、古のシステムを破壊しても……神樹様を助ける方法は……」

「そうだよ。カイくん。まだ見つかって……」

「いいや、見つけている。こんなこと僕しか思いつかなかつた。天の神、今すぐある二人を連れて、この世界の女神の所に向かってくれ」「女神の所に？それにある二人つて……なるほど」

天の神は何かを理解し、姿を消した。海にしか思いつかない方法つて……

「人のためなら生贊を求めたりしない。世界を滅ぼしたりしない。僕が知っている神様はそういう人たちだつた」

「海……お前まさか……」

「みんな、神樹様のことは何とか出来る。今はアレを何とかしよう」

## 友奈SIDE

空が暗くなり、無数の穴が空いた。あれつて大赦の人人が言っていた古のシステム……

「友奈様、急いで神婚の儀に取り掛かります。システムは勇者たちが

……」

「分かりました……」

「急がないと皆が……世界が……」

「ちよつと待つたアアアアア——!!」

誰かの声が聞こえた。周りにいる大赦の人たちもその声の方を見るとそこには変わった格好をした男の子、黒い格好をした女の子、鎧を着た金髪の女人、そして巫女装束の人と大赦の人と同じ格好をした人がいた。

「誰ですか!?ここは神聖な……」

「悪いけど仲間に頼まれて、そいつを誘拐しに来た」

「なんと無礼な……」

大赦の人達を捕まえようとしたが、金髪の女人が大赦の人たちの前に出て、大赦の人たちを押さえ込んでいた。

「神との結婚……生贊と変わらないじゃないか。こんな物エリス様はしないぞ」

「神樹様が教えたことですから……でも私達は他の方法を考えます。どうして今の時代の人は思いつかないんでしようか……」

「な、ああ、貴方は……まさか……」

大赦の人が巫女装束の人を見て、驚きを隠せないでいた。この人、何だか海くんに似ている気がする……

「神樹様が認めたことでも、この私、初代巫女である上里ひなたが許しません!!カズマさん!!」

「おう、ここにいる仮面ついている奴らは女性だな。だつたらステイール!!」

カズマって言う人が手をかざした瞬間、何故か下着を握っていた。もしかしてあれって……

「下着の次は身ぐるみを剥ぐ」

「カズマ……ゲスですね。所でひなた、このような場所……破壊してもいいですか?」

「めぐみんちゃん。貴方は大事な役割があるんだから……」

この人達はもしかして海くんの……どうして……

ただ呆然としている私に大赦の格好をした人が私に近づきあることを告げた。

「ねえ、これで本当にいいの？」

「えっ？」

「自分を犠牲にして……皆を救うことが本当に勇者なの？」

「そ、それは……」

「それにね。どんなに辛くても、犠牲になつたら駄目だよ。貴方が行くべき場所は分かるよね」

この人、一体何を……それにその声、どこかで……

## 第18話 前日談

それは僕が友奈と結婚してから一週間が過ぎた頃の話……。

僕と友奈はめぐみんのいつもの日課に付き合っていた。激しい轟音が平原に響き渡つていた。

「……どうですか？ウミ」

「何というか前にも増して威力上がつてないか？」

「すごいよ。めぐみんちゃん!!」

「こう見えて日々精進していますから、それに未来で待つている弟子に追い越されないように頑張っていますから」

弟子か……あの二人はちゃんと未来に帰れたのかな？いや、造反神との戦いで友海と牡丹がちよつと未来から来たから大丈夫か？

いつか来る未来を期待しつつ、友奈はめぐみんを背負い、僕らは街へと戻るのであつた。その途中友奈がある話をしていた。

「そういえば東郷さんと桔梗くん、付き合い始めたんだって」

「……いや、何でだよ……もう少し待つたほうがいいんじゃないのか？」

「トウゴウは幼い子好きでしたか……」

めぐみん、それを本人に言つたら怒られるからな。というか何がどうなつてそうなつたんだ？

「あ、付き合うつて言つても、お見合いして……」

見合いか……まあそれならいいのか？

「私達の次は東郷さんと桔梗くんの結婚式だね」

「何年後になるんだよ……それにあの二人より早くに結婚しそうなのがいるじゃないか」

僕はめぐみんの方を見てそう言うと、めぐみんは顔を赤らめていた。

「な、何ですか！私は別に付き合っている人は……」

「めぐみんちゃん、いつになつたらカズマさんと結婚するの？」

「な、ななな、つ、付き合つてすらないのに……」

「素直にならないと駄目だぞ……僕らの時に色々と動いてくれたんだ

から協力くらいはするぞ」

「めぐみんちゃん、相談にのるからね。勇者部五箇条一つ、悩んだら相談」

「うう……」

めぐみんは顔をうつむかせた。というかカズマさんもめぐみんのこと意識しているんだから、近いうちにくつつきそそうだな……

そんな話をしていると屋敷の前にたどり着いた。だけど何故か中が騒がしい。僕らは急いで中に入ると……

「だから私のお酒を返しなさいよおおおおおお!?」

「あら、これは戦利品よ。いいじゃない。これぐらい」

泣きじやくるアクアさんと何度も会ったことがある天の神がリビングにいた。僕らはカズマさんに何があつたのか聞いてみた。

「何というか天の神が遊びに来て、アクアとトランプで遊んでたんだけど……どうにも勝負が白熱して、アクアが自分のお酒をかけに出して……」

「ごめん、だいたい事情は分かつた」

ようするにボロ負けにしたんだな……というか別世界の天の神がこんな所に着ていて大丈夫なのか?こつちの天の神に怒られないのか?

「ああ、それなら大丈夫。ちゃんと許可はもらってるからね。遊びに来て、女神を逃うくらいはね」

僕の心を読んだのか……神様って本当にするいな……

「今戻つたぞ。つて何だ。アクアはまた泣かされてるのか?」

「というかダクネスさん達も天の神がここに来ていることになれすぎてないですか?」

銀、僕が言いたいことを言つてくれてありがとう。まあ僕の結婚式でエリスさんが出てきて色々と感覚が麻痺しちゃつたんだろうな……

「さて、水の女神を逃つたことだし、私は帰ることにするよ」

天の神は指を鳴らしたが、何も起こらない。何度も指を鳴らすがどうやら帰れないみたいだった。

「ふーくすくす、何、帰れないの……」

「ふむ、どうやらそうみたいね。どうにも下の連中が道を閉ざしたみたいだね」

「あなたの世界の住人に嫌われるの。くすくす」

天の神を笑うアクアさん。そんなアクアさんを天の神はアイアンクローを喰らわしていた。

「全く人がいない間に面倒事を……」

「何だ？ 何かあつたのか？」

「女神の勇者。悪いが少し君の精霊を借りるよ」

天の神がそう告げた瞬間、部屋の天井に穴が空き、エリスさんが落ちてきた。というか女神を普通に呼び出していいのかよ

「な、何ですか？ 何が……って、天の神……貴方が呼んだんですか？」

「ちよつと厄介事が起きていてね。自分の世界に戻れないんだ」

「はあ……それで私は何をすれば……」

「色々と迷惑をかけるから、見過ごしてほしいかな。特に神器改造、神器複製やらね」

エリスさんはその言葉を聞いて、身体を震わしていた。改造やら複製とかつて、天界規定とか何やらに触れそうだな……

「そ、そこまでしないと駄目なんですか？」

「ああ、神の予感としては必要になるからね。そつちの女神を特典にした男にも協力してもらうからな」

「俺も？」

本当に何があつたんだ？ でも僕としては桔梗さんに恩が返せるからいいかな……

僕は色々と準備を済ませると天の神が僕の腕輪に触れた。

「天の神の力で君は望んだ世界ではなく、時空を越え、制限なくいられるようにしておいた。あちらには女神一人が事情を話しておいてくれる」

「分かりました」

「海くん、気をつけて」

「何かあつたらすぐ私達を頼れ」

「神くらいなら我が爆裂で吹き飛ばします」

「あつちの須美達にもよろしくな」

皆に見送られる中、この場にいないカズマたちのことが心配だな。カズマさんが腕輪を作り、エリスさんと天の神が腕輪に力を宿す……もしかしたら必要になるからっていうけど……

「まあ保険だよ。おまけにあなたが使っている腕輪の効果に一つ加えて、こちらの世界のスキルとやらを使えるようにしてある」

「まあすぐに終わらせてくるから、大丈夫だと思うけど……とりあえずいってきます」

僕は皆に見送られながら、世界を超えていくのであった。

## 第19話 友奈の思い

友奈S I D E

海くんの友達が暴れている中、私は大赦の姿をした人にあることを告げられた。

「今、あそこでは皆があの巨大なものと戦つてる。世界の……人類のために、でも貴方はここにいていいの？」

「わ、私は……私が神婚すれば世界は……」

「それは本当に貴方が思つてることなの？」

「えつ？」

「死んじやうのは怖いよね。みんなとお別れするのは嫌だよね。貴方はその気持を必死に抑えて世界のために死のうとしている……本当のことと言つて……」

この人、どうして私の気持ちがわかるの？ 本当は死ぬのは怖い、皆とお別れするのは嫌だ。でも、私は世界のためだからと自分に言い聞かせてきたのに……

「私は……怖い……呪いで死ぬのも、神婚で死ぬのも……皆とお別れるのも……もつと生きたい。生きたいよ……」

この人に私の本当の思いを告げると、大赦の人は私の端末を取り出し、渡してきた。

「それじや生きるために今、あそこにいる皆と一緒に戦おう」

「あ。貴方は……それにその声……どこかで……」

大赦の人は仮面と着ていた服を脱ぎ捨てるとそこには私がいた。この人……もしかして……

「行こう。友奈ちゃん」

「……はい」

私は私の手を握り、同時に変身した。今からならまだ間に合うよね。

「流石は海くん、言つたとおりですね」

「うん、自分たちの言葉が通じないからつて……私に頼んできたもんね」

「全く夫婦して手のかかる人ですね」

「えつ、夫婦つて？」

「あつ、友奈ちゃんに言わなかつたけど、私と海くん、結婚してるんだよ」

そ、それはそれで結構驚きなんだけど……というより年は大丈夫なのかな？」

「ユウナ、お前たち二人はめぐみんを連れて、先にいけ。ここは私と力ズマとひなたでどうにかする」

「まあ、どうにかしちゃつて終わつてるんですけどね」

「おうい、この奪つた下着どうするんだ？」

カズマつて言う人は、女の人の下着を握りしめながらそんなこと言つて いるけど、本当に海くんのお友達なのかな？

「とりあえず燃やしましようか」

「「「まつ、待つてください。ひなた様！」」

「ここは二人に任せていいこう」

「う、うん」

「ふつ、今回は神様みたいなものですか。いい的になりますね」

### 桔梗SIDE

古のシステムが現れ、僕らは勇者に変身した。あんな巨大なものとどう戦えばいいのかわからないけど……今は考える必要はないな。

「皆、私も一緒に戦うよ。この世界のために……」

「ミノさん……うん」

「一緒に……戦おう」

「おう」

「それじや皆、アレを倒して、すべてを終わらせましょう。勇者部出撃!!」

先輩の掛け声とともに僕らは駆け出した。そして世界は樹海に変わると、古のシステムから無数の矢が降り注いだ。

「ここは僕が!!先輩、借ります」

「ちよつと私も……」

先輩と海が大剣を取り出し、無数の矢を防いでいく。だけど防いでいく内に矢が二人の大剣を貫いていった。これって……「どうやら風が怪我したのって、こいつの仕業みたいね」「精霊の守りが効かないってことですか？」

「そんなの関係ない!!」

先輩は上に大きく飛び上ると同時に僕と美森の二人で矢を撃ち落としていく。だけど矢が別の方から襲ってくるのが見えた。あれって、反射板か!?

「先輩!?

「まずっ!?

「させないよ!!」

先輩に襲いかかる矢を園子が防いでいた。今度はいくつものサソリの尻尾が現れ、二人に襲いかかろうとしていたが、銀が飛び出し、尻尾を切り裂いていった。

「古のシステム……十二のバー テックスの力を使えるみたいだけど、オリジナルのほうがもつと手ごわかつたよ」

「ミノさん、かつこいいー!!」

「そのつち!!油断しないで、まだ攻撃が来る!!」

古のシステムの中心部が開くと、そこから炎を纏った星屑が無数に現れ、襲い掛かってきた。銀曰くオリジナルに及ばないって言うけど、これは厄介すぎだぞ

「全員、一旦下がつ……」

先輩とそのつち、銀の二人が突然現れた何かに吹き飛ばされた。そして僕らの前に三人を吹き飛ばした奴が現れた。こいつってまさか……

「キキヨウか……」

「…………」

言葉を話せないということは古のシステムが作り出した影みたいなものだよな。だとしてもかなり厄介だぞ

「ちよつとまずいわよ!! アレから無数の影が生み出されていくわよ」

「私達の影も……」

「数で押し切るつもりかしら? 厄介すぎよ!?」

「でも、これぐらいで……」

美森が迫りくる影を撃ち落としていく中、上空から炎を纏った星屑が襲いかかろうとしていた。僕が咄嗟に守ろうとするが間に合わない……くそ、

「ハアアアアアアアアアアアアアア!!」

突然、炎を纏った星屑を誰かが切り裂いた。あの衣装と刀は……まさか……

「…………遅いでですよ。若葉さん」

「すまない。遅くなつた」

助けに入ってくれたのは乃木若葉……300年前の勇者であり、園子の先祖……この人つてまさか……

「ちよつと海、この助つ人、誰よ?」

「乃木若葉さん、そのつちのご先祖様で、勇者だよ」

「こちらでは初めてましてだな。海に言われて私達も助けに来た」「私達つて……」

無数にいた影達が気がつくと数が減つていった。そして影の大群の中から何人もの勇者が現れた。

「若葉、先行しすぎだつて」

「タマつち先輩、仕方ないよ。未来の勇者たちのためだもん」

「まあ、若葉はパワー全開だからね」

「それでも少しは抑えないと駄目ね」

「グンちゃん、しようがないよ」

土居珠子、伊予島杏、白鳥歌野、郡千景、高嶋友奈……みんな、海

が呼んだのか……あいつの間に……

「ちよ、ちよつと、友奈よね」

「えつ？あ、私は……」

「夏凛ちゃん、彼女は違うわ。似ているけどそうじゃない」

「流石は東郷ね……どの世界でも見抜けるなんて……」

「説明は後だ。今はこいつらをどうにかしないと……」

「パパ、お待たせ」

「勇者の皆さんを誘導してきました」

牡丹と友海の二人の姿がなかつたと思つたら、誘導してきましたんだ  
な。こういうことは最初に言つておいてほしいのだけど……

「おう、これであとは……」

海は遠くの方を見ていた。誰かが来るのを待つていてるのか？

## 第20話 集いし者たち

桔梗SIDE

若葉たちのお陰で古のシステムが生み出した影達を殲滅したけど、古のシステムの攻撃はまだ猛威を奮っていた。

僕らは攻撃を避けていくが、海はじつと何処か別の方向を見ていた。

「海、さつきから何を待っている!?

「桔梗さん……神樹が……」

海の言葉を聞き、全員が神樹様を見ると枯れ始めてきている。もう限界が近いっていうのか?

「神樹様が……海が言つていた作戦は本当に大丈夫なの?」

「まだわからないけど……上手くいくはずだ」

海は白月を取り出し、炎に包まれた星屑を切り裂いた。このまま敵の攻撃を耐えるだけじゃ駄目だ。何とか打開策を……

「パパ、私のパンチで攻撃を与えれば……」

「いや、あそこまで届かないけど……」

「それなら私が運ぼう!! 切り札発動! 大天狗!!」

若葉が黒い翼を広げ、友海を抱えた。あれが若葉の切り札か……

「ご先祖様のそれって、満開?」

「いや、これは切り札だ。満開とは違つて身体を犠牲にすることはないが、精神汚染や肉体疲労は大きい。だが……」

「私達も!!」

高奈の号令とともに西暦時代の勇者たちが切り札を発動させた。そして若葉と友海の道を作るために迫りくる攻撃を防いでいった。

「一気に行くぞ!!」

「はい!!」

猛スピードで友海を古のシステムの目の前まで運んだ若葉。友海は拳を大きく構え……

「師匠とママ直伝!! 爆裂! 勇者パンチ!!」

眩い光が込められた拳が古のシステムに当たるとした瞬間、古の

システムの中心部から赤い光が放たれ、辺りが赤い光と眩い閃光に包まれ、光が止むと若葉と友海の二人が空から落ちてこようとしていた。

「友海!!」

「若葉ちゃん!!」

落ちてくる二人を牡丹と高奈の二人が受け止めたけど、古のシステムにはダメージが無かつた。

「うう……」

「くつ……」

「あんなものまで……それだつたら私も満開を……つてゲージが……」

「フーミン先輩、事故に遭つた時にゲージが消費されたんじやないのかな?それで……」

「そんな……だつたら……」

先輩は大きく飛び上がり、大剣を限界まで大きくさせた。

「満開が使えなくつても!!これでええええ!!」

灯華SIDE

英靈碑に来ていた私は巫女様と神官の姿を見つけた。  
「状況は……」

「勇者様たちの劣勢です。このまま行けば世界もろとも全滅……」

「だからって神婚は……」

「あ、あの、今、連絡があつて上里ひなたつて言う人の友達に結城ちやんが攫われたつて……」

「ひなたつて……まさか彼が呼んだつていうの？」

「神婚ではなく全く別の方法で世界を救うなど……」

二人が俯く中、私はポケットから壊れた端末を取り出した。

魔王システム……私が宝生に利用されて、大赦や勇者たちを傷つけようとしたシステム。捨てられずにいて、他の世界でもいつの間にか持っていた。きっと必要な時が来るのだろうと思つていたけど……

「今がその時だよね。勇者と魔王が手を取り合う時だよね」

私は静かに祈つた。お願ひだから……私に力を貸して……神樹様でも、天の神様でも、天使でも、悪魔でも……

その時だった。英霊碑が光り輝き、私の端末に光が集まつた。そして壊れたはずの端末が動き出した。

「これつて……」

「歴代の勇者様達が……」

「力を貸してくれているということですね」

「うん……ここにいる皆も一緒に世界を救いたいんだ」

私は端末に浮かび上がつた紋章に触ると巫女服に薙刀を持った姿に変わつた。

「ありがとうございます。そして行こう」

私は皆のところへと向かうのであつた。

## 海SIDE

風先輩の斬撃は古のシステムに当たろうとしていた。だけどその直前で十一体のバー・テックスの影に防がれてしまっていた。

「そんな……」

「ここまで来て……」

「くつ、満開!!」

東郷が満開し、砲撃を行つて古のシステムを攻撃し続けるが、ダメージが通つていなかつた。そして古のシステムから獅子型のバー・テックスが現れ、真っ黒な炎の塊を生み出し、僕ら目掛けて放つた。

「ゆ……友奈ちゃん、ごめんね」

「くそ!？」

桔梗さんは炎の塊の前に飛び出し、精霊の障壁で防いだ。だけど精霊の障壁を通り抜け、桔梗さんを炎に包み込んだ。

炎が消えると桔梗さんはそのまま地面に落ち、あちこち焼け焦げていた。

「大丈夫か……美森……」

「桔梗くん……ん」

「このまま……終わるっていうの……」

「神樹様も私達を……」

先輩と樹の二人が諦めかけていた。このまま神樹は枯れ、世界は古のシステムに滅ぼされる。こんな絶望なんて受け入れることは……

獅子型バー・テックスはもう一度黒い炎の塊を放とうとしていた。

今度は僕が皆を……

「ハアアアアアアアアアアアア!!」

突然、誰かが黒い炎を切り裂いた。今のは……

「部長、みんな、お待たせしました」

「あんた!? 灯華!? どうして……それにその姿……」

「魔王システムですよね。どうして……」

「皆が力を貸してくれました。私も勇者部特別部員ですし……一緒に戦います」

「皆つて誰よ……でも、助かるわ」

「勇者と魔王が協力しあつて戦うつていいね！」

「みんな!! また攻撃が来るぞ!!」

若葉さんがそう言つた瞬間、獅子型は黒い太陽へと姿を変え、僕らに襲い掛かってきた。それだつたら……

「ダブル!! 勇者パアアアアアアアンチ!!」

僕が切り札で対抗しようとしたけど、黒い太陽を突き破つてやつてきた二人が僕らのところへ降り立つた。全く……遅いよ

「…………みんな、遅くなつてすみません。結城友奈、帰つてきました」

「友奈……あんたね……」

「友奈ちゃん」

「東郷さん、ごめん……ごめんね。酷いこと言つて……夏凜ちゃんも……」

「別にいいわよ。というか……」

「あの友奈さんが二人いるみたいですが……」

「ゆーゆ、分身できたの？」

皆がもう一人の友奈を見て、驚いていた。それもしょががないよな。正真正銘もう一人の友奈だし……

「えつと、私は……」

「僕のいる世界の友奈で、僕の奥さんです」

「「「「はあ!!」」」

「海くん、今説明するところなの？」

「あの、まだ戦いが終わつてないですし……」

灯華さんがそう言う中、古のシステムが友海の爆裂勇者パンチを相殺した攻撃をしようとしてきた。まずはアレを防がないと……

『ウミさん、祝水神刀を構えてください』

突然声が響き、僕は言う通りにすると巨大な閃光を水の障壁で防いだ。今の声つて……

「エリスさん?」

『お待たせしました。説得の方は完了です』

『今、カズマたちの所に行くところだけど、何処にいるのかしら?』  
『それともう変化は出ているはずだ。神樹の方を見ろ』

「みんな、神樹が……」

「あれって」

「まさか海がやろうとしていたことって……」

みんなが神樹の変化に驚きを隠せないでいた。さつきまで枯れ始めていた神樹から水色と白い光に包まれていた。あれって……

「ねえ、なんか……声聞こえない?」

「この声、タマつち先輩……」

「うん、あの人の声だよな」

夏凜がそう言う中、杏さんたち……というより僕と初代組はこの声に聞き覚えがあつた。やっぱりこの声って……

『さあ、四国にいる人間たちよ。集合体の言うとおり神婚すれば幸せになるわけ無いわ。これからは私とエリスが世界を守つてあげる。だから崇めなさい!!』

『先輩、もつと言ひ方が……でも仕方ないですよね。自分自身に煽られたみたいですし……人の子たちよ。今、あなた達がするべきことはただ祈るのはやめ、今、世界を……人類を救おうとしている勇者たちを応援することです!!』

こつちの世界のアクラさんとエリスさん……ありがとうございます。

「なにこれ……みんなの声が……」

「これってあの声の人達が言つたとおりに……」

「温かい……」

「神様たちは人を信じてくれたから……助けてくれたんだよね。わっしー、ミノさん」

「ええ」

「これなら……」

皆が暖かい光に包まれる中、僕は白月と祝水神刀を地面に突き刺した。

「そろそろ終わらせようか……満開と切り札を合わせ、更に女神たちの力を借りる」

「それだつたら……僕は……」

気がつくと桔梗さんが起き上がり、天神刀を構えていた。

「天神刀よ。あの古のシステムを倒す力を貸してくれ」

『ユウナさん』

「えつ、はい。えつと……』

『私は女神エリス。神婚はもうしなくて大丈夫です。そしていまは彼らと共に行つてください。神樹が最後の力をこの子を通して送つてくれています……』

友奈の前に牛鬼が現れ、光の薔に友奈が包まれた。そして僕は水の柱に、桔梗さんは炎の柱に包まれ、眩い光が消えると同時に、僕は白と水色の神秘的な衣装に姿を変え、桔梗さんは真っ赤な神秘的な衣装に包まれ、友奈はこれまで見たことのない神秘的な衣装に、目がオツドアイに変わっていた。

「これって……神樹様が」

「天神刀が僕の身体に……』

「神の奇跡つてやつですね。それじゃ終わらせようか」

## 第21話 神々に愛された勇者三人

桔梗SIDE

神様たちの力を借り、僕らは古のシステムを見つめていた。この姿……集中しないと体中の力が爆発しそうだ。だけどこれなら……。

「行くぞ。海、友奈」

「うん……そういえば海くん。こつちに来る前に海くんのお友達を降ろしてきただけ……」

「それってもしかして黒い衣装の？」

「うん」

「あいつなら大丈夫だ。合わせてくれるはずだ」

黒い衣装つてもしかしてあの子のことか？あつちで色々と言つてたけど、海は何をしようとしているんだ？

「とりあえず今は!!」

「ああ、三人で決めるぞ!!」

「人を……世界を守るために……」

「「勇者!!パアアアアアアアンチ!!!」」

僕ら三人は古のシステムに向かつて行つた。古のシステムも僕らに対して赤い光を放とうとしていた。この拳はこの世界の、人類の未來がかかつてているんだ。そうそう止められるわけには行かないんだ。赤い光と僕ら三人がぶつかりあつた。敵の攻撃が強すぎるせいか少し押されているけど、まだ諦めるわけには……

「めぐみん!!頼む!!」

海がそう叫んだ瞬間、どこからともなく声が響いてきた。

「天の使い、太陽、絶望、私の前では全部破壊できます。我が名はめぐみん!!最強のアークウェイザードにして、どんな時も勇者たちを勝利に導いてきた最強の魔法の使い手!!神が作ったシステムなど、爆裂魔法で破壊します!!エクスプロージョン!!!」

眩い光が古のシステムを包み込み、古のシステムにヒビが入つていつた。あの大きさでの威力……本当に最強の魔法だな

「「今だああああああああああああああああああああああああああああああああああ!!」」

古のシステムの攻撃が止まり、僕らは一気に上空に上がつていった。そして僕らは力の限り叫んだ。

「勇者部五箇条!!」

「ひとつ!!なせば!!」

「大抵なんとか!!」

「「なる!!!」」

僕らは一つの光になり、古のシステムを貫いていた。古のシステムはさつきの魔法でひび割れていたのが、更にひび割れ、壊れていった。これが僕らの……勝利……だ

すると僕らの姿が元の勇者の姿に戻ると、僕の前に天神刀が、海の前に祝水神刀が、友奈の前に牛鬼が現れ、光にの粒になつて消えていった。

「もう必要ないってことか?」

「そうかもしれない……」

「桔梗さん、友奈、見てください……世界が……」

世界が光りに包まれ、見る見るうちに天の炎が消えていった。そして新しい大地が現れた。これって……

『勇者たちのお陰で、世界は元の姿に戻りました。これからは我々二人の女神と天の神、そして人類で手を取り合い、元の形に変えていきましょ……』

『犠牲とかそんなの必要ないわ。必要なのは私達をずっと崇め続けることよ』

『これから先は争いもない。幸せな日々を……願い続けなさい』

三人の神の声が聞こえた。世界は救われたんだよな。ほんとうの意味で……

僕は気がついたらおかしな空間に来ていた。僕の部屋なのだろうけど、何だか色がおかしい。

「ここは……」

「お疲れ様」

突然声をかけられ、振り向くとそこには一人の少女がいた。彼女は僕の保護者であり、別の世界では……

「何だか大変なことになつたみたいだね」

「ええ、貴方の方は？」

「私の方は……」というより未来を託した子孫は頑張っているよ。彼女の場合は今回みたいに他の世界の勇者たちと一緒にっていうことは出来ないけど……

少女は優しく微笑んでいた。

「でも信じているから……きっと彼女なら大丈夫つて」

「……」

「これから先は大変だけど、私は見守っているから……」  
「ええ、がんばりますよ。姫野」

夢から醒めると僕らは学校の屋上にいた。その場には若葉たちの姿もなく、海やあちら側の友奈の姿はなかつた。帰つたのか？

「海くん……終わつたの？」

美森も目が覚め、僕に声をかけていた。僕は起き上がりあたりを見渡した。壁は消えている。世界は変わつたんだな

「ああ、終わつたんだ。世界は救われたんだ」

「良かつた……友奈ちゃん……」

「痣が消えてる……ありがとうね。みんな……ごめんね」

「友奈……忘れんじやないわよ。皆のためとかいうよりまずは自分の幸せを忘れないように……」

「先輩……はい」

友奈は救われ、これで全部終わつたんだな。だけど少し気がかりなのは神樹様が消え、世界は二人の女神に守られるけど……

これから先どうなるのだろう？

「神樹は最後に友奈に力を託したんだ。そして二人の女神ならば大丈夫だ。僕が保証するよ」

どこからともなく海の声が聞こえた。あいつが言うなら大丈夫だよな。

すると全員のお腹から音が鳴り響いてきた。みんな、恥ずかしそうにしているけど、先輩は立ち上がり……

「それじゃこれから祝勝会でも始めましょうか。もちろん、うどんですね」

「「「「「はい」」」」

## 第22話 世界のその後

みんなで祝勝会ということでうどんを食べに行くのであつた。友奈は神婚用の衣装からジャージに着替えていた。どうにも着替えをあっちに置いてきてしまつたみたいだ。

「ゆーゆ、後で大赦が届けてくれるから大丈夫だよ」

「うん、でも迷惑かけちゃつたし……大丈夫かな？」

「まあ大丈夫でしょう」

そんなことを話しながら、いつものお店に入る僕達、だけど僕らは目を疑つた。

「久しぶりにこここのうどん食べたな！」

「海くん、仕方ないよ。大変だつたし」

「おまけにこつちでも色々とあつたからな」

「私達の時間でもこのお店ありますけど、味は変わりませんね」

「おいしいね。パパ、ママ、牡丹」

何故か海と眼鏡をかけ、ちょっと髪が伸びた友奈と友海、牡丹がうどんを食べていた。

「いや、何ですよ!？」

咄嗟に夏凜がツッコミを入れると四人は僕らに気がついた。本当に何でいるんだよ。

「皆もうどんを食べに?」

「疲れてるのに、今日くらいは休んだほうがいいんじゃないんですか?」

「お父様、お母様、席の方取つてありますよ」

「きっと来るつて言つてたから」

「いやいやいや、平然と喋つてないで……ああもう、とりあえず話し聞かせなさい」

とりあえず一旦落ち着くために、みんな注文を終え、うどんが来るまでの間海たちから話を聞くことになつた。

「本当なら僕らも帰るはずだつたんだけど」

「ひなちゃんからまだ女神の加護がどう影響するかわからぬから、

しばらくここに残つたほうがいいって言われたの」

「私たちもそれに付き合うことに」

「大赦からも話は通つてゐるから大丈夫だつて、ひなたおばあちゃんが」

「いやいやいやいやいや」

先輩と夏凜の二人が焦る中、僕はさつき海が残した言葉を思い出していた。もしかしてあんなこと言つた後にこんなことになつたのか？それはそれでちょっと恥ずかしいよな

「あの、ちょっと気になつたんですけど、どうして友奈さんはメガネかけてるんですか？」

「それにちょっと髪も伸びてゐるわね」

「眼鏡はこつちの私と見分けがつくようにしてゐるからで、髪も同じようになつて……」

「まあ年齢的にはこつちの友奈より一つ上ぐらいだから」

「「「はあ！」」

「おい、海、お前今、いくつだ？」

「15だよ。時の流れとか違うから……」

「うん、時の流れもちょっと違うから、私もいつの間にか東郷さんより年上になつちゃつたんだよ」

何というかそうじやないかつて思つていたけど、海の場合、僕より年上になつてもさん付けで呼んでるから気にしなかつたけど……

「それでカイくんとゆーゆ、ゆうちやんとたんちやんはしばらくここにいるつて言うけど、何処に住むの？」

そういうえば住む場所とか考へてるのか？また友奈と園子の家に居候するとしても、人数が人数だし、困惑しそうだし……

「住む場所はちゃんと決めてるよ。ようやく大赦も準備してくれたし」

「夏凜ちゃんのお家の隣だよ」

「何というか想像はできてたけど……」

「そういうわけで先輩、暫くの間勇者部でお世話をになります」

こうして海一家はしばらくこの世界にいることとなつたのだつた。

それから数日後、少しづつだけど変化は訪れていた。神樹様が消え、世界は女神一人に守護されるようになつた。今は再生した大地を天の世界の住人達と大赦で新しく作り変えている。

女神二人はこれから先、犠牲のない世界を作つていくつもりらしい。大赦も女神の言葉を聞きそれに応じるようになつた。ただ気になることは、あの戦いの最中女性神官数名の下着が奪われ、燃やされたという話があつたけど、その奪つた人物を聞く限り海の仲間みたいだけど……海曰くしようがないらしい。

勇者部の変化といえば、勇者部五箇条に一つ加えられ、六箇条になつた。それは『無理せず、自分も幸せであること』だつた。先輩曰く今回のこと踏まえてのことらしい。

そして僕はと、大赦から貰つた勇者御記を書き続けることにした。今回の戦いやこれからのこと未来に受け継いでいくようにするために……

「あ、あのお父様……」

「ん？ 何だ？ 牡丹」

もう一つ変化があつたとするならば、何故か牡丹が僕の家に住むことになつた。海一家と住む話になつたのだけど、牡丹たつての希望らしい。

「えつと……その……お母様と……」

「美森と？」

「その……なんでもないです。少し出かけてきます」

牡丹はそう言つて、出ていった。なんだろう？何を言おうとしていたんだ？何とか別世界の娘とは言え、自分の娘には変わりないけど、なんというか遠慮している。どうしたものか……。

「子供の気持ちがわからない」

「はあ？」

僕は部室で先輩に相談することにしたのだけど、先輩は思いつきり困っていた。

「あんた、子供いないくせに何を悩んでるのよ」

「いや、牡丹のことなんだけど……」

「ああ、そういうえばあんたと東郷の子供だつたわね。それでわからな  
いって？」

「何というか遠慮しているつていうか……何か言いかけるんだけど、  
すぐに諦めて……」

「まあ子育てつて誰だつて初心者だしね……というかこういうことは  
私じゃなくつて東郷に相談したら？」

「美森にですか？」

「そう、別世界の子供だけど、こういうのは夫婦で何とかするしか無い  
わ」

いや、先輩、まだ僕ら結婚してないんだけど……海達も異世界では  
結婚はしてるけど、後々ちゃんと適応した年になつたら改めて結婚す

るつて言つてたし……

「とりあえず今日の放課後、デートなんで相談してみます」

「普通に“デートとか言わないでほしんだけど……”

## 第23話 夫婦と子供と

放課後、美森とデートするため学校の校門前で待っていた。先輩には美森にも相談した方がいいと言うけど、お互いまだ子供だし……問題が解決できるものか……

あつちでは牡丹とそれなりに仲良く出来たのは、牡丹が今よりも少し成長していたからっていうのもあるしな……

本当にどうしたものか……

「お待たせ、桔梗くん」

「ああ、みも……」

悩んでいると美森に声をかけられ、振り向くと何故か美森の隣に牡丹がいた。これはどういうことなんだ?

「あの、お母様。本当にお邪魔じやないですか?」

「大丈夫よ。ごめんね桔梗くん。風先輩が牡丹ちゃんと一緒に出かけてくれないかつて言わされて……」

「僕は別に大丈夫だけど……」

風先輩なりに気を使つたって言うことかな?

「こちら友海。対象三人が動き出しました」

「了解。追跡行うよ」

「いや、あんたら何してるのよ?」

「どうか友海、お前もそのつちに付き合はなよ」

「えへへ、何だか楽しそうで」

「一度二人のデートを見てみたくつて」

「園子さん、流石に尾行するのは……」

「今回ばかりはあの三人がどうにかするしかないわ。私達がどうこうすることもできないしね」

「ええ、わっしーときょうくんのデート見たかったのに～」

「そのちゃん、一緒に出かけたりしなかつたの？ 私、二人のデートについてつたことがあるよ」

「友奈（さん）…………」

「何というか、大物ね。友奈って……」

「どうか普通ついていくか？ そこの所どうなんだ？ 友奈」

「私も普通はついていつたりしないけど……」

「え？ え？」

「どうしたの？ 桔梗くん、さつきからキヨロキヨロして？」

「いや、何だか見られてる気がして……」

一瞬だけ視線を感じた。まさかと思うけど尾行されてるとかじゃないよな。でも何でまた尾行なんて……園子あたりは考えそุดけど……

「お父様、疲れてるんじや……」

「なのかもしねないな」

気のせいだと思いながら、三人で楽しむ中、牡丹の様子がちょっとおかしい。さつきから手をのばすけど、すぐに引っ込める。それを繰り返している。何なんだ？

「牡丹ちゃん、どうしたの？」

「えつ？ え……何でもないです」

本当にわからない。こういうことは両親に聞けばそれなりに分かるのだろうけど……いないし、保護者のあの人にはあの人でまだ未婚だしな……

「……」

美森は牡丹を見つめ、そつと牡丹と手を繋いだ。

「はぐれたりしたら、大変だからね」

「え、その……」

「ほら、桔梗くんも」

「ああ」

僕も言われるまま、牡丹と手を繋いだ。牡丹は恥ずかしそうにしているけど、何故か嬉しそうにも見えた。もしかして……牡丹は

「ありや、仲良く手を繋いでるわよ」

「結局尾行するのね」

「夏凜、これぐらい予想はできてただろ」

「まあね」

「でも、牡丹ちゃんは何について悩んでいたんでしょうか？」

「樹お姉ちゃん、それはね、牡丹は甘えたかつたんだと思うよ」

「甘えたかつたつて……東郷をもつと固くした感じのあの子が？」

「昔のわっしーにそっくりだよ！ 固くつて！」

「でも甘えん坊なんだよね。一緒に寝ようとしてるけど、中々言い出せなかつたり～」

「何というか子供らしいところがあるのね。子供なんだけど……」

また何かしらの視線を感じた。これって絶対に誰かしらに尾行さ

れてるだろう。あと問い合わせるとして、今は牡丹はトイレに行つてゐるし、美森に話しておくか

「牡丹と暮らしてて、どこかよそよそしい感じがしてな。さつきようやくわかつたんだ」

「牡丹ちゃん、甘えたかつたんだね」

友海の場合はあの性格だから甘えられるけど、牡丹の場合は甘えたくつても恥ずかしくつて、甘えられないみたいだしな……

「もし、私達に子供が出来たらいっぱい甘えられるようにしようね」

「そうだな……名前はもちろん」

「牡丹」

僕らは同時にそう言うと、お互い笑いあつた。何というか未来のことを考えるつていうのはいいことかもしれないな。

「ねえ、桔梗くん……」

美森はそつと目を閉じていた。公園とは人の目があるけど……僕は気にせずそつとキスをしようとしていると、

「あ、あの……」

「!?」

トイレから戻つてきた牡丹が物凄く戸惑つていた。こういう時つてどうすればいいのか……

「す、すみません。気を使えば……」

「いや、気を使わなくつていいからな」

「そ、そようよ。大丈夫よ」

「い、いえ、本当にごめんなさい」

戸惑う牡丹をなだめていると、今度は皆からメッセージが入つた。確認すると……

『友海と樹の教育に悪いから、ひと目を気にした方がいいですよ』海

『出来れば教室でもね』夏凜

『もう春がきたんだね』園子

『あんたら、節操つていうものをね……』風

『お幸せに』友奈

『結婚式とかの相談だつたら乗るからね』上里友奈

『牡丹は気を使つてゐるけど、もつといちやついてほしいって思つてゐ  
から氣にしない方が良いよ』友海

「あいつら……全員で覗き見してたのか……」

「これは後で全員お仕置きが必要だな

「牡丹ちゃん、お詫びに何かしてほしいことがある?」

「えつと……お詫びなんて……あつ、でも、出来れば……その、お母様、

今日泊まつていつてくれませんか?」

「んん?」

「出来たらその……一緒に寝たいです」

「えつと……」

「何というか……」

「こういう時、本当にどうすればいいのか……」

結局説得しても、牡丹は頑固で聞き入つてもらえず、美森が僕の部屋に泊まりに来るのであつた。

「何だかきゅうにごめんね」

「いや、氣にするな。とはいへ、食料有つたつけかな?」

「それじや荷物置いたら、一緒に買物に行こうか。牡丹ちゃんも」

「はい」

まあこういうのもいいかも知れないな……

そう思いながら、僕の部屋の前に行くと帽子をかぶつた女性が立つていた。

「お客様?」

「…………もしかして……」

僕はあの人が誰なのかすぐに理解した。まさか……帰つてくるな

んて……

「……桔梗。おかえり」

「えっと、桔梗くん? この人……」

「お父様?」

「何で連絡しないんですか。姫野さん」

僕は名前を告げた。この人は僕の保護者であり、長い時の中でも色々と関わりのある人でも有るのだつた。

## 第24話 姫野と神宮と

僕は突然やつてきた姫野さんを部屋に入ることにした。とか帰つてくるなら前もつて連絡してほしいのだけど、今日は牡丹の希望で美森が泊まることになつてゐるのに……

「ふう、久しぶりに來たけど、あんまり変わつてないわね。ここも」

「姫野さん、連絡くらいしてください」

「……ごめんなさい。携帯忘れてきちゃつて、おまけにここに鍵も置いてきちゃつたの」

相変わらずだ。本当に変わらないな……

「えつと、桔梗くん、この人は？」

「親しいみたいですが、お父様？」

とりあえず二人には紹介しないとな。というか姫野さんにも紹介をしないと……

「美森、牡丹。この人は僕の保護者で姫野四葉さん」

「……はじめまして、姫野四葉です。そちらの方は東郷美森さんですね。桔梗の彼女の。そつちは……えつと……」

「あつ、東郷牡丹つて言います。えつと別世界の……」

「ああ、二人の子供ですね。報告の方は聞いてます」

報告つて、大赦はどこまで……いや、海のやつはどこまで喋つてるんだ? とはいへ、事情を知つてゐるなら説明する必要はないな。

「それで姫野さん、帰つてきた理由は?」

「桔梗くん?」

「お父様、何だか聞き方が……」

「一人がそう言うが、僕としてはいつも通りだからしようがないんだよ。よ。

「お二人とも気にしないでください。今日帰つてきたのは、明日一緒に墓参りに行きましょう」

墓参りか……そういうえば久しく行つてなかつたな。それにしても本当の突然だな。

「美森さん、牡丹さん、お二人とも……それと……」

姫野さんは部屋の壁の方を向き、笑顔で……

「聞き耳立ててる方々は申し訳ありませんが、付いてこないでくださいね」

まさかと思うけど、隣の部屋から聞き耳立ててたのか？というか夏凜もよくそんな目的のために家に入れたな……

### 海SIDE

そのつちがコップを使って聞き耳を立てていたが、何故か突然土下座していた。

「そのちゃん、どうかしたの？」

「あんまり聞き耳立てない方がいいわよ。あとで桔梗に怒られるわよ」

風先輩がそう言うが、何故かそのつちは体を震わせていた。本当に何があつたんだよ

「それにしても桔梗さんの部屋の前にいた女人、誰なんでしょう？」「あの人は桔梗の保護者よ。大赦で何度か会つたことがあるわ。名前は姫野四葉だつたかしら？」

夏凜と面識があるということはそのつちと面識があるということだな。それにしてもある人が姫野さんか……僕が知ってる姫野さんとはぜんぜん違うな……

「うーん？」

「あれ？上里ちゃん、どうかしたの？」

何故か友奈（上里）が唸つているのを見て、友奈（結城）が心配そうにしていた。ちなみに二人は名前呼びではなく、名字呼びをしている。まあ皆が困惑しないようにの配慮だけ……

「えつとね。あの姫野つて言う人、どこかで会つたことがあるんだよね」

「友奈、僕らの世界には姫野って言う人は大赦にはいられないらしいよ。お姉ちゃんからそこら辺確認はとつてある」

平行世界の影響か、僕らの世界には姫野って言う名前の人はない。まあ似たような名前で四葉姫乃って言う人はいるけど……でも僕もあの顔の面影……どこかで……

「何処でだつけ……」

「友海はわからないか？ 僕も見覚えがあるんだよ」

「遠くからでよく見えなかつたけど、千景おばちゃんにそつくりだつたよ」

「ああ、千景さん…………んん！」

僕はある一冊の書物を思い出した。アレに書かれていたのは神宮家と郡家の関わりだつたような……いやでも、あくまで神宮家と郡家だし、姫野家との関係は……

「そのつち、詳しいことは……」

「あの海さん、園子さん、さつきから震えていて駄目です」

「一体何があつたんだ？」

お寺に来ていた。昨日感じた視線は感じなくなつたということは、どうやら皆は付いてこなかつたみたいだけど……

「お久しぶりです。神宮さん」

姫野さんは墓前でそうつぶやいていた。そういうえばちょっと気になつてゐることがあつた。姫野さんつて千景にちょっと面影が……。

「桔梗くん、どうかしたの？」

「いや、ちょっと……姫野さん、聞きたいことがあるんですけど、神宮家と姫野家つてどんな関係があるんですか？僕が知る限りでは30年前の付き合いだつて……」

「…………」

姫野さんは黙り込んでいた。答える気はないつてことか？それならそれでいいけど……

「…………こにお父様の…………」

「ああ、僕の両親とおじいちゃんが眠つてゐるんだ。あつちだとまだ生きてゐみたいだけど……牡丹、悪いな。こんな所に付き合わせて……」

「いいえ、こうして連れて行つてくれてありがとうございます。お祖父様方……東郷牡丹つていいます。別世界から來ましたお父様とお母様の娘です。きっとこちらでもお父様たちは私のことを大切にしてくれると思います。だから……見守つていてください」

何だか恥ずかしいな……それに責任重大なことを言われてしまつた。頑張らないとな。

「…………桔梗」

姫野さんはそんな牡丹を見てか、古めかしい勾玉のアクセサリーを僕に渡してきた。これも見覚えがあるんだけど……

「神宮家に伝わる大切なものです。これには一人の女の子が娘のために幸せであつてほしいという思いがこもつたものです。無くさないでね」

一人の女の子が娘のために……それつてもしかして……

「姫野さん、神宮と姫野と郡つて……」

僕の先祖である神宮は千景さんことを愛していた。千景さんの

危機に神宮は彼女を守つたつて言う話は僕は知っている。そして姫野は……

「桔梗、それ以上は言わない方が良いわ。心のなかにしまつておきなさい」

本当に話す気はないつて言うことか……だけど姫野さんは空を見上げ……

「姫野四葉は…………親友の幸せを願っていた。だからこそ…………私もそうするだけよ」

「親友の幸せか…………だから僕の保護者になつてくれたんだな。

「それじゃ帰りましょう」

僕らはそのまま家に帰るのであつた。神宮と姫野……もしかして僕と姫野さんつて……

## 第25話 風の悩み

桔梗さん達が出かけているとき、僕はとすると大赦に呼び出されていた。

なんでも僕が呼び出されたのかわからないけど、もしかして世界を守ってくれている女神関係かまたは例の下着強奪関係か……

女神関係ならまだいい。だけど下着強奪に関しては僕は関係なくないか？あれってカズマさんなりの脅しだし、燃やすように言つたのはお姉ちゃんだし……それで責任取れって言われたら、僕はどうすればいいのやら……

ため息をつきつつ、大赦に指定された部屋に入るとそこには巫女服姿の少女が一人待つていた。

「急なお呼び出し、大変失礼しました。海様」

「お前か。海」

まさか待つっていたのはこっちの世界の僕だつたとは……それにしても本当に似ているな。あの世界で女の子になつていた時の僕に……いや、僕なのだから似ていて当然か

「それで用つてなんだ？」

「はい、実はと言うと……その……」

何故か恥ずかしそうにしていた。何だ？何を言う気だ？この子は

「わ、わた……私のお兄ちゃんになつてくれませんか？」

うん、どこかの王女様と魔法使いに続いて今度は別世界の自分に言われるなんて思つても見なかつたよ

「あー、悪いんだけど……」

「ふふふ、冗談ですよ」

海はいたずらっ子見たく笑つていた。こいつ……

「冗談を聞かされるなら帰るぞ」

「待つて下さい。本題に入りますから……」

「帰ろうとする僕を止める海、仕方ないからちゃんと話を聞くか

「実はですね。私、今年の4月で中学生になるんですよ」

「何だ？まだ中学生すらなかつたのか」

これまでこいつと話した印象では小学生には見えなかつたからな……というか小学生のくせに天の神を天ちゃんつて呼んでるのかよ……いやまだ子供だからいいのか？

「今まで大赦が選んだ学校しか行けないように言われ続けていたのですが、この間の戦いで大赦の方針が変わり、ちょっとした自由を得られました」

嬉しそうに語る海。家の都合上自由なんてなかつたみたいだからな。僕も一時期そんな感じだつたし……

「まあ讃州中学なら大赦も反対しないし、いいんじゃないのか？」

「はい、ただ……」

「ただ？」

「勇者部に入りたいのですが、私でも入れるでしょうか？」

勇者部か……海に活動とかについていけるのか？何気に肉体労働が多い活動だしな……

「悩む必要はないだろ。特に拒んだりとかしないし……僕の方から部長にそこら辺聞いてみるよ」

「お願いします」

まあ先輩なら一発OKだろうな

次の日、僕は先輩に海が讃州中学に入り、勇者部に入部したいと言う話をした。

「別に拒む理由はないし、それに友奈たちも色々とサポートしてくれるしね」

「とりあえずOKつてことですね。伝えておきます」

「それにもしても乃木家に上里家……夏凜から聞いてた大赦のツートツ  
プが集まる部活ってどうなのかしら?」

「まあ何とかなるとしかいえませんね」

「そうだけど……ねえ、海。相談したいことがあるんだけど

「相談ですか?」

「ええ、言い方悪いけどあんた、一応部外者みたいなものじゃない」

「一応勇者部所属ですけど……僕も友奈も……」

「そうね。悪いんだけど聞かれたら色々とまずいから、今晚あたりお  
邪魔していいかしら?」

別にかまわないけど、一体何の用なのだろうか?

時間が経ち、僕らの家に風先輩がやつてきた。とりあえず友奈と友  
海の二人には来ることは伝えておいた

「お邪魔するわよ、それにしても仲が良い夫婦ね」

「何を見てそんな事言つたんですか?」

「だつて、なんでおそろいの服を三人して着ているのよ。もう夫婦つ  
て言うより家族ね」

いやこれは友奈と友海が……

「えへへ～私たちの世界の先輩も同じ事言つてました」

「それに仲が良いのは当たり前だよね～パパ、ママ」

「このほんわか親子め……」

否定はしませんよ。

「そういうえば先輩。相談つてなんですか?海くんから聞いて入るんで  
すけど……」

「そうだつたわね。実はさ……私つて卒業するじゃない。それにとも  
なつて新しい部長を決めないといけないんだけど……誰にするか悩  
んでるのよ」

新しい部長か……僕らの世界では夏凜がやつてるんだつけ？先輩  
は結構悩んだ結果だつて言つてたしな……  
「誰が良いかしら？」

## 第26話 新部長について

海SIDE

「新部長……夏凜とかどうですか？」

「夏凜ちゃん、しつかりしてるし、私達のことよく見てくれてるよね」

まあ僕らの世界でも夏凜が部長してるし、大丈夫かと思うけど……

「夏凜ね……まああの子ならって思うけど、正直他のみんなに振り回されそうね」

確かに言われてみれば……友奈や東郷、そのつちに振り回され、最後まで付き合つてくれただけど、その内に倒れそうだな……

「それじゃ東郷さんは？東郷さんもしつかりしてるよ」

「東郷ね？」

しつかりつていうよりかはしつかりしすぎてるし、責任感強くそのうち暴走しそうだな。

「まあ保留ね」

「それじゃパパ、桔梗おじちゃんは？」

桔梗さんはもしかしたら意外と部長にぴったりかも知れないな。みんなの事をしつかり見てるし、力を抜くときはしつかり抜くし……「桔梗は無理よ。あの子、前に部長をやらないかって聞いた時に、大赦関係で忙しいみたいだし」

そういうえばあの人も幹部クラスの家系だっけ？ それじゃ結構難しいかも知れないな

「まさつきあげた一人が候補ね」

「あれ？ 私とそのちゃんと樹ちゃんは？」

友奈とそのつちはなんというかな……部長つて役割ではない気がするんだけど……

とはいえた本当のことは言わない方が良いな。

樹はどうなんだろうな？

結局新部長が誰が良いかなんて決まらず、次の日の放課後、僕と先輩と樹の三人で勇者部の活動を頑張っていた。

僕らの活動は猫を里親に届けるというものだつた。比較的簡単な仕事だから良かつたのだが、

「海～見つかつた？」

「いや見つからないですね」

まさか連れて行く途中に逃げ出すなんて……油断していたな

「お姉ちゃん、海さん、見つけました」

「うそ、どこに？」

「まさか……」

「あそこです」

樹が指を指した方を見ると猫は木の上に登つて降りれなくなつていた。

「あちや～こりや大変だわ。仕方ない、登つて……」

「お姉ちゃん、私行くよ」

樹がそう言つた瞬間、木に登り始めた。まさか樹が……風先輩も心配そうにしていると樹は無事に猫の所まで登りきり、猫をしつかり抱きしめた。

「ほら、怖くないよ～」

「樹～降りれる～」

「う、うん」

流石に猫を抱きしめながらだと降りるのは難しいかもしれないな。仕方ないと思い、僕は勇者に変身して樹の武器で下ろすのであつた。

「海さん、ありがとうございます」

「樹が木の上に登るなんてびっくりしたけどな」

「えっと、何だかすぐに助けないとつて思つて……」

「全く、正直木に登り始めたときはヒヤヒヤしたけど、お手柄よ。樹」

樹の頭を撫でる風先輩、樹は何だか嬉しそうだつた。う～ん、何と

「……いか樹がな……これつて……」

「先輩」

「ん? 何?」

「実は樹が部長でも良いかもしれないですよ」

「樹が!? なんでもまた?」

「さつきの行動を見て思つたんですよ。樹は人一倍助けたいって思ひが強いって……勇者部部長にぴったりなんじやないですか?」

「……樹が……そうかもね。それに樹が部長だつたらみんなも助け合つてくれそうだしね。案外いいかも」

こうして新部長は決定するのであつた。それに後で海に伝えておかないとな。勇者部入部と新部長に迷惑をかけないようにつて

仕事も終わり、僕らは部室に戻るとみんなも戻つてきていた。だけど……

「う、海くん」

何故か友奈が顔を赤らめていた。どうしたんだ? 何かあつたのか? 友奈(妻)とそのつちは何故かニコニコ笑つてるし、夏凜、東郷、桔梗さん、牡丹は心配そうにしてるし、何故か友海はワクワクしてるけど……

「どうしたんだ?」

「わ、私とデートして下さい」

## 第27話 友奈とのデート？

何故か部室に戻つたら、いきなり友奈にデートしてくださいつて頼まれた。普通だつたら、喜ぶべき所なんだけど、相手はこつちの世界の友奈だ。

ということはこれは浮気になるつていうことだ良いな。

妻である友奈は笑顔だけど、あの笑顔が怖すぎだろ。絶対に怒つてるよ。怖い、怖すぎる。

というか浮気なんかしたら、友奈よりも東郷に殺されそなんだけど……いや東郷に殺されるな。

僕は東郷の方を見て……

「東郷、出来れば楽に殺してくれ」

「な、何を言つてるの？ 桔梗くん、海くんどうしたの？」

「何というか友奈の突然の発言で、頭が困惑してるんだ。海、落ち着け」

「落ち着けって、友奈、めっちゃ笑顔だけど怒つてるよね。あれ……」

「海くん、私は怒つてないよ」

「一から説明するからちゃんと聞けって」

### 桔梗SIDE

少し前、僕らはみんなで海岸のゴミ拾いに精を出していた。

「桔梗くん、はい、お茶」

「うん、ありがとう。美森」

僕は美森から貰つたお茶を飲むとあることに気がついた。これつて美森の飲みかけの……

美森は何だか顔を赤らめてるし……

「間接キスだね」

「わざわざ言うなよ」

二人でそんな話をしている中、夏凜たちはと言うと僕らの様子を見

て、

「あの二人本当にどうにかならないかしら？」

「夏凜さん、本当にすみません」

「でも、私たちの世界の二人よりイチャイチャしてるよね」

「東郷さん、幸せそうでいいね！」

「本当に暖房入らずだよ！」

「…………」

「どうかしたの？結城ちゃん」

「あ、えつと……東郷さんと桔梗くんの一人見てて思つたんだけど、恋人同士つてどんな感じなのかなって……」

「とても幸せなことよ」

友奈たちの話に僕らも混ざつた。それにしても恋愛とかそういうのにあんまり興味がなさそな友奈がそんなこと言うのは珍しいな。あと美森が幸せだつて言つてくれて、ちよつとうれしいのだけど

……

「友奈もそのうち分かるんじゃないのか？」

「うーん」

「あ、それだつたらいい方法あるよ」

「いい方法？」

あれ？何だか嫌な予感がしてきた。友奈（上里）、まさかと思うけど僕が友奈の彼女になつてちよつとしたデート体験させるつもりか？いや、まさか……

「海くんとデートしたら？」

「「えつ!?」」

夏鈴、牡丹、僕が同時に驚きの声を出してしまつた。いや、友奈、それは色々とまずいんじゃないのか？自分の夫をだぞ

「え、でも、それつて浮気になるんじや……」

そうだ。友奈の言うとおりだ。海のことだ。多分浮気だと色々と気にするからな。

だけど友奈（上里）は友奈に何か耳打ちをした瞬間、何故か顔を真赤にさせていた。

「わ、わたし、頑張つてみる」

友奈がやる気になつたけど、大丈夫なのか？これ……

海SIDE

「というわけだ」

「というわけつて……」

「協力してあげて、海くん」

友奈、お前気にしなすぎだろ。というか何かしらの目論見あるのか  
？耳打ちしたつて言つてたけど、何を言つたんだ？

「え、えっと海くん、ダメかな？」

まあ頼まれた以上は引き受けるべきだな。ただ尾行には気をつけ  
ないとな。特にそのつちには

「そのつち、一応言つておくけど」

「大丈夫だよ、尾行とかしないから～」

うん、ついていく気満々だな。どうにかしてまく方法考えないと  
な。

次の日の休日、友奈との待ち合わせ場所に来ている僕。特に視線は  
感じない。作戦は成功したつて言うことだな。

みんなの前で言つた待ち合わせ場所は二セの待ち合わせ場所。本  
当のところはあとで友奈に知らせておいた。何というか尾行される  
のはちょっと嫌だからな……何というか桔梗さん、ごめんなさい  
「お、お待たせ」

慌ててこっちに走ってきた友奈。何というか同一人物とは言えこ  
れ、本当に浮気にならないか心配だ。友奈が許しているとはいえ……  
「そんなに待つてないよ。それでどこ行く？」

「えつと……海くんが行きたい場所でいいよ」

僕が行きたい場所か。この世界にあるかどうかわからないけど、一つだけ行きたいな。

「それそこに行く前に食事でも行くか」

「うん」

「ふふふ、私たちを欺こうとするなんて甘いよ～カイくん」

「……園子、お前もこりないな。この間姫野さんに怒られたのに」

「だつて～気になるし～それに今回はゆーさんが頼んだことだもん」

「えへへ、ごめんね。二人とも忙しいのにこんなこと頼んで」

「別にこれぐらいは……でもなんで海とデートなんて言い出したんですけど？」

「ううんと、結城ちゃんの気持ちが分かるからかな」

友奈の気持ち？どういう事だ？

「それでも海くんが行きたい場所ってあそこかな？」

食事を終え、友奈と一緒に僕の行きたい場所に着いた。そこは何の変哲もない木の前だつた。

「ここつて？」

「ん、言うなれば僕が友奈のことを好きになつた場所かな」

「上里ちゃんのこと……」

「好きになつたというよりかは意識し始めたつていうべきだな」

僕は友奈に語つた。僕が生まれたときからずっと勇者のサポート

をしていくことが義務付けられたことを、そんな話を聞かされて芽生えたのは勇者と一緒に戦いたいって思いだつた。

なんで僕には勇者としての素質がないんだ。どうして彼女たちが苦しく辛い思いをしているのに、僕はただ見守ることしか出来ないんだって……

「そんな思いを秘めながら、僕はお前と会つて言われたんだ」

彼女たちの辛さを知つた上で僕はちよつと無茶をした。だけどそんな時に友奈に言われたことがある。

「あの言葉を聞いて僕は友奈の事を好きになつたのかもしれない」

「…………海くん…………あのね、伝えたいことがあるの」

「伝えたいこと?」

「海くんにはもういるけど……伝えたいの。私…………貴方のことが好きです」

「…………」

友奈の好意は気がついていた。でも僕にはもう守るべき人がいるんだ。だから普通はその想いに応えることは出来ない。

「友奈…………ありがとうな。お前の気持ちは嬉しいよ」

「…………でも海くんには上里ちゃんがいるから…………」

「僕はどんな世界でも友奈を救いたい」

友奈は驚いた顔をしていた。この言葉は僕がこの世界に来てからずっと心に刻み続けたものだ。

どんな世界でも友奈がピンチになつても、僕はお前のことを好きだから救けたい。

「今の言葉が僕の返事だよ。確かに僕には守るべき存在はいるかもしれないけど、それでも…………」

「海くん…………ありがとうね。上里ちゃんの事…………私の事幸せにしてね」

「ああ」

「どんな世界でもか……あいつ、欲張りだな」

「そこが海くんの良いところだから……前に海くんに言われたから……同じ人間だけど違う人間のことを好きになつたらダメかつて……」

「……」

海くんは本当に優しいからこそ、あんなことを言えたんだ。それだつたら私が言えることは……幸せにしてあげてねとしか言えない。

「ゆーさん、ゆーさん、聞きたいことあるんだけど良いかな？」

「何？そのちゃん」

「ゆーさんがゆーゆに言つた言葉つて、もしかして……」

「そのちゃん、それは秘密だよ」

私があの時に言つた言葉、それは結城ちゃんの気持ちのことだつた。ちゃんとお別れする前に伝えたほうが良いって……

「私だつたら浮気にはならないよ」

「……なあ、園子」

「うん、カイくん、浮気したら本当に大変かもしれないね」

## 最終回 勇者よ永久に

3月、別れの季節になつた。

僕らが勇者になつてから色々な事が起きた。バー・テックスとの戦い、世界の真実、天の神との和解、勇者に憧れた少女を利用した魔王との戦い。

「桔梗くん、どうかしたの？」

「ん？色々と思い出してたんだ」

別世界での造反神との戦い、異世界でのキメラとの戦い、そして古のシステムとの戦いで、世界は本当の意味で作り直された。  
これから先、どんな未来が待つているかわからなければ、きっと平穏な未来が待つていてんだろうな……。

「桔梗くん、そろそろ行こう。みんなが集まってるよ」

「ああ、行こう。美森」

僕は美森と一緒に部室へと行くのであつた。なんてたつて今日は大事な日だからな。

今日は卒業式、風先輩は今日で讃州中学を去る日もある。部室にはみんながもう集まっていた。

「あ、桔梗くん、東郷さん。何処行つてたの？」

「ようやくひと目を気にしていやつくようになつたの？」

夏凜、別にいやついていたわけじゃないんだけど……

「今度いやつく時は場所を教えてね、見に行くから」

「園子、あとで姫野さんに報告しておくからな」

僕がそう言つた瞬間、園子は体を震わせていた。どうにも昔物凄く怒られたらしくそれ以来姫野さんのことを怖がつていてるみたいだ

「何というか樹、頑張りなさい。部長になつたんだからみんなをまとめるんだから」

「えつと、夏凜さんも手伝つて下さいね」

「わかってるわよ。部長」

「うんうん、部長も副部長もこれなら安心できるわ。まあ私はちよくちよく遊びに来るけどね」

卒業しても来るのかよ。下手すれば怒られそうなんだけど……  
「そいいえば海くんたちは来なかつたね」

友奈は少し寂しそうにそう言つていた。海たちは卒業式前に元の世界に帰つていつた。本当は式には参加したかつたらしいけど……  
「あの子たちもあの子達で色々と大変なのよ」

できればいてほしかつた。ちよつと見せたかつたものがあつたし  
……

「そいいえば桔梗。あんた、さつきから大事そうに持つてるそれ何？」  
先輩は僕が持つていてるスケッチブックを見つめていた。これはあの戦いが終わつてから書き続けたものだ。

「先輩も卒業ですから、ちよつとした記念に……」  
僕はみんなに絵を見せた。それはみんなが勇者に変身した姿の集合絵的なものだ。

「あんたつて本当に……」

「前に私達の絵を一枚一枚書いてくれましたし……」

「一応家にしまつてあるけど……」

「私もしまつてあるよ」

「私は額縁に飾つてあるわよ」

「いいな、私もらつてないよ」

「園子のは後で描いてやる。それにこの絵、ちゃんと全員分あるぞ」  
僕は集合絵をみんなに渡した。ちゃんと一人ひとり真ん中に立つているように描いたものだ。ただ渡したい奴らがいないのが少し残念だ。

「また会えるよ」

美森は僕の気持ちを察してかそう言つてくれた。そうだよな。またいつか会えるよな。

すると部室の扉からノックが聞こえ、誰かが入つてきた。  
「こんにちわ。4月から入部希望の上里海です」

「海様、お願ひですから走らないで下さい。怪我したら怒られるんですよ」

巫女姿の海と灯華がやつてきた。そういうえば来賓席に座つてたな。流石に神官がきたらまずいということで灯華がお付きとして来ていたみたいだし

「だつて勇者部をお作りになつた犬吠埼風様の卒業なんですよ。ちやんと挨拶をしておきたいので、卒業おめでとうございます。風様」「様はいらないわよ。これからあんたも勇者部に入るんだから……」

「そうですね。では先代で」

「そ、それもどうかと思うけど……まあいいか」

海と先輩は握手を交わす中、今度は部室の天井に穴が空き、そこから誰かが落ちてきた。

「おつと、場所間違えた」

「銀（ミノさん）!?」

「よつ、須美、園子、私もお祝いしに来たんだけど、部外者でもいい感じかな？」

「あらいいわよ。人数が多いほど盛り上がるしね」

「天の神もよく許したな。まあいいや、ほらこれ」

僕は銀にも絵を渡した。銀は少し驚いた顔をしていた。

「私ももらつていいの？」

「当たり前だろ。お前も勇者部の一員なんだから」

「そつか……ありがとう」

銀にも渡せてよかつた。でも残つた4枚の絵……いつになつたら渡せるだろうな……

そう思つた瞬間、僕の端末に誰かから連絡が入つた。

「知らない番号？ 誰だ」

『繫がつた、繫がつた。世界は別でも番号は同じなんだな』

『海!? お前、帰つたんじゃないのか?』

『一回報告しに……それよりも全員で窓の外見てくれないか?』

『海くんから?』

「何だつていうの?」

美森と先輩の二人は電話の内容を気にしている中、僕はみんなに窓の外を見るように言つた瞬間、遠くの方から花火が上がつた。あれつて……

『先輩に言つておいてくれないか？卒業おめでとうつて』

粹な演出だな。卒業祝いに花火なんて……というか怒られないか心配なんだけど……

ふつと気がつくといつの間にか四枚の絵がなくなつていた。そしてある声が聞こえてきた。

『届けておくね』

この声つて……あんたも来ていたのか……ありがとう、この恩はいつか返すよ。

「パパ、どうだつた？花火みたいに爆裂勇者パンチを擊つてみたんだけど」

「ああ、良かつたぞ。もう師匠を越えたんじゃないのか？」

「えへへ、私はまだまだよ」

「でも許可をもらつてているとはいえ、本当に良かつたんでしょうか？」

「ううん、大丈夫じゃない？私達の結婚式の時にめぐみんちゃん、花火上げてくれたし……怒られたりしなかつたよ」

「そ、それは異世界だからじゃ……」

四人でそんな事を話す中、上から紙が落ちてきて、僕らはそれを拾い上げた。

「これって……」

「お父様が書いたんですよね」

「素敵な絵だね」

「うん」

なんでこんな所にあるんだろうって思つたけど、絵が届いた瞬間、  
ある声が聞こえた。

『届けたよ。世界が紡いだ証を』

この声……いつか恩を返さないとな。姫野さん

それから僕らは部室で精一杯楽しんだ。本当は夕方になつたら解散するつもりだつたのだけど、いつの間にか園子が許可をもらつていたらしく、学校に泊りがけでパーティーを楽しみ……

深夜、僕は外で空を眺めていると美森が隣に座ってきた。

「綺麗だね」

「ああ」

「戦いは終わつて、世界は再生して……これから大丈夫なのかな?」

神樹の祝福がなくなつて、二人の女神の祝福に満ちあふれているけど……どんな未来が待つて いるかわからない。だけど……

「世界がどうなるかわからないけど、僕はお前を幸せにする未来は確実だと思うぞ」

「……桔梗くん……」

「結婚しような。美森」

「はい」

僕と美森はキスをするのであつた。これからさきの未来と一緒に歩めるように……

300年前、人類と天の神との戦いが始まった。それは辛く長い戦い……いつか来る平和を望み続けた。そして私が勇者として戦つたとき、彼と出会った。彼は大切な親友の願いで勇者の力を得たけど、彼もまた辛い思いをすることになった。私のせいだと自分を攻め続けたけど、彼は許してくれた。彼は勇者になり、友達と一緒に戦い続け、自分の過去と向き合い、友達を……大好きな人を救うために自身を犠牲にした

彼は天の神との対話で、世界を、神々を繋ぐもの……境界の勇者になり、世界は一時の平穏が訪れた。だけど人類の中には悪意を持つものがいた。その人は勇者に憧れた少女の思いを利用し、勇者に対抗するシステム、魔王システムを作り上げ、平穏を壊そうとしていた。だけど境界の勇者と私達勇者は立ち上がり、少女の思いを守り、魔王を打ち倒した。

彼は異世界で、二人の勇者と出会った。一人は女神に祝福された勇者、みんなのためにその身を犠牲にした優しい子。一人は勇者たちを守り続けると決意した守り神の勇者。出会いを得て、異世界を救つた。だけど戻ってきた彼に待っていたのは、愛した人との別れだった。彼女は自分が犯し罪を償うためにその身を犠牲にしようとした。だけど、仲間たちに救われた。

だけど僕らに待っていたのは、人一倍誰かを助けたいという思いを持った少女にかけられた呪いだった。誰にも話すことが出来ず、彼女の心は壊れかける中、女神の勇者に、僕ら勇者部に支えられ、呪いを打ち消すのであった。これで本当に平穏が訪れるのであった。

「こんなもんでいいのか？」

「うんうん、ありがとうね～二人とも忙しいのに」

「大丈夫だよ。そのちゃん。でもどうして私達二人なの？東郷……美森さんや風先輩、樹ちゃん、夏凜ちゃんたちに書いてもらつたほうが良いんじや……」

「大赦としては、二人に是非書いてほしいって言うんだって、私もそれが良いって思ったの」

「それにも勇者御記がこんな感じで書くことになるとはな」  
ましてやアレから10年後にこんなことを頼まれるなんて思つてもみなかつた。

「今生きている人たちに、未来の勇者たちに語り継いでほしいから……私達の物語を」

「いまを生きている……未来の勇者つて言うと……」

「そういうえば大丈夫かな？訓練の方？」

「大丈夫だろ。同じかどうか分からぬけど僕らは会つたことがあるんだから」

あれから10年、僕と美森は結婚、友奈も結婚して一児の母になつた。そして友奈も考えることが一緒だなんて……

「未来の勇者、牡丹と友海か」

「私の初恋の人がいいって言つてくれたから……」

初恋の人か、あいつは今頃何してるんだろうな？幸せにやつているだろうか……でもきっと幸せだろうな。

「二人とも、この本のタイトル言つてもいいかな？」

「勇者御記じやないの？」

「ううん、違うよ。タイトルは『勇者よ永久に』だよ」

僕らは歩き続ける。未来を。紡いで語り継いでいく。未来を生きていく人たちに……